

P No.	検出面径	底面高	深さ	備考
1	40×26	110.40	50	貯藏穴?
2	33×30	110.70	20	
3	26×22	110.44	46	
4	21×18	110.46	44	
5	32×30	110.79	11	
6	18×17	110.50	40	
7	28×28	110.67	23	
8	23×21	110.72	18	
9	19×17	110.50	40	
10	28×27	110.47	43	
11	26×25	110.74	16	
12	40×36	110.55	35	貯藏穴?
13	38×28	110.42	48	
14	25×22	110.60	30	
15	25×21	110.71	19	
16	23×23	110.41	49	
17	26×25	110.52	38	
18	33×28	110.57	33	
19	40×40	110.44	46	20より古い
20	20×20	110.48	42	19より新しい
21	28×24	110.37	53	碟
22	25×25	110.33	57	

註 深さは110.90mを標準にして計測したものである。

第3図 第1・第2竪穴住居跡

〔平面形・規模〕 残存部の周溝及び柱穴配置から第1竪穴住居跡同様に大型の長円形をなすと推測される。

〔床面〕 残存部ではほとんど平坦である。壁は確認されていない。

〔周溝〕 北辺の一部を残す。幅は20cm前後、深さが僅か3cmで、痕跡を残すのみである。

〔柱穴〕 柱配置からP2、P6、P9、P13、P17、P21の6柱穴が伴うと考えられ、第1住居跡の柱配置に酷似する。柱穴は直径20~30cmほどで、深さが20~33cmと一定していない。概して南東部のものが深い。北端の2柱穴は近接してやや小さく、南半の3柱穴は外方に向って斜めに掘られている。

〔炉〕 炉跡は確認されていない。ただし、第1住居跡の南0.5mに0.72×0.65mの浅い方形のAi80土壙があり、炉跡の残存部ではないかと考えられる。規模が第1住居跡のそれに極めて近似している。

〔出土遺物〕 伴う遺物は確認されていない。

第3(Ba80)竪穴住居跡(第4図、図版1)

第3竪穴住居跡は壁と周溝の一部によって確認されたものである。調査地の南東部にあり、段丘崖の南約25mの地点に位置する。

〔重複〕 南西部にBb80土壙があり重複している。新旧関係は確認されていない。

〔平面形・規模〕 東西約5.0m、南北約4.2mの不整楕円形をなし、北辺と南西部にゆがみを有する。南西部は第4図で明らかなように周溝が壁の内側で彎曲しており、掘りすぎと考えられる。すなわち、平面形はやや整った楕円形をなすと考えられる。

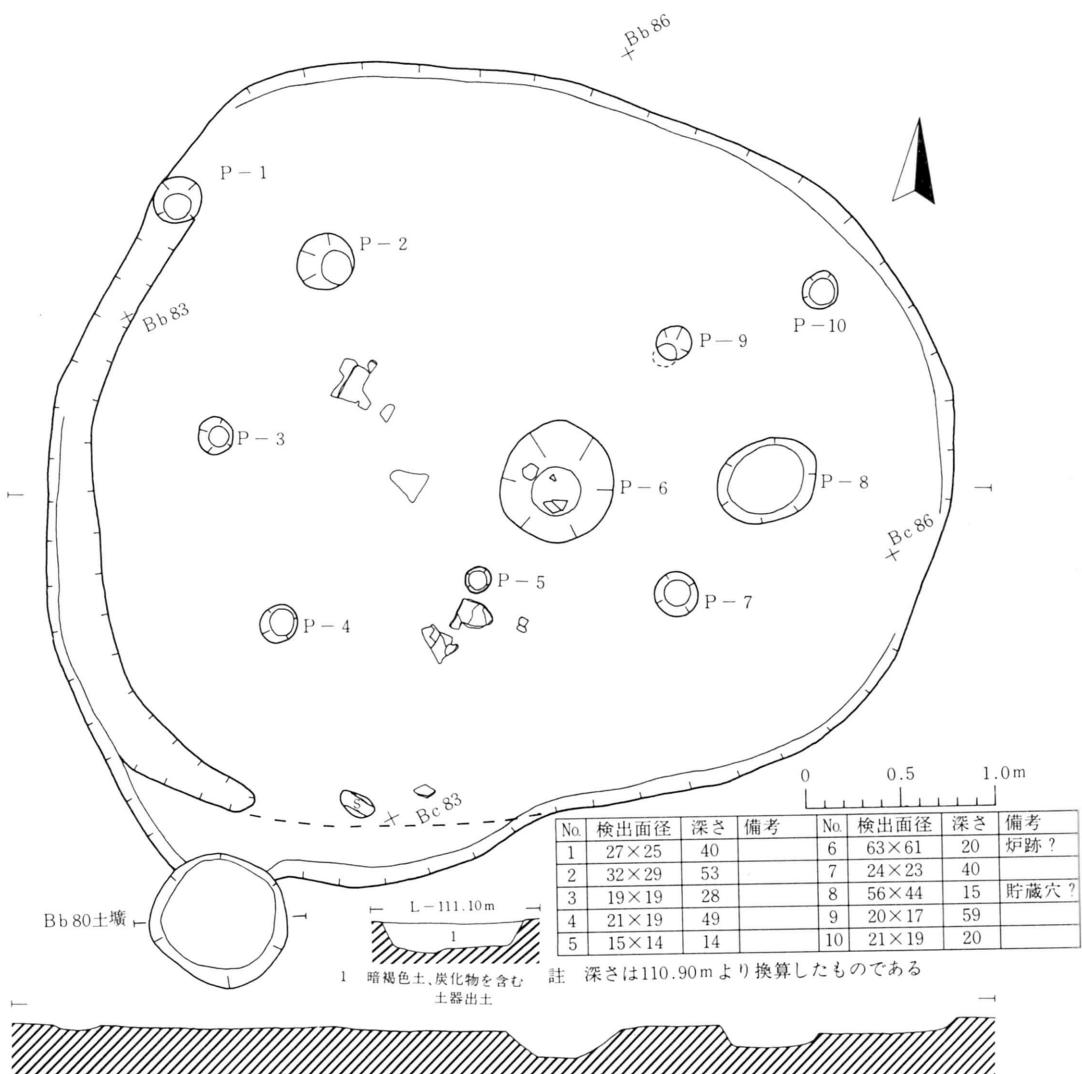
〔床面・壁〕 地山を床面とし、ほぼ水平で平坦である。壁は全体的に削平されており、高さが5cm内外である。地山を壁としている。

〔周溝〕 西辺の一部に認められる。壁直下にあり、幅が15~25cmで深さが3cmほどである。極めて浅く痕跡を残すのみである。

〔柱穴〕 住居跡内から検出されたpitは10個である。このうち柱穴と考えられるものはP2~P4、P7、P9の5柱穴である。直径20~30cmで、深さが28~59cmである。P6、P8は63×61cm、56×44cmと大きく、前者は住居跡のほぼ中央に位置しており、炉跡の残存部ではないかと考えられる。内部から土器片が出土している。後者は東部にあり、底が平坦となっている。

〔炉〕 検出されていない。ただし、前述の如くほぼ中央にP6があり、焼土等が確認されていないが、炉跡の残存部ではないかと考えられる。

〔その他の施設〕 住居跡の南西部にBb80土壙が位置する。一部重複しているが、新旧関係は確認されていない。直径0.7mほどの正円形をなし、壁がやや強く立ち上がる。浅い円筒状を

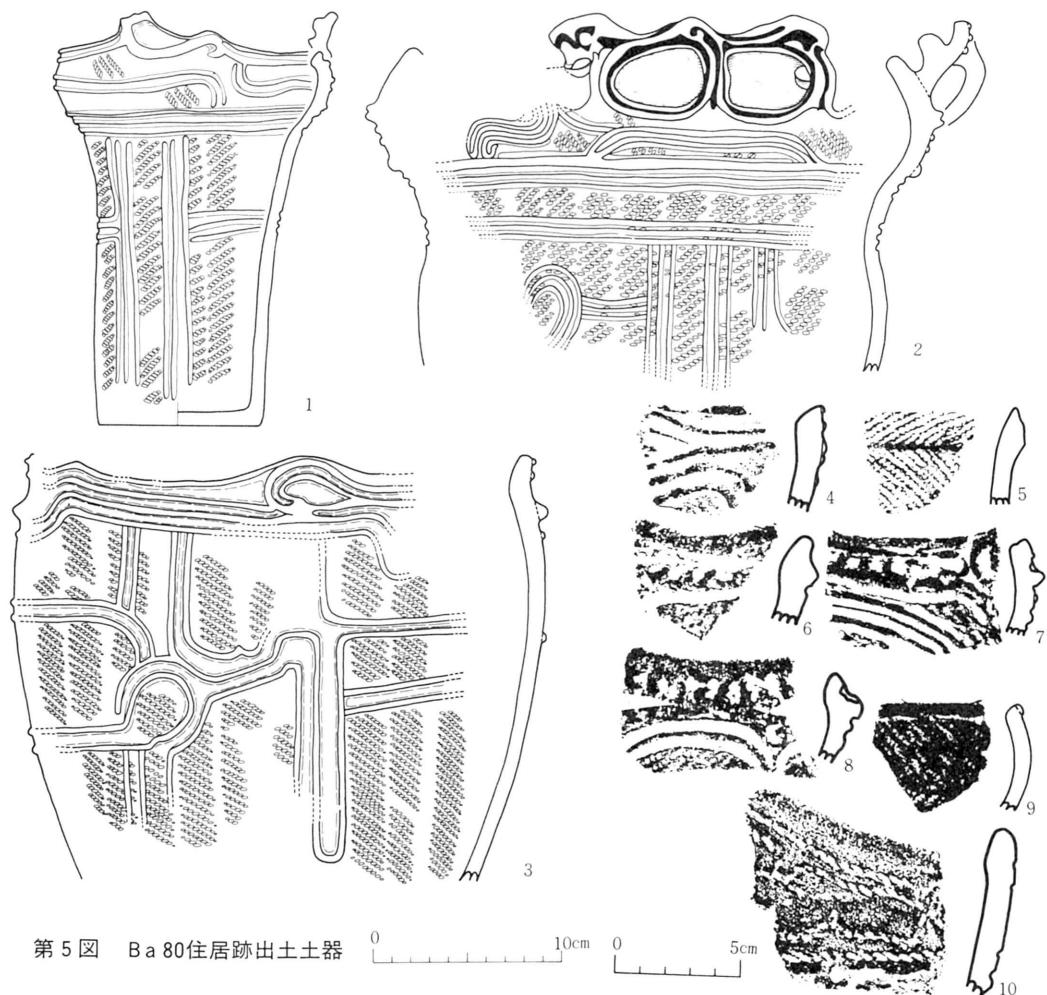


第4図 第3竪穴住跡

呈し、深さは13cmで埋土は炭化物を含む暗褐色土である。中から縄文土器8点が発見されている。住居跡に伴う貯蔵穴であろうか。

〔出土遺物〕 中央部付近の床面から深鉢形土器等が発見されている。復元できたのは第5図1~3である。また、搔器(99)が発見されている。

1(図版12の82)は口径14.5cm、底径8.5cm、器高22cm(突起頂部まで)、器厚7mmの小型深鉢である。口縁部が内彎し、胴部は円筒形となるキャリパー形で、口縁に横S字状の突起を1個もつ。口縁部文様帶は平行隆起線の区画文で、胴部は3本の平行沈線が縦横にめぐる。II群5類eに分類される。住居跡の床面から横位で出土。ほぼ完形品である。



第5図 Ba 80住居跡出土土器

2 (図版9の56) は、口径約27cm、器厚8mmの大型深鉢である。口縁部が内弯し、胴部に張りをもつキャリパー形深鉢で、口縁には、把手状の渦巻文をアレンジした大突起を持つ。口縁部文様帶は、浅い沈線を伴う平行隆起線文の曲線文、胴部は3本の平行沈線による直曲線がめぐる。胴部外面に煤付着が見られる。II群5類d₄に分類される。床面出土。1/5残存する。

3 (図版12の83) は口径26.5cm、器厚9mmの大型深鉢である。胴部に張りをもち、口縁ですばまる器形で、渦巻文が隆起したゆるやかな大波状口縁をなす。口縁部は平行隆起線が横走し、胴部は同じく平行隆起線によって区画文様が描かれる。II群5類e₁に分類される。住居跡床面出土。1/4残存し、底部欠損している。

その他4~10のような口縁部破片10点、胴部115点、底部6点、床面から出土した。器形、文様から、分類上の第II群5類に属するものが大部分である。円筒上層b式の口縁部破片1点あ

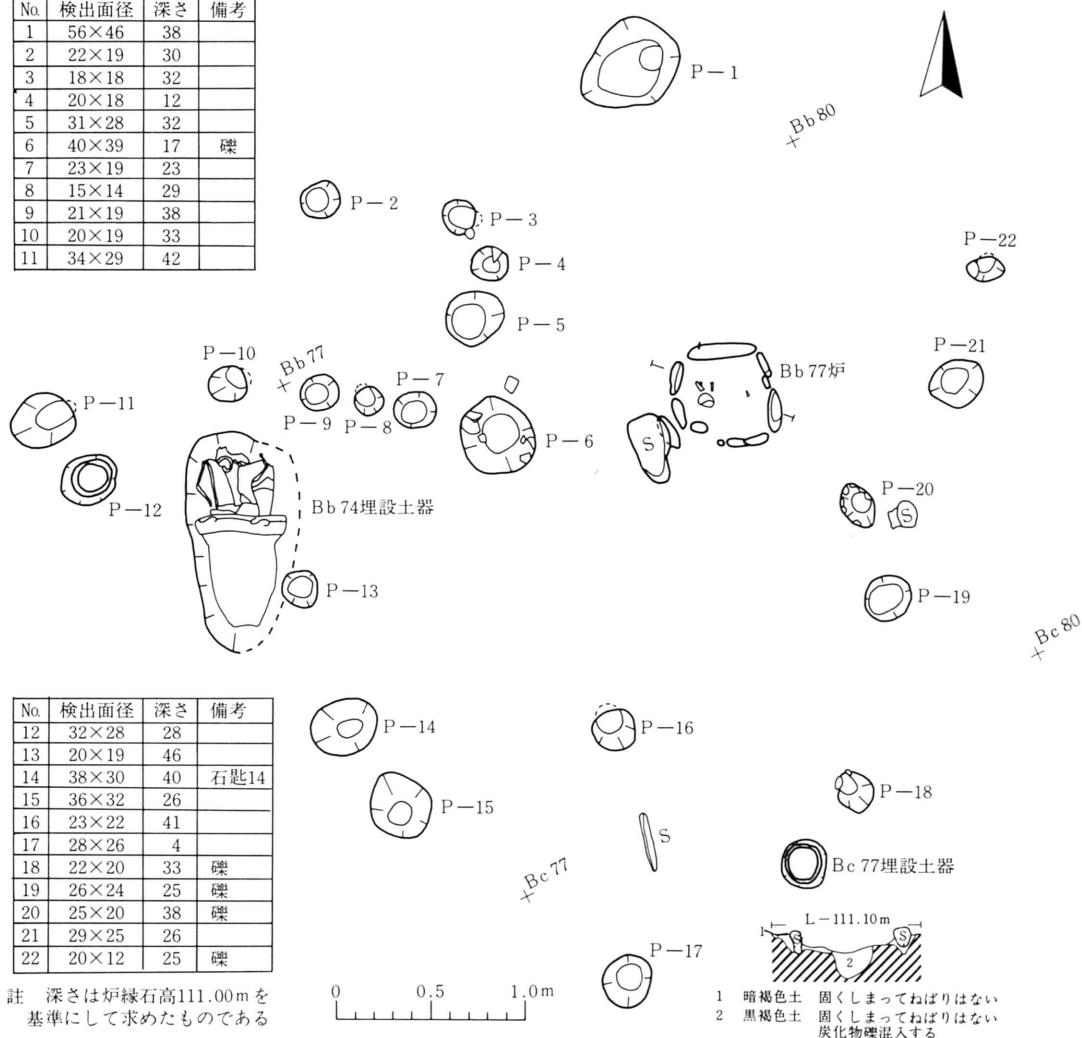
第 VII 地 区

るが、他は、縄文中期大木7b～8aに比定される土器片ばかりである。復元できた土器(第5図1～3)は、いずれも大木8a式である。

2 炉跡 Bb77炉跡 (第6図、図版2)

第1住居跡の南約2.5m、第3住居跡の西約3mに位置する。扁平な川石10個を0.55×0.6mの方形に配置した石囲い炉で、炉縁石が側縁を上にしてほとんど間隙なく埋設されている。使用されている石は37cmを計測する大きいものも見られるが、15～20cmほどのものが多い。炉底下には石を据える浅い掘り込みのほか、中央部に深さ15cmの落ち込みが認められ、炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。その上から深鉢形土器の口縁部破片が出土している。ただし、焼

No.	検出面径	深さ	備考
1	56×46	38	
2	22×19	30	
3	18×18	32	
4	20×18	12	
5	31×28	32	
6	40×39	17	礫
7	23×19	23	
8	15×14	29	
9	21×19	38	
10	20×19	33	
11	34×29	42	



第6図 Bb 77炉跡周辺全体図

土は確認されていない。炉跡の西には隣接して36×21cmの扁平な石が配されている。

なお、近くからは柱穴様の pit が22個発見されており、P14埋土から石匙(15)が出土している。北1.5mには第3埋設土器、南2.5mには第7埋設土器がある。

また、西方2.5mには第6埋設土器があり、南西4.5mにはBc74土壤が検出されている。竪穴住居跡を確認することはできなかつたが、住居跡に伴う炉跡と推測される。

炉跡内からは、第7図のキャリパー形深鉢の口縁部破片一点のみ出土した。隆起線の区画文、菱形文や渦文を口縁部に持ち、頸部には平行沈線がめぐる。渦状に重なった立体的な突起がつく。胎土はもろく褐色を呈す。II群5類e₁に分類される。

3 焼土遺構

第1 (Ae80) 焼土遺構

調査地の北端にあり、段丘崖の南約10mに位置する。0.5×0.6mの不整形をなすが、焼土の性状、厚さ等は記録されていない。

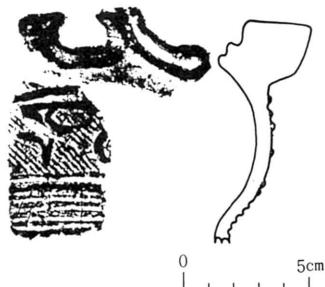
第2 (Af80) 焼土遺構 (第8図、図版2)

第1焼土遺構の南東約2.0mに位置する。南3.5mには第1、第2竪穴住居跡の周溝がある。東西1.0m、南北0.65mの不整形をなし、西端部が深鉢の破片に覆われている。焼土は厚さ8cmほどの一部塊状をなし、下位に焼土、炭化物を混入する褐色混土の掘り込みを有す。断面図によると土器を含む土壤によって破壊されているようである。土壤堆積土は黒褐色腐植土で、炭化物を若干含入している。竪穴住居跡の地床炉の如くであるが、周辺から住居跡に関連する遺構は確認されていない。

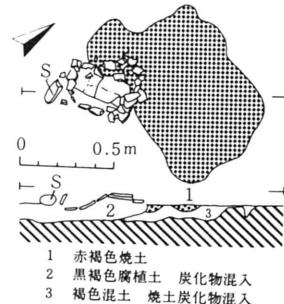
なお、土器は現存していないので不明である。

第3 (Ag92) 焼土遺構 (第9図)

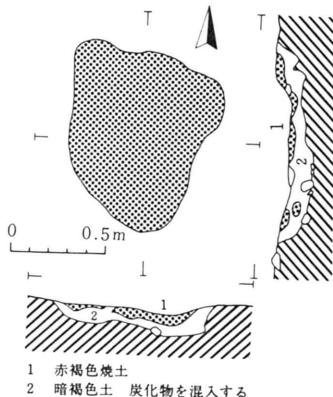
調査地の北東部にあり墳墓の南東約2mに位置する。東西0.7m、南北1.05mの不整形をなす。掘り込みを有する現地性焼土で、焼土の厚さは4~5cmと薄い。掘り込みは炭化物を含む暗褐色土で埋め戻している。住居跡に伴う地床炉ではないかと考えられる。壁を確認すべく総長10mにわたって土層観察を行ったが壁等は認められなかった。また、周辺から



第7図 Bb 77炉跡出土



第8図 第2焼土遺構



第9図 第3焼土遺構

第 VII 地 区

柱穴、周溝等も発見されていない。

4 埋設土器

第1 (Ae77) 埋設土器 (第10、11図、図版3、15)

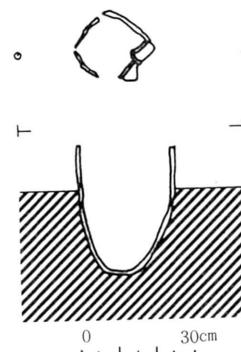
調査地の最北端にあり、段丘崖の南7mに位置している。縦位に埋設された底部を有する深鉢形土器で、口縁部を欠損している。第II層に直立するもので掘り込みは認められず、地山面には達していない。

口縁部形態は不明であるが、底径11.5cm、器厚8mmの大型で、一部に沈線による懸垂文が見られII群5類bに分類できそうである。胎土は砂粒を含むがしまり良好、底部付近は褐色、胴部は暗褐色を呈する。地文は単節斜縄文L—R、横及び斜め回転である。

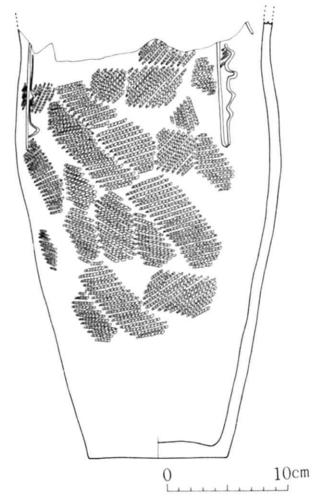
第2 (Ba80) 埋設土器 (第12、13図、図版3、図版12の79)

調査地の南部にあり、第1竪穴住居跡の南西約2.5mに位置する。第III層に穿たれた0.4×0.38mの円形に近い土壙に垂直にしかも逆位に設置され、暗褐色土で押えられている。底部は土壙確認面から約25cm上位に位置していた。

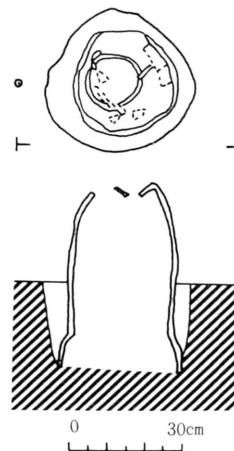
土器はほぼ完形の深鉢形土器で、底部を一部欠損している。口径34.6cm、底径12.5cm、器高46.5cm、器厚6mmの大型である。口縁部は内彎し、やや胴部の張ったキャリパー形で、渦巻状の突起を4個持ち、ゆるやかな大波状口縁をなす。口縁部は細隆起線の区画文である。地文は単節斜縄文L—R縦回転。胎土はもろく、にぶい褐色をしている。器形と文様技法からII群5類e₁に分類される。



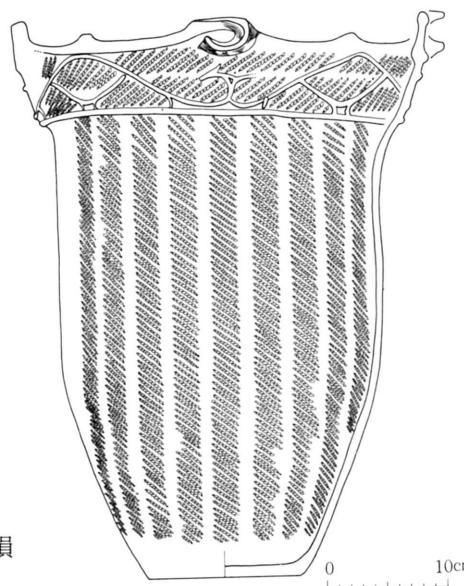
第10図 第1埋設土器



第11図 Ae 77埋設土器



第12図 第2埋設土器

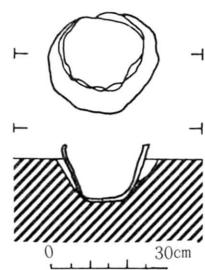


第13図 Ba 74埋設土器

第3 (Ba77) 埋設土器 (第14、15図、図版3)

Bb77炉跡の北

約1.5mにあり、竪穴住居跡に伴う炉跡ならば、同住居跡に伴うものと推測される。



推定床面に約10cm掘り窪めた30×26cmの土壌に縦位に設置されている。埋土は暗褐色土である。土器の上半が欠損しており削平されたものと考えられる。

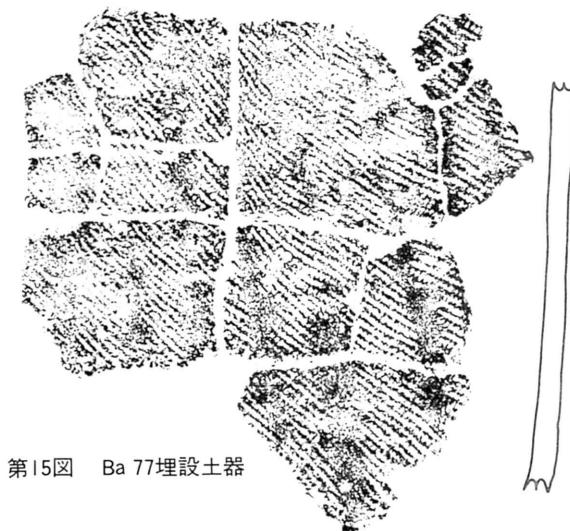
土器は、残存部胴径30cm程の地文のみの大型深鉢である。地文は、単節斜縄文L—R、縦方向回転である。底部、口縁部共に欠損している。器厚は9mm、胎土のしまりは良好である。

第4 (Ba80) 埋設土器 (図版15)

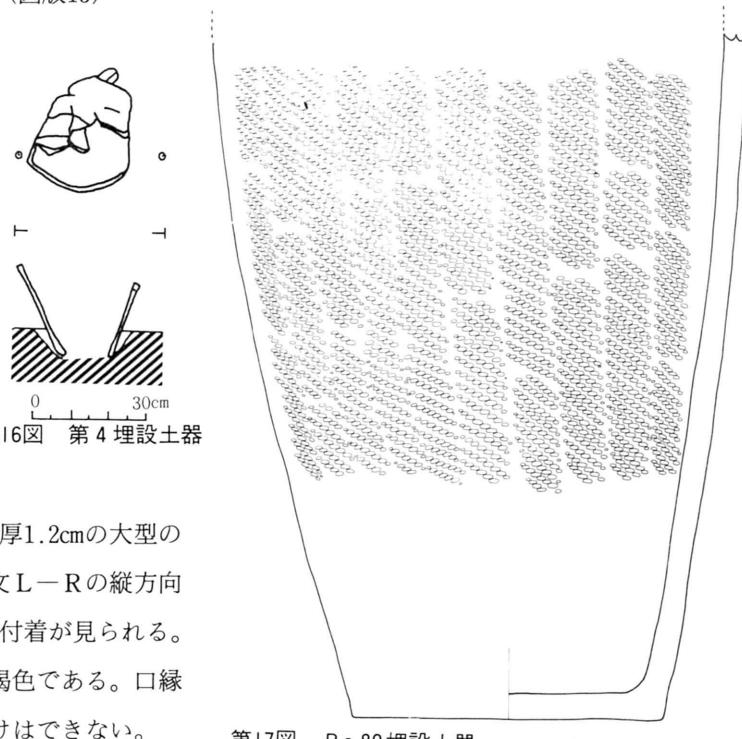
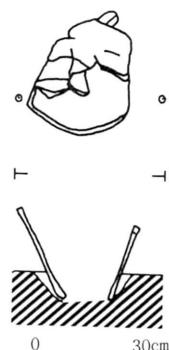
第1住居跡と第3住居跡のちょうど中間に位置する。上半が破損し、やや斜位に埋設されている。断面図によると地山に約10cm掘り窪めた小土壌に設置されているようである。

埋土は黄褐色土で僅かに汚れている。

土器は、底径16.5cm、器厚1.2cmの大型の深鉢で、地文は単節斜縄文L—Rの縦方向回転である。外面には煤の付着が見られる。胎土は砂粒を含み荒く、褐色である。口縁部不明で分類上の位置づけはできない。



第15図 Ba 77埋設土器



第17図 Ba 80埋設土器

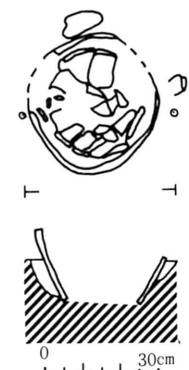
第 VII 地 区

第5 (Ba83) 埋設土器 (第18、19図、図版3、図版10の67)

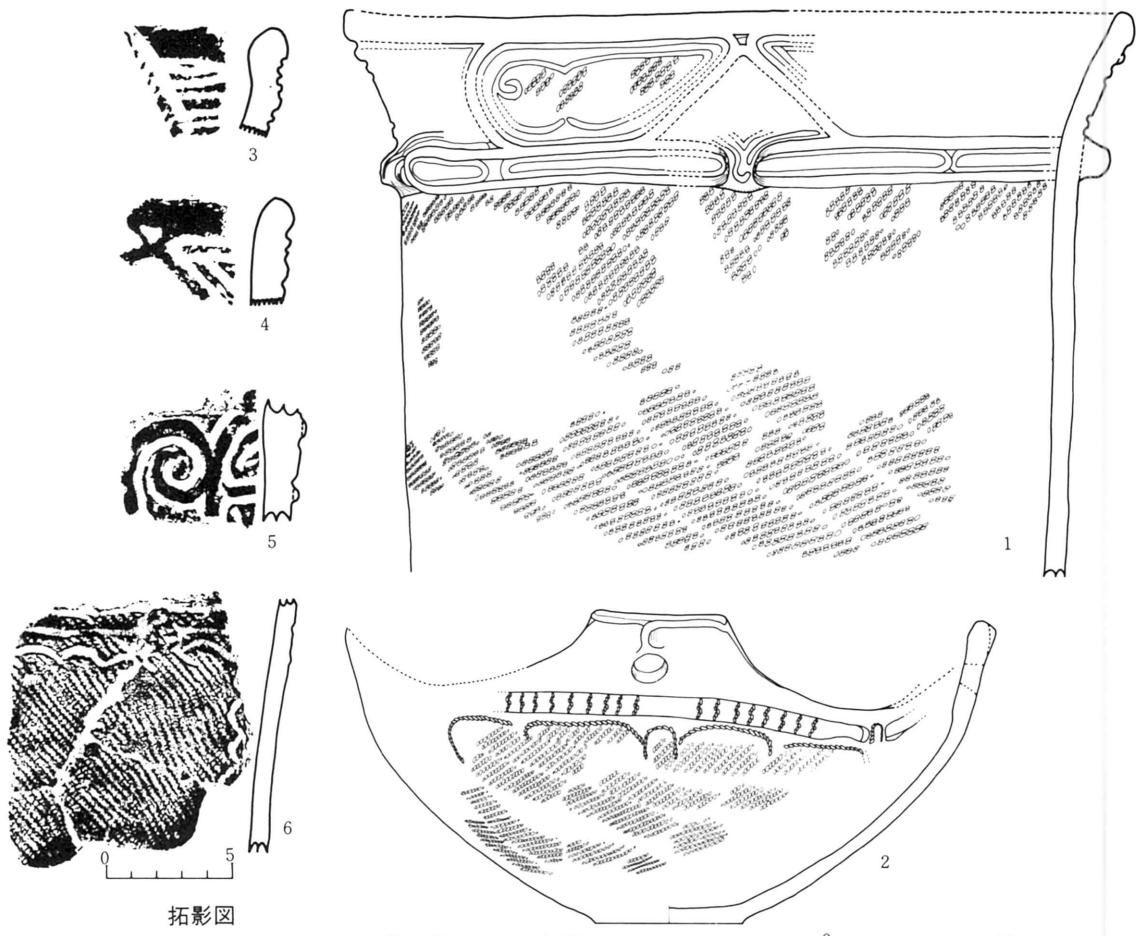
第3住居跡の北約1.5mに位置し、第4埋設土器の東約1.5mにあたる。口縁部を破損し底部を欠いている。地山を約0.5m掘り窪めた土壙に縦位に設置されている。内側には浅鉢形土器が入っていた。埋土は黄褐色土で若干汚れているが地山に近い。

土器は1(図版10の67)で、口径42cm、器厚1.2cmの大型深鉢である。口縁は平縁外反で隆起線の区画文がめぐる。頸部には、長楕円の細長い文様帶をもつ。地文は複節斜縞文L—R—Lで横及び斜め回転である。胎土は大粒の砂粒を含み荒く、褐色を呈す。II群5類d₃に分類される。

2(図版6の31)は、口径34.4cm、底径7.8cm、器高16.3cm、器厚7mmの大型浅鉢である。1の土器の内部に入っていたもので、口縁は内彎しつつ立ち上がり、有孔の大きな山形突起は4



第18図 第5埋設土器



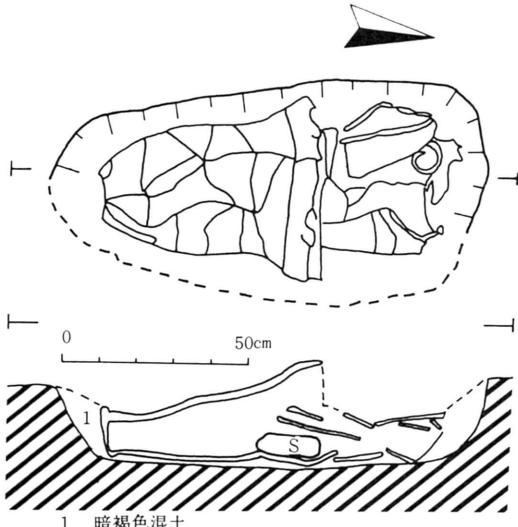
第19図 Ba 83 埋設土器と埋土中の土器

個と推定される。文様は長楕円形の凹んだ細長い文様帶に、縦の撚糸圧痕列を施し、その下に撚糸圧痕の連弧文がつらなる。地文は単節斜縄文L—Rで、II群4類aに分類される。 $\frac{1}{3}$ 残存、その他、内部に混入していた土器片は第19

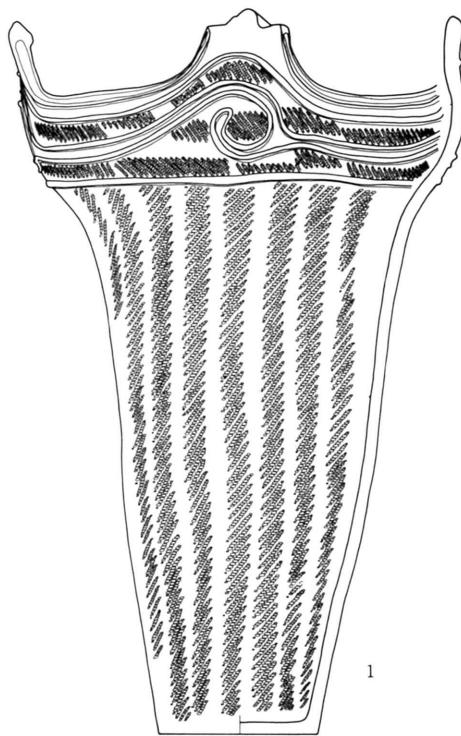
図3～6など7点である。

第6 (Bb74) 埋設土器 (図版9、12)

Bb77炉跡の西方約2.5mに位置している。一方の深鉢形土器の口縁部に他方の底部を入れたもので、横位に設置されている。土壤は南北1.15m、東西0.6mの不整長円形で長軸方向がN5°Wでほぼ磁北を指す。深さは最深部で23cmを計測する。壁は底部ほど緩やかに立ち上り、上半は直に近い。底面は鍋底状を呈す。南側の土器は土圧のため幾分変形しているが、ほとんど原形を保っており、北側の土器はかなり破損して



第20図 第6 埋設土器



第21図 Bb 74 埋設土器



第 VII 地 区

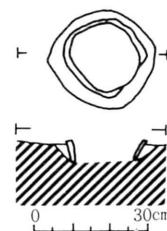
いた。土器内には扁平な川石が1個入っているほか、骨片らしきものは認められなかった。土壙の東端はP13と重複関係にあるが、新旧関係は確認されていない。埋土は暗褐色土でボロボロし、しまりがない。

1(図版9の58)は、口径3.7cm、底形13.7cm、器高58.7cm、器厚1cmの大型深鉢である。口縁部は内彎し、胴部に張りをもつキャリパー形で、横S字状の大きな突起を4個配している。口縁部文様帶は平行な沈線文によって区画され、上端には隆帯を調整した広く浅い沈線帶がある。地文は単節斜縄文R-L。胎土は砂粒を含み荒く、褐色である。II群5類d₄に分類できる。完形品である。

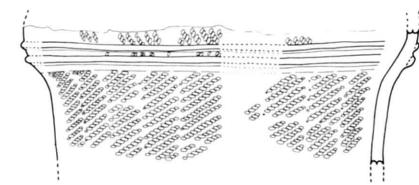
2(図版12の81)は、口径37.5cm、器高60.4cm(突起頂部まで)、器厚1.0cmの大型深鉢である。口縁部が内彎し、胴部はほぼ円筒形のキャリパー形で、山形の大突起を4個もつ大波状口縁をなす。口縁部文様帶は平行隆起線により、4個の大きな渦巻文を連結するモチーフをとる。地文は単節斜縄文R-L。胎土、色調は1に類似する。II群5類e₁に分類される。

第7(Bc77) 埋設土器(第22、23図、図版3、15)

Bb77炉跡の南約2.5mに位置している。下半を損失した深鉢形土器の口縁部を縦位に設置したものである。土壙は直径27cmの円形で、深さは僅か5cmほどである。埋土は記録されていないが、暗褐色土と思われる。



第22図 第7 埋設土器



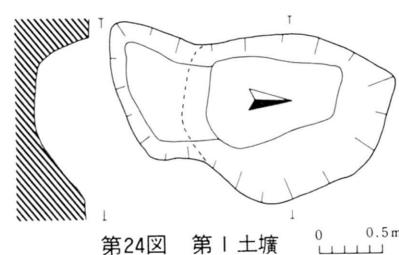
第23図 Bc 77 埋設土器(1/4)

口縁上半の形状は不明であるが、おそらく内彎するキャリパー形深鉢であろう。頸部には平行隆起線が施され、第II群5類e₁に分類される土器で、口径約21cmの中型のものと推定できる。地文は単節斜縄文R-Lの横及び縦回転で、胎土はもろく、にぶい黄褐色を呈す。

5 土壙

第1(Af71) 土壙(第24図)

台地の北端にあり、段丘崖の南約10mに位置する。1.7×1.3mの方形に近い長円形で、南西部に1.0×0.6mの方形の突出部をもつ。壁は緩やかに立ち上がり、深さが45cmである。埋土については記録されていないので不明であるが、石匙(7)が出土している。

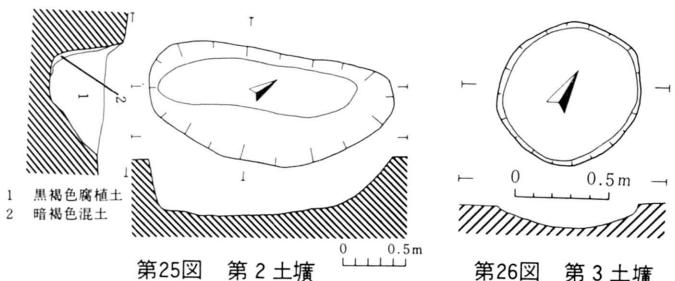


第24図 第1 土壙

第2(Ba56) 土壙

台地の北端にあり、段丘崖の南約13mに位置する。東西1.95m、南北0.9mの東西に長い長円

形をなす。深さは56cmで、埋土は2層に分けられる。1層は黒褐色腐植土で、炭化物が混入する。中から縄文土器が出土している。2層は暗褐色混土で、北壁から底部にかけて薄く認められる。性格は不明である。



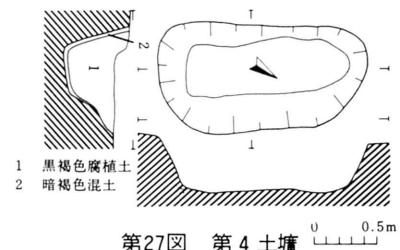
第26図 第3土壤

第3 (Bc74) 土壌 (第26図)

当土壌は調査地の中央部南端に位置し、Bb77炉跡の南西約4.5mにあたる。直径0.75mの真円をなし、壁の立ち上りが強い。底は水平に近い平坦で、深さは15cmほどである。埋土は記録されていない。

第4 (Bd3) 土壌 (第27図)

調査地の北西部にあり、段丘崖の南東約10mに位置する。南北1.66m、東西0.88mの南北に長い長円形をなす。壁はやや強く立ち上がり、底面は幾分凹凸を有す。深さは50cmで埋土は2層からなる。①層は黒褐色腐植土で、炭化物を含む。中から縄文土器の破片が出土している。②層は暗褐色混土で、西壁から底面にかけて薄く堆積している。



6 遺物包含層

「遺物包含層」には人工遺物を含む自然堆積層の意味と、集落の周辺に形成された斜面、凹地などの廃棄の場として特定の地域をさす狭義の意味とがある。当遺跡ではほとんどの遺構を覆っており、東西45m、南北25m以上の広範囲に分布することから前者の意味で用いている。なお、密集地は住居跡に隣接しており、廃棄の場を否定するものではない。

調査地を東西に長い北部と、南北に長い南部に2分すると、遺物包含層は北部のほぼ中央にあって、集中する地域は約25mの帯状に分布している。この中でも特に密集する地点は1号墓周辺と竪穴住居跡の南接部分である。前者は周辺の遺物が少なく、墳墓築成に伴って移動されたためと推測される。後者は調査地の南端に位置しており、調査地外へ続くと見られる。

土器片を観察すると比較的摩滅が少ない状態であり、それほど遠方から移動してきたものではないことを示している。すなわち包含層遺物の供給地は極めて近くにあったことを示すと考えられる。その供給地は調査地内では竪穴住居跡等に求められ、調査区外では既に土取り作業が進行して確認できなかったが、住居跡が続いていると見られる南方地域であろう。当調査地は夏油川によって形成された扇状台地上に位置しており、供給地の想定される南方はその上流にあたり、包含層が洪水等によって形成されたものならば、その可能性が大きい。

II 包含層出土遺物

発見された遺物は日常使用されたと見られる土器、石器と土製品である。

縄文土器の総出土数は約66,000点（口縁部2,400、胴部63,000、底部600）で完全な形で発見されたものではなく、復元可能土器、図化できるものは約70点である。胎土、焼成の良好なものが多い割には復元個体数は少ない。ただ口縁部だけとか底部だけの接合はかなりの数にのぼるため、胴部破片のより厳密な観察によっては、さらに復元個体の増加が見込まれる。時期は縄文時代早期末～前期初頭（大木2式）、前期後半（大木5式）と中期前葉（大木7b式）～中葉（大木8a式）のものである。その中で最も多いのは中期前葉～中葉に属するII群土器である。

土製品は土偶13点、土版2点、スタンプ状土製品2点、耳栓状などの耳飾り4点、土製円盤1点、管状土製品1点である。土偶は板状土偶ですべて破損している。中期の特徴的な表情、形態を示している。他の土製品もほぼ同時期のものと見られる。

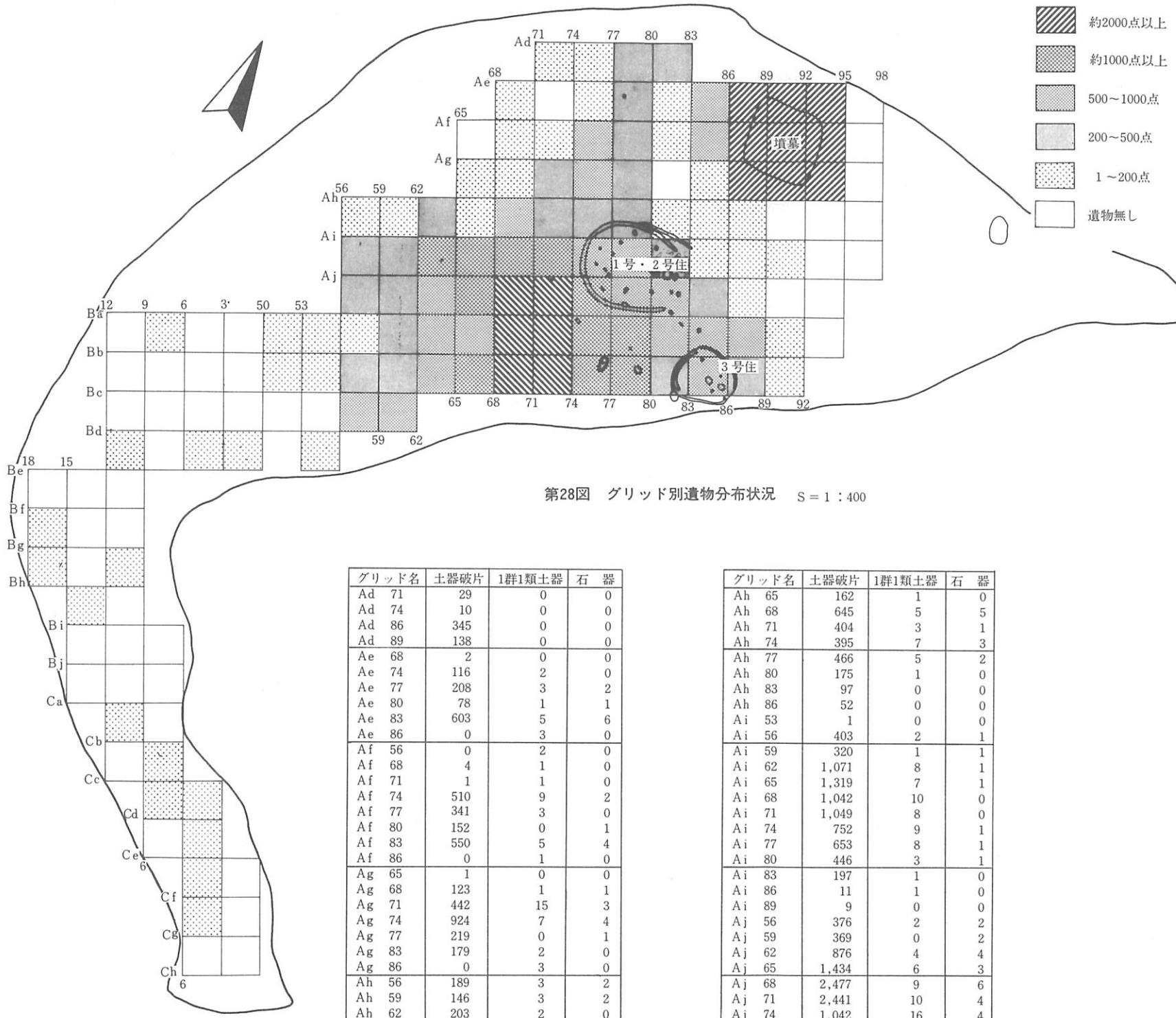
石器は総出土数228点で、大多数は包含層出土であるが、記述の都合上、遺構出土の4点を含めて分類記述している。種類には石鎌、石錐様石器、石匙、石箆状石器、搔器類、磨製石斧、打製石斧、磨石、凹石、石皿、石錘等があり、各種のものが混在している。以上の他には滑車状石製品、有孔石製品、線刻を有する石製品、石剣等の装飾品が含まれている。これらの中で石鎌が3点と非常に少なく、切削器的機能をもつと見られる搔器類が134点（59.2%）で半数以上を占めているのが目につく。また石核、剥片などの石材、石器製作の際に派生する屑片も少なくない。

土器と石器のグリット別分布状況は第28図と表の通りである。

遺物が多く出土する地域は、住居跡を覆う部分を含めて図のような広がりを見せる。特に密集度の高い地点は住居跡の西側にある Aj68・71、Ba68・71、Bb68・71の6つのグリットとその周辺である。また今回の調査対象外である北の墳墓群地域にも遺物が相当多数出土しているが既述のように後世の墳墓をつくる際の盛土となって集積されたものであろう。従って墳墓周辺の出土数が少ないグリットがあるのはそのためと考えられる。

縄文土器は前述の6グリットを中心に四方に広がりを示しているが、調査区の南半分（Bd～Cd区）には遺物量が稀薄となる。又復元個体は前述の6グリットに多く出土している。早期末～前期初頭に比定した第I群1類土器は、北半部全域に広がって分布し墳墓地域に比較的多い。石器の分布も土器と同様の傾向を示しており、南半部には見られない。

包含層は現地形の状況から、出土遺物の層位的な把握は不可能であった。次にこれら出土遺物について、縄文土器、土製品、石器の順に分類詳述する。



第28図 グリッド別遺物分布状況 S = 1 : 400

グリッド名	土器破片	1群1類土器	石器
Aj 77	596	7	3
Aj 80	667	1	3
Aj 83	394	1	0
Aj 86	83	0	2
Ba 9	1	0	0
Ba 50	1	0	0
Ba 53	1	0	0
Ba 56	190	2	4
Ba 59	355	1	1
Ba 62	807	6	2
Ba 65	825	5	2
Ba 68	1,931	3	6
Ba 71	2,191	5	9
Ba 74	1,461	5	5
Ba 77	1,134	3	5
Ba 80	566	2	2
Ba 83	765	2	1
Ba 86	509	0	4
Ba 89	95	0	0
Bb 50	51	1	1
Bb 53	33	0	0
Bb 56	396	6	0
Bb 59	420	6	0
Bb 62	784	4	1
Bb 65	1,082	3	4
Bb 68	3,522	6	13
Bb 71	3,487	3	8
Bb 74	1,538	1	3
Bb 77	1,776	1	12
Bb 80	446	1	3
Bb 83	627	0	4
Bb 86	317	0	3
Bb 89	1	0	0
Bc 56	594	5	1
Bc 59	703	4	1
Bd 3	45	0	0
Bd 6	4	0	0
Bd 12	57	0	0
Bd 53	113	2	0
Bf 18	5	0	0
Bg 12	1	0	0
Bg 18	3	0	0
Bh 15	1	0	0
Bh 62	0	1	0
Ca 9	158	0	0
Cb 9	158	0	0
Cc 6	45	0	0
Cd 6	45	0	0
Ce 6	17	0	0
Cf 6	17	0	0
墳墓	8,429	152	42
地点不明	4568	0	13
総計	66212	438	230

1 縄文土器

縄文中期の土器片を中心に出土総数約66,000点と多量である。その他総数に含まれない細片だけでもダンボール箱で10個程になる。復元可能な土器は約70点である。破片は口縁部、胴部、底部に分けて観察登録した。分類は従来から知られている各時期の特徴(器形、文様表現技法)から、第I群は縄文早期末～前期、第II群は縄文中期と大きく2つに分け、それぞれ細分を試みた。口縁部破片についてはその特徴からほぼ分類上の位置を確定し得たが、胴部、底部については不明なものが大部分である。土器の主要な観察項目は、器形、法量、文様表現の技法とモチーフ、地文、胎土である。器形は大きく深鉢と浅鉢に分け、各部位の特徴をとらえ、法量については本遺跡では口径25cm以上、器厚7mm以上のものを大型とし、口径15～25cm、器厚6～7mm程のものを中型、口径15cm以下器厚5mm前後のものを小型として取り扱った。なお器厚の測定箇所は、復元可能のものは胴部中央部、口縁片だけのものは地文の施されている部分としている。胎土、焼成は砂粒の量や大きさ、器壁の硬さ等を観察し、記述にあたっては主観的であるが一応、しまりの良好、普通、不良としている。

第I群土器 (第29図～第31図、図版5の1～19)

縄文早期末～前期後半に属すると思われる土器群である。1類は大部分が纖維を含む褐色系の早期末～前期初頭のものである。2類は前期後半大木5式である。

1類土器 (第29図～第30図、図版5の1～16)

早期末～前期初頭の大木2式までの特徴を有するもので、器形は口縁部がやや外反した深鉢で胎土に細砂、粗砂とともに大部分纖維混入が認められ、比較的硬質の焼成を持つ類である。出土総数は438点、内訳は口縁部66点、胴部353点、底部19点である。口縁部施文の相違から推定では52個体分位かと思われる。破片の分布範囲は北半部の遺物包含層と重なり、遺構に伴出すると思われるものは皆無であるし、層位的な比較もできない。土器の内外面に煤や炭化物の付着がかなり見られる。口唇部、口縁部、胎土焼成等によりa～eの5つに細分される。

1類a—(第29図1～4)口縁弱く外反ぎみの直上形深鉢で、1～数本の横位の綾絡文をもつものである。口唇部は肥厚せずやや丸みをもつ。口縁上端は無文で横ミガキがあり、その幅は2cm前後、口縁から胴部にかけて、単節の斜縄文、斜位の撚糸文などの地文と横位の綾絡文が施される。器厚6～7mm口径は8cm～15cm位と小、中型である。胎土に細砂を含み、ガリガリと硬質の焼成であるが纖維の混入は見られない。口唇部が平縁のものa₁と口唇部に指頭圧痕様の刻み目をもつもののa₂に分けられ、色調はa₁がにぶい赤褐色、a₂が明赤褐色を呈す。底部形態は不明。口縁部の出土数4点。

1類b—(第29図5～7) 胎土に纖維を含み、文様が地文の単節斜縄文だけで、口唇部に工

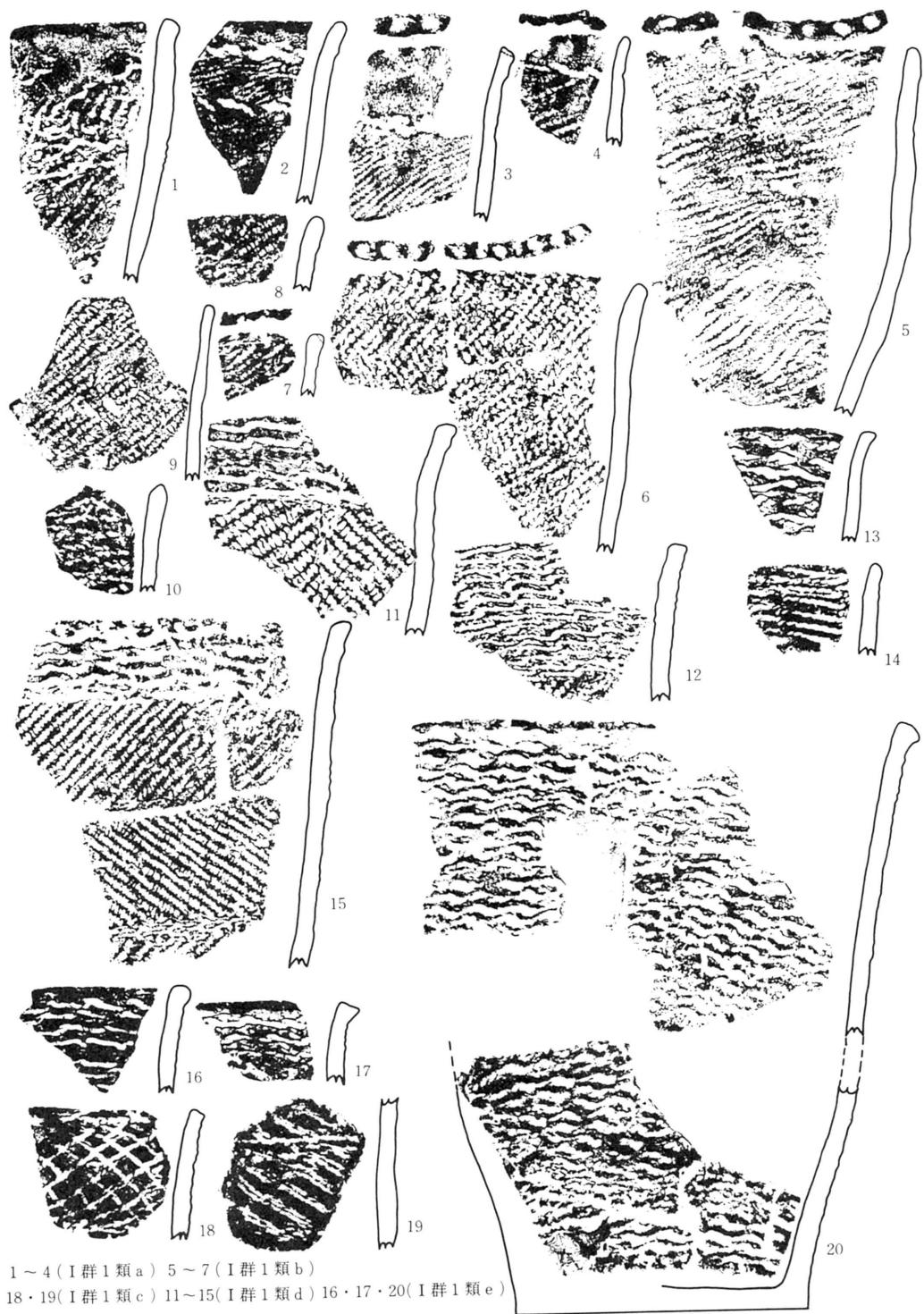
具や撚紐原体による刻み目をもつものである。口縁が弱く外反する深鉢で、口唇部に厚みはない。こぶ状の小突起のつくものが1点ある(第29図5)。器厚7mm前後の中型のものである。刻みには、真上からのものと、第29図7のように、撚紐原体を外側斜めから押圧したものが見られる。器壁内面の調整があらく、凹凸があり、焼成も比較的軟質である。底部形態は不明。口縁部の出土数6点。

1類c—(第29図8~10、18、19) 単節や複節の斜縄文や撚糸文の地文だけの深鉢形であるが、纖維混入の顕著なものc₁、纖維混入の少ないものc₂と分けられる。c₁は口縁外反せずほぼ直上ぎみであり、c₂はやや外反する。c₁、c₂とも平縁で、共にこぶ状の小突起をもつものがある。色調はにぶい赤褐色~灰褐色と一定でない。焼成はやや軟質で、小型のものが多い。底部形態は第30図26が想定できる。第29図18は、網目状撚糸文が地文になっているもので胎土焼成器形はc₁に似るのでc類に含めた。口縁部の出土数16点。

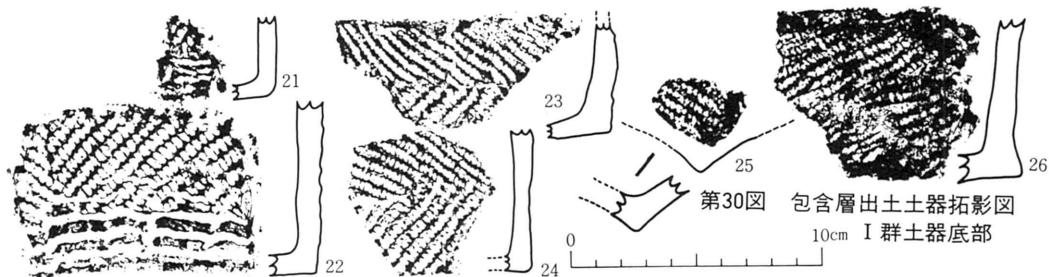
1類d—(第29図11~17、第30図21~24) 胎土に纖維を含み、羽状縄文を施しているものである。完全に復元できたものはないが、口縁から底部まで羽状縄文が何段かに渡ってくり返されるものd₁と正整、不整な撚糸文を、口縁部や底部下半へ帯状(幅4cm程)に挿入したものd₂がある。口縁弱く外反し、口唇部平坦で断面四角状であることや、胎土に纖維含みやや軟質の焼成色調は褐色~にぶい赤褐色を呈すことなどd₁、d₂に違いは見られない。羽状縄文は、単節の撚りが異なる原体によって施され、羽状の接する部分は菱形が重なったような文様効果を持つ。用いられる原体の節は、他類の単節斜縄文のそれに比べ、非常に密であり、明瞭に区別できる。撚糸文の正整なものは葺瓦状である。器厚7~10mm、口径25cm前後の中型深鉢が主であろう。底部形態は、第30図21~24などがある。口縁部の出土数28点。

1類e—(第29図20) 胎土に纖維を含み器面全体に正整、不整な撚糸文を施したものである。推定でほぼ復元できたものは第29図20である。口縁弱く外反し、口唇部が外側にやや肥厚する深鉢である。内壁は平坦であるが砂粒を含み、焼成は脆弱である。この類の土器片の色調はにぶい赤褐色及び褐色を呈している。器厚7~9mmの中型や、やや大型と見られ底部形態は、第29図20の平底が一般的であろう。口縁部の出土数22点。

その他— 第29図18は、網目状撚糸文が器面全体に施されるもので、胎土焼成、器形はc₁類に似る。又第29図19は、斜行撚糸文の胴部破片である。第30図21~26は、底部破片の拓影である。図26はc類の、図21~24はd類のものとそれぞれ推定できるが、図25の尖底部先端は、a~c類のいずれに属するか不明である。胴部破片は、それぞれの分類に分けられるものは半数ほどで、d類に多い。

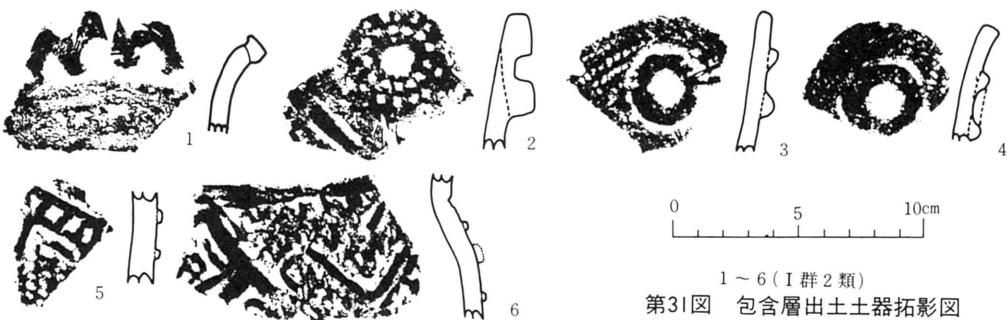


第29図 包含層出土土器拓影図



2類土器（第31図1～6、図版5の17～19）

口縁部に貼付文が顕著であり、その特徴から、前期後半の大木5式相当と思われるものである。第31図5～6は細い粘土紐の貼付により、菱形文や梯子状文が文様主体になっている。頸部から胴部にかけての屈曲の仕方から、口縁外反し、頸部すばり胴部に張りを強調した壺形の深鉢らしい。胎土に細砂含み、焼成やや不良で、暗褐色である。図1～4は、口縁上端に、鋸歯状や環状の装飾体やボタン状貼付文をもち、口縁外反ぎみの深鉢である。胎土に粗砂を含み、焼成は不良で、色調は一定でない。出土点数は10点と非常に少ない。

第31図 包含層出土土器拓影図
1～6(I群2類)

第II群土器（第32図～第67図、図版5の20～図版9）

縄文時代中期に属する土器群である。中期前葉の大木7b式～中葉の大木8a式がほとんどを占める。文様施文技法、器形の特徴から、1類より9類まで分類した。類の順序は必ずしも時期的な新旧を示すものではない。分類の大略は次のようになる。施文技法は、撲糸圧痕文、沈線文、隆起線文を骨子とし、各類の細分の基準としている。器形は、口縁外反する特徴的な深鉢形は6類に、又口縁内湾するキャリバー形深鉢は主に5類に、口縁部「く」の字状に強く屈曲する浅鉢は7類に、その他の器形の深鉢、浅鉢は各類にと、大まかにとらえられる。口縁部文様帶の幅は1～4類は狭く、5～7類は拡大している。

1類土器（第32図～第34図、図版5の20・21）

口縁部文様帶がせまく、撲糸圧痕文を主な文様とする類である。撲糸圧痕文の用い方からさらにa～cと3つに細分した。

1類a—(第33図1～18、図版5の20) 口縁部上端に1～数本の撲糸圧痕の直線文が横走す

るものである。用いた撚紐の太さは4mm、本数は2本が一般的である。口縁部成形は、口唇部肥厚しないもの、口唇部内側がやや肥厚し丸みをもつもの、折り返し口縁様に幅3cm程口縁上半が肥厚しているものと3形態が観察される。器形は口縁部やや内湾ぎみの深鉢、浅鉢、及び口縁直上の深鉢で、器厚6~7mmの小、中型が主である。色調はにぶい褐色、暗褐色が主で、まれに赤褐色が混じる。胎土は、口縁直上ぎみの深鉢類はもろく、口縁内湾ぎみの深鉢や浅鉢はしまりの良好なものが多い。地文は単節斜縄文L—Rがほとんどであるが、無文にミガキ調整の施されたものもある。横位の綾絡文やこぶ状の小突起も見られる。

第32図1(図版5の20)は、口径22cm、器厚5mmの中型浅鉢である。平行な撚糸圧痕文が施され、口縁1周する間に4箇所に小さな楕円文をもつ。胎土は細砂を含むがしまり良く、暗褐色を呈す。地文は単節斜縄文L—Rの縦方向回転である。 $\frac{1}{3}$ 残存で底部は欠損している。

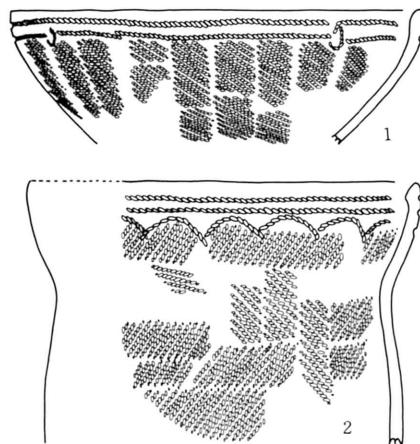
1類b—(第33図19~30、図版5の21)

口縁部文様帶が狭く、撚糸圧痕文の連弧文、ゆるやかな曲線文をもつグループとした。撚紐の太さは3mmが一般的。連弧文にともなう撚糸圧痕の直線文はやはり2本が多い。口縁部成形は、内湾ぎみのものはやや肥厚して丸みをもち、口縁外傾又は直上ぎみの深鉢は、口縁部の厚みはない。色調はにぶい褐色系統で、胎土のしまりは良好なものが多い。器形は、口縁やや内湾する深鉢、浅鉢、口縁直上かやや外傾ぎみの深鉢である。こぶ状の小突起をもつ浅鉢形の他は、平縁と見られる。器厚は6mm前後の小、中型である。連弧文の形状は、単節と平行線の2種あり又、小波状や鋸歯状に近いもの等の変化がある。

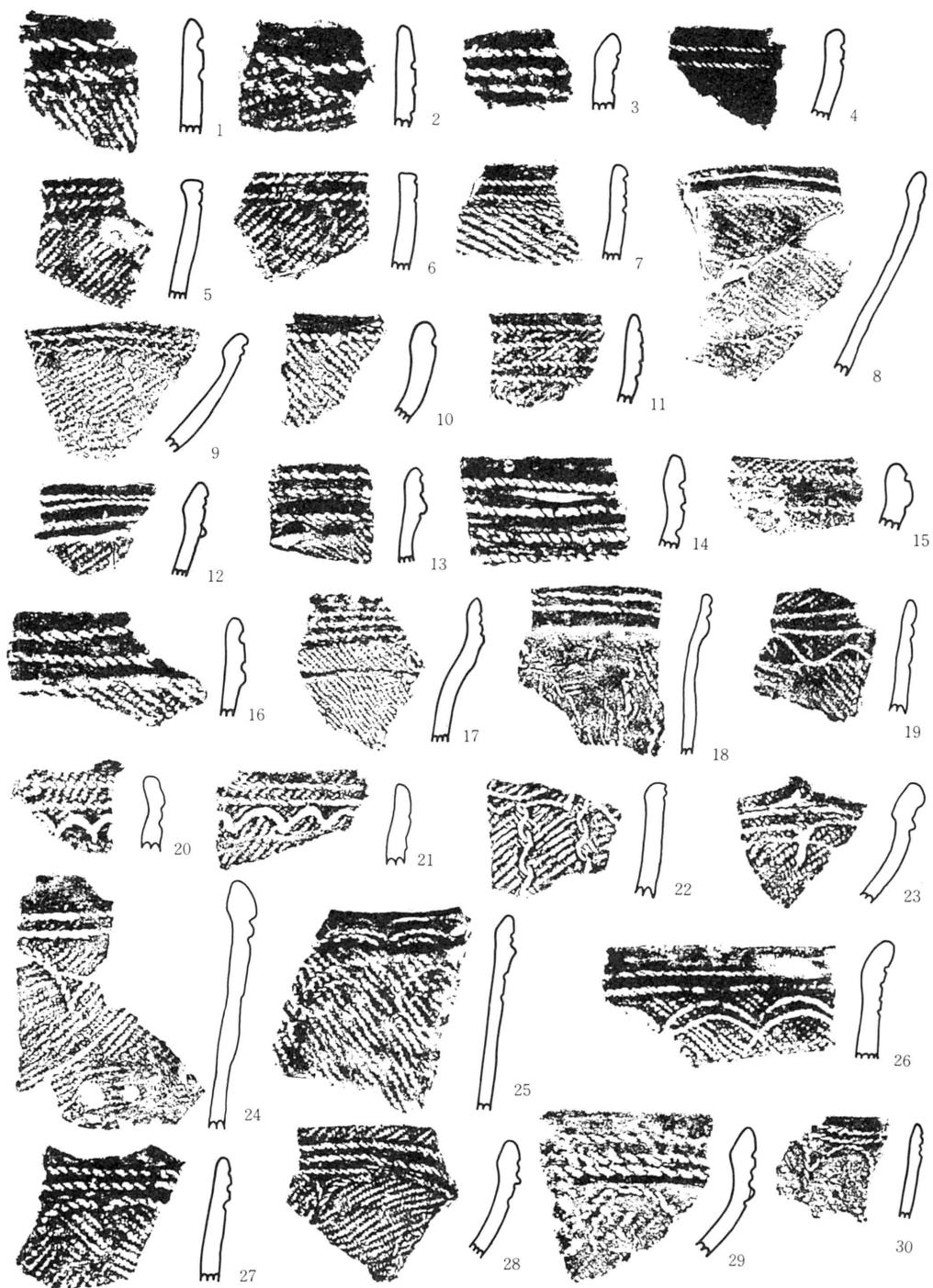
第32図2(図版5の21)の土器は、口径21cm、器厚6mmの口縁内湾する平縁の中型深鉢である。2本の平行線の連弧文の撚糸圧痕文を施している。胎土は赤色砂粒を含み暗褐色を呈す。地文は単節斜縄文L—Rの縦、横方向回転である。1/5残存、底部欠損している。

1類c—(第34図31~35)

口縁部上端の文様帶に、縦の撚糸圧痕列をもつものと撚糸圧痕文と刺突文が伴うものを一括した。出土点数は少なく、まとまったグループではないが、II群1類の範囲内ととらえた。器形は口縁直上ぎみの深鉢が主である。図33や34は、口縁上端1.5cm程、折り返し口縁様に厚みをもち、その上に撚糸圧痕文を施している。図32には、こぶ状の突起がある。



第32図 包含層出土土器実測図



1 ~ 18(II 群 1 類 a) 19 ~ 30(II 群 1 類 b)

0 10cm

第33図 包含層出土土器拓影図



2 類土器 (第35図 第36図 図版5の22~25)

口縁部上半にせまい文様帯があり、沈線文や刺突文を主な文様とする類である。沈線の用い方により a～c に分けられる。

2 類 a—(第35図 1、4～8 図版5の22)

沈線の直線文のみのものである。2本の平行沈線をめぐらした、口縁直上ぎみの深鉢で、器厚 6 mm 前後の小、中型のものが多い。暗褐色の色調をもち、胎土がもろくなっているものと、しまり良いもの半々である。口縁は平縁で、口唇部の厚みや丸みは顯著でない。地文は L—R の単節斜縄文を主とするが、羽状縄文もみられる。

第35図1 (図版5の22) の土器は、口径15.6cm、器厚7 mmの中型深鉢である。胴部に張りをもち口縁部でややすぼまる甕形で、平縁である。2本の平行沈線文をめぐらす。胎土はもろく、暗褐色の色調をもつ。地文は L—R 単節斜縄文、一部に付加条縄文も使われている。胴部には煤が付着している。

2 類 b—(第35図 9～23)

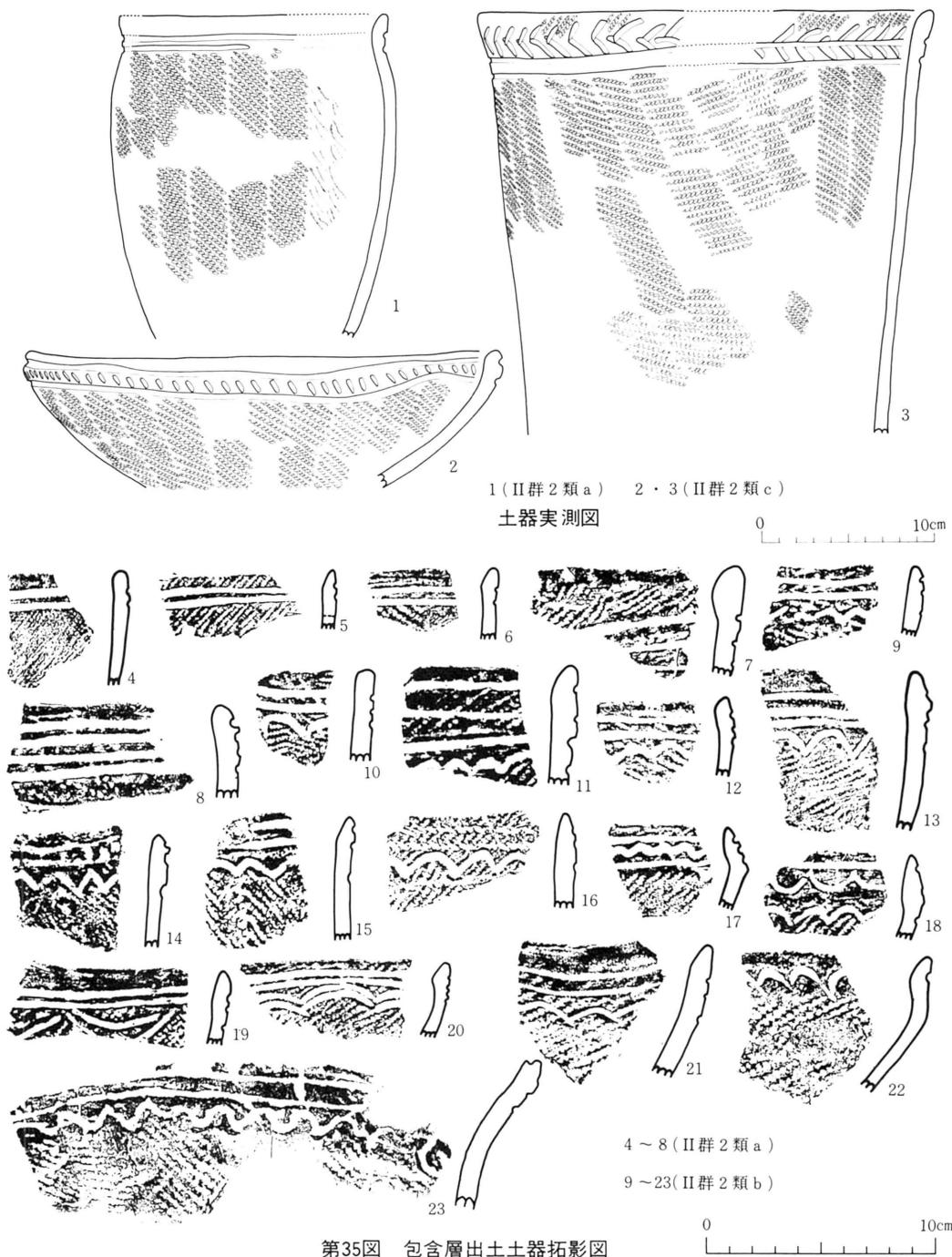
沈線の連弧文や小波状文を施したものである。器形は口縁直上ぎみと外反する深鉢、内湾ぎみの浅鉢形で、平縁が多く、こぶ状の小突起が少量見られる。器厚 6 mm 前後の小、中型が主である。胎土は 2 類 a に似る。沈線により連弧文、鋸歯状、不整な波状が描かれている。ボタン状やつまみ状の貼付文が数点ある。地文は単節斜縄文 L—R が大部分、羽状縄文 1 点である。

2 類 c—(第35図 2、3、第36図 24～53 図版5の23～25)

沈線の直線文、連弧文と櫛齒状沈線列又は、矢羽状沈線、刺突文を施すものである。器形は、口縁直上ぎみの深鉢形が基本で、やや内傾又は外傾ぎみになっているものもある。浅鉢形は、内湾ぎみに立ちあがる平縁のものである。深鉢の中には、こぶ状の突起をもつものや、図41のように大波状口縁をなすものが見られる。口径が25cmをこえる大型のもの 8 点、他は小、中型で、器厚 6～8 mm が多い。連弧文を伴うものがある。沈線列や刺突列が多く、その他竹管円文は 7 点、矢羽状沈線は 12 点である。胎土、色調は 2 類 a・b に類似する。

第35図2 (図版5の24) の土器は、口径28cm、器厚8 mmの中型浅鉢である。平行沈線間に刺突列を施す。胎土は密で暗褐色、地文は単節斜縄文 L—R 縦回転、底部欠損している。

第35図3（図版5の25）の土器は、口径26.6cm、器厚8mmの大型、口縁直上の深鉢である。矢羽状沈線を施し、その後平行沈線と一部に鋸歯状文を加えている。胎土に砂粒を含み、褐色である。地文は単節斜縄文R—L、横及び縦、斜回転している。





24~53(II群2類c)

第36図 包含層出土土器拓影図

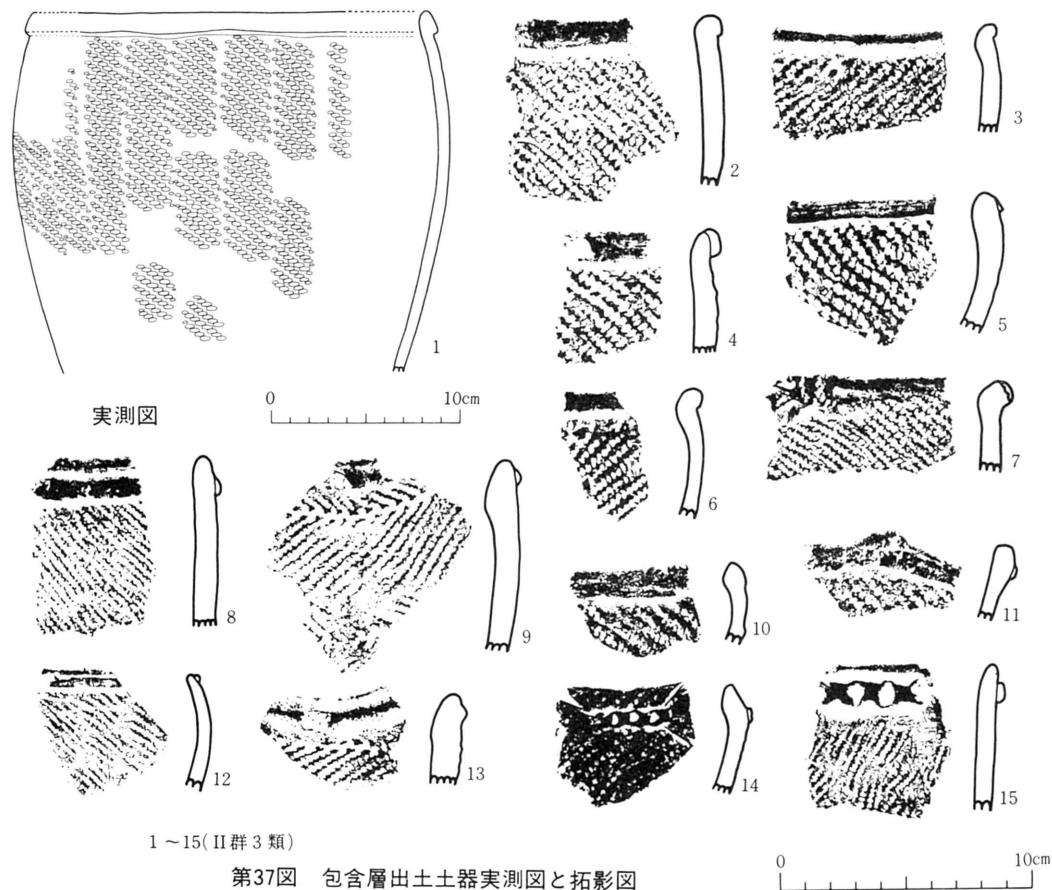
0 10cm

第 VII 地 区

3類土器 (第37図、図版6の26)

口縁部上端に太い隆帯を1本めぐらした深鉢形のグループである。隆帯は、幅4～9mm、断面カマボコ形を呈している。貼り付け部位は、口縁上端と、上端から5mm程さがったところと2種あるが、前者が多い。後者には、隆帯の上に指頭圧痕を施したもののが見られる。器形は口縁内湾ぎみにすばまり胴部に張りをもつた平縁の深鉢で、中型が多い。胎土は砂粒を含み、荒い感じで、色調はにぶい褐色が主である。貼付文はない。地文はいずれも単節斜縄文で、L—R：R—L = 5 : 2 の割合、縦方向回転が一般的である。

第37図1 (図版6の26) の土器は、口径21cm、器厚5mm平縁の中型深鉢である。口縁上端に隆帯をもつ。地文は単節斜縄文L—R縦方向回転、胎土はもろく黄褐色を呈す。



4類土器 (第38図～第40図、図版6の27～35)

口縁部上端に文様帶があり、隆起線の細長い長楕円区画又は広めの沈線帶をもつ類である。それに伴う文様技法により、次のa～cに細分される。

4類a—(第38図1～4、第39図8～32、図版6の27～31)

隆起線の長楕円区画内に、撚糸圧痕文を施しているグループである。縦の撚糸圧痕列や連弧文、直線文と、その撚糸圧痕のモチーフは3種類であるが、器形、胎土の点で共通性がある。器形の判明するものには、浅鉢形が圧倒的に多く、浅鉢形に多用された施文法であろう。深鉢形は非常に少ないが、口縁内湾のキャリパー形に近いものや口縁直上ぎみのものである。中型のものが多く、胎土、色調はバラエティーに富む。隆起線の区画文にはちがいが見られ、縦の撚糸圧痕列や連弧文をもつものは、調整が加えられ内側のくぼみが深くなっている。撚糸圧痕文の直線文が添うものは、隆起線が細く浅い。長楕円の境目には渦巻状やこぶ状の突起を持つものもある。長楕円区画文の下に沈線の連弧文、小波状文等を伴うものや、Y字状に隆起線が懸垂しているもの等がある。地文は大部分单節斜縄文L—Rである。

第38図1（図版6の27）の土器は、口径20.4cm、器厚7mmの中型平縁の深鉢である。口縁部強く内湾し、胴部は円筒状を呈す。撚糸圧痕文の3本の直線文で、口縁4区画する境目には、つまみ状突起、小さい渦巻文が配される。胎土のしまり良く、赤褐色、地文は单節斜縄文L—Rで口縁部は横回転、胴部は縦回転で施している。 $\frac{2}{3}$ 残存、底部欠損している。

第38図2（図版6の28）の土器は、口径11cm、器厚6mmの小型平縁深鉢である。やや外傾ぎみにそる口縁をもつ。隆起線の長楕円区画文にそって撚糸圧痕文、その下部には沈線の連弧文がある。暗褐色で胎土のしまりは普通、地文はL—R单節斜縄文。 $\frac{1}{3}$ 残存、底部欠損。

第38図3（図版6の29）の土器は、口径23cm、器厚6mmの中型浅鉢である。こぶ状の突起を6～8個もつらしい。長楕円区画文の下に、撚糸圧痕文だけの長楕円区画文が添う。胎土のしまり良好で暗褐色を呈す。地文は無節斜縄文1—r 縦方向回転。 $\frac{1}{4}$ 残存、底部欠損。

第38図4（図版6の30）の土器は、口径16cm、器厚6mmの中型深鉢である。口縁2箇所が隆起して、ゆるやかな波状口縁で、ほぼ直上ぎみである。長楕円区画内は連弧文が施され、その下にも付けられている。胎土のしまり良好で暗褐色、地文はL—R单節斜縄文。 $\frac{1}{2}$ 残存、底部欠損。

4類b—(等38図5、第40図33～42 図版6の32)

隆起線の長楕円区画文に沈線文や刺突列が施されているグループである。器形は口縁内湾ぎみに立ちあがる浅鉢形がほとんどで、まれに口縁外傾の深鉢が含まれる。文様のモチーフはa類に共通するが、出土点数は少ない。刺突列の形状は、弧状、列点状、スリット状等である。胎土、色調はa類に似る。沈線の連弧文、小波状文を伴うものが多い。こぶ状の小突起は見られるが平縁が一般的であろう。地文は、单節斜縄文だけでL—R : R—L = 10 : 1の割合。

第38図5（図版6の32）の土器は、口径23.3cm、底径7.4cm、器高約10.5cm 器厚6mmの中型浅鉢である。口縁2箇所に有孔の小突起をもつ。長楕円区画内は上向の刺突列点、その下に連弧文を施す。胎土のしまり良好で、内面黄褐色、外面暗褐色を呈す。地文は单節斜縄文L—R横方向回転、 $\frac{1}{2}$ 残存している。

4類C—(第38図6、7 第40図43~57 図版6の33~35)

口縁部上端に隆起線の長楕円区画文、もしくは太い隆帯に広い沈線帯を有するもので、擦糸圧痕文や沈線文、刺突文などは施されないグループである。器形は口縁やや内湾しつつ胴部の張る深鉢、直上形の深鉢、口縁内湾の深鉢、浅鉢が見られる。隆起線の太さは、幅5~15mmであり、太いものは、隆帯間が横ナデ調整され深く広い沈線帯になる。口径30cm以上、器厚8~12mmを超える大型のものがかなりあり、従って胎土に大粒の砂粒を含み荒いものが多い。口径の数箇所に渦状又は山形の大型突起をもつものもみられる。

第38図6 (図版6の33) は、口径22cm、器厚7mmの中型平縁深鉢である。長楕円区画内はミガキが施されている。

地文は単節斜繩文L—R縦回転。 $\frac{1}{4}$ 残存、底部欠損。

第38図7 (図版6の35) は、口径24cm、器厚1.0cmの大型平縁深鉢である。胴部に張りをもち口縁すぼまる形で、隆起線の境目は4箇所小突起を成す。地文単節斜繩文L—R。 $\frac{1}{5}$ 残存し、底部欠損している。



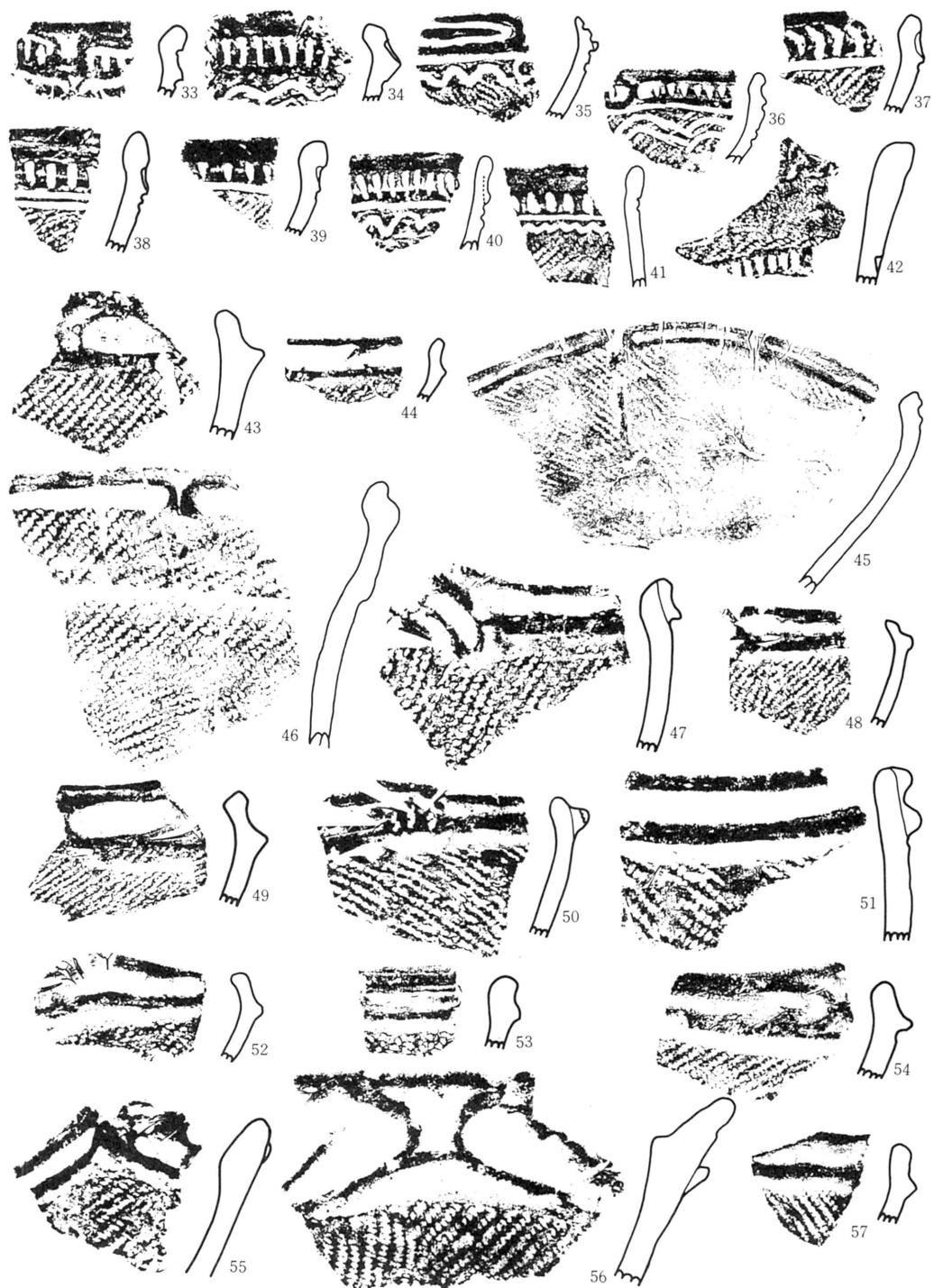
第38図 包含層出土土器実測図 1~4 (II群4類a) 5 (II群4類b) 6·7 (II群4類c)



8 ~ 32(II群4類a)

0 10cm

第39図 包含層出土土器拓影図



33~42(II群4類b) 43~57(II群4類c)

0 10cm

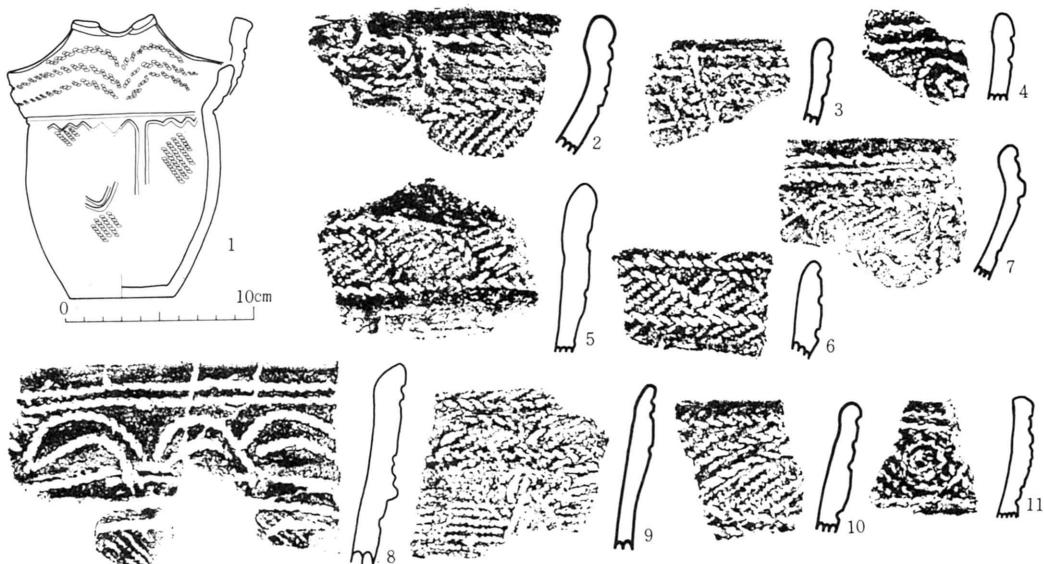
第40図 包含層出土土器拓影図

5類土器（第41図～第58図、図版7の36～図版12）

口縁部に広い文様帶があり、直曲線の区画文をもつ類である。撲糸圧痕文、沈線文隆起線文、刺突文等の施文技法のちがいからa～eに細分した。器形的には、口縁内湾するキャリバー形の深鉢、内湾ぎみに立ち上がる浅鉢が各類の共通要素であるが、少数の口縁直上又は外傾ぎみの深鉢を含むグループもある。文様のモチーフや器形、容量に共通する点が多い。本遺跡の中で最も多量に出土している類である。

5類a—(第41図1～11、42図12～29、図版7の36)

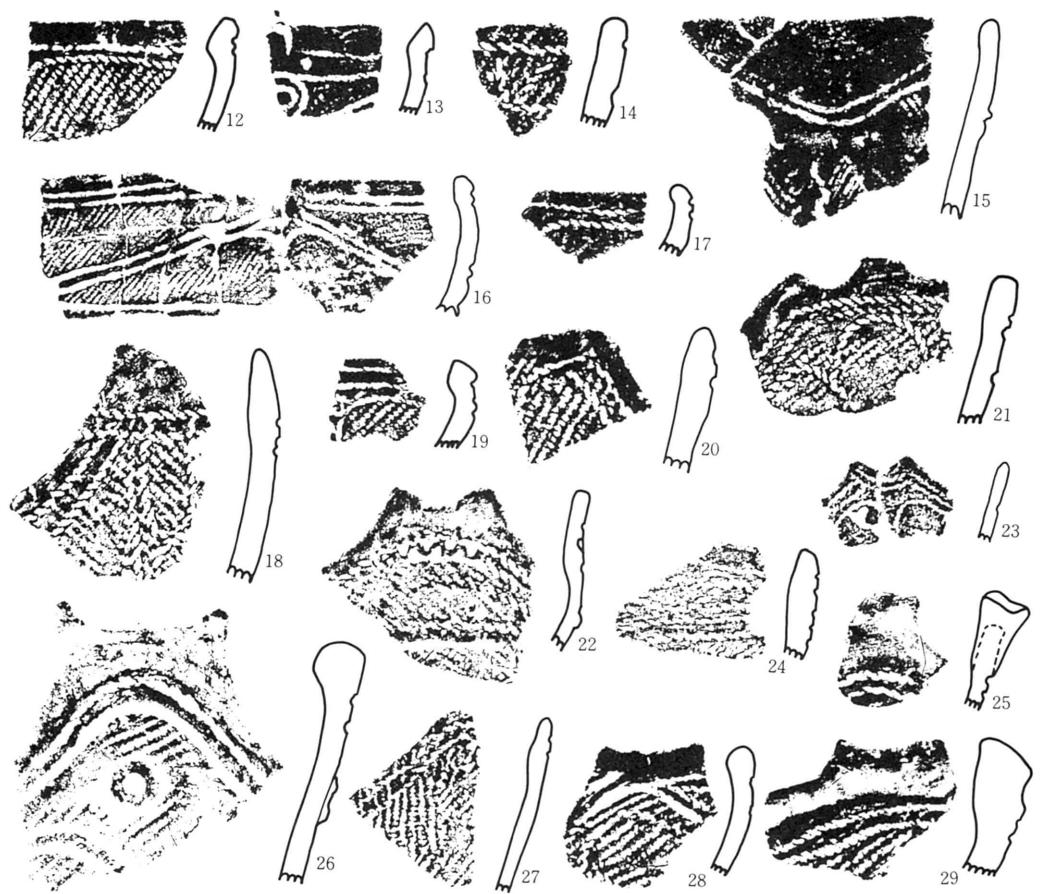
撲糸圧痕文の区画文、曲線文が主文様体になっているものである。口縁内湾ぎみの深鉢や浅鉢が多く、直上形深鉢は少ない。口縁内湾度はゆるく、完全なキャリバー形深鉢となるものは少ない。大きな山形の突起を有し、大波状口縁となるものがある。口径の推定できるものは少ないが器壁厚7～9mmと、中・大型のものが主である。文様モチーフは、長楕円状、連弧文、大波状、渦巻文等を組み合わせて表現される。つまみ状やボタン状の貼付文を施したものがある。胎土に砂粒を含み荒いものが多く、褐色、暗褐色を呈す。地文はいずれも単節斜縄文でL—R：R—L=5：1の割合である。第41図1（図版7の36）は、口径14cm（突起頂間）、底径5.4cm、器高15cm、器厚6mmの小型深鉢である。大突起は2箇所口縁部文様帶は撲糸圧痕文の曲線文、胴部に沈線文が加えられる。地文は単節斜縄文L—R縦回転。胎土のしまり良好、灰褐色を呈す。 $\frac{2}{3}$ 残存。煤の付着は、口縁部表、裏に見られる。



1～11(II群5類a)

第41図 包含層出土土器実測図と拓影図





12~29(II群5類a)

第42図 包含層出土土器拓影図



5類b一(第43図～第46図 図版7の37～42)

沈線の区画文、曲線文が主な文様体になっているものである。器形と文様構成のちがいから b₁～b₃ の3つに細分してみた。

b₁ 沈線の区画文が口縁部をめぐり、口縁やや内湾ぎみ又は、内湾の著しいキャリパー形の深鉢形を一括した。平縁をなすものと、口縁に大きな山形突起を有し大波状口縁をなすものとがある。口径25cm以上、器壁厚7mm以上の中・大型のものが多いた。胎土に砂粒を含むが焼きしまりの良好なものがほとんど、色調はにぶい褐色、暗褐色が主である。沈線による文様帶は、ほぼ口縁部～頸部に限定されるが、例外的なものとして図13のように胴部にも施したものもある。文様帶を構成するモチーフは、長楕円形や隅丸長方形、口縁を4区画する大波状、大型の突起にそったなめらかな三角状等の区画文を基調に、渦巻文、円文、連弧文などを配している。区画文の境目には、沈線の半円文、つまみ状の貼付文、横にはりだすこぶ状の小突起が見られる。口縁部文様帶の下部(頸部)には、沈線の連弧文や、平行線文、一本の隆起線を施したものな

どある。大型の山形突起の形状は、突起頂部が平坦なもの、2～3に波うつもの、なめらかな曲線のもの、極端に肥厚し渦状に隆起しているもの等が観察され、又きざみや突起中央部に穿孔を施したものがある。地文は、単節斜縄文L—Rが大部分で、口縁部は横方向に、胴部は縦方向に回転するものが多い。

第43図1(図版7の37)は、口径17.4cm、器厚6mmの中型深鉢である。口縁内湾するキャリパー形で、口縁部文様は沈線による曲線区画文、頸部には連弧文が施される。胎土のしまり良好で暗褐色、地文はL—R単節斜縄文横及び縦回転である。 $\frac{1}{3}$ 残存、底部欠損。口縁に煤付着する。

第43図2(図版7の38)は、口径24.0cm、底径11.6cm、器高38.7cm、器厚8mmの中型深鉢である。

口縁部は、大波状に4区画しその中央に渦巻文を配している。つまみ状の小突起もつけられる。

胎土のしまり良好で、にぶい褐色を呈す。地文は単節斜縄文L—Rである。 $\frac{1}{3}$ 残存、底部欠損。

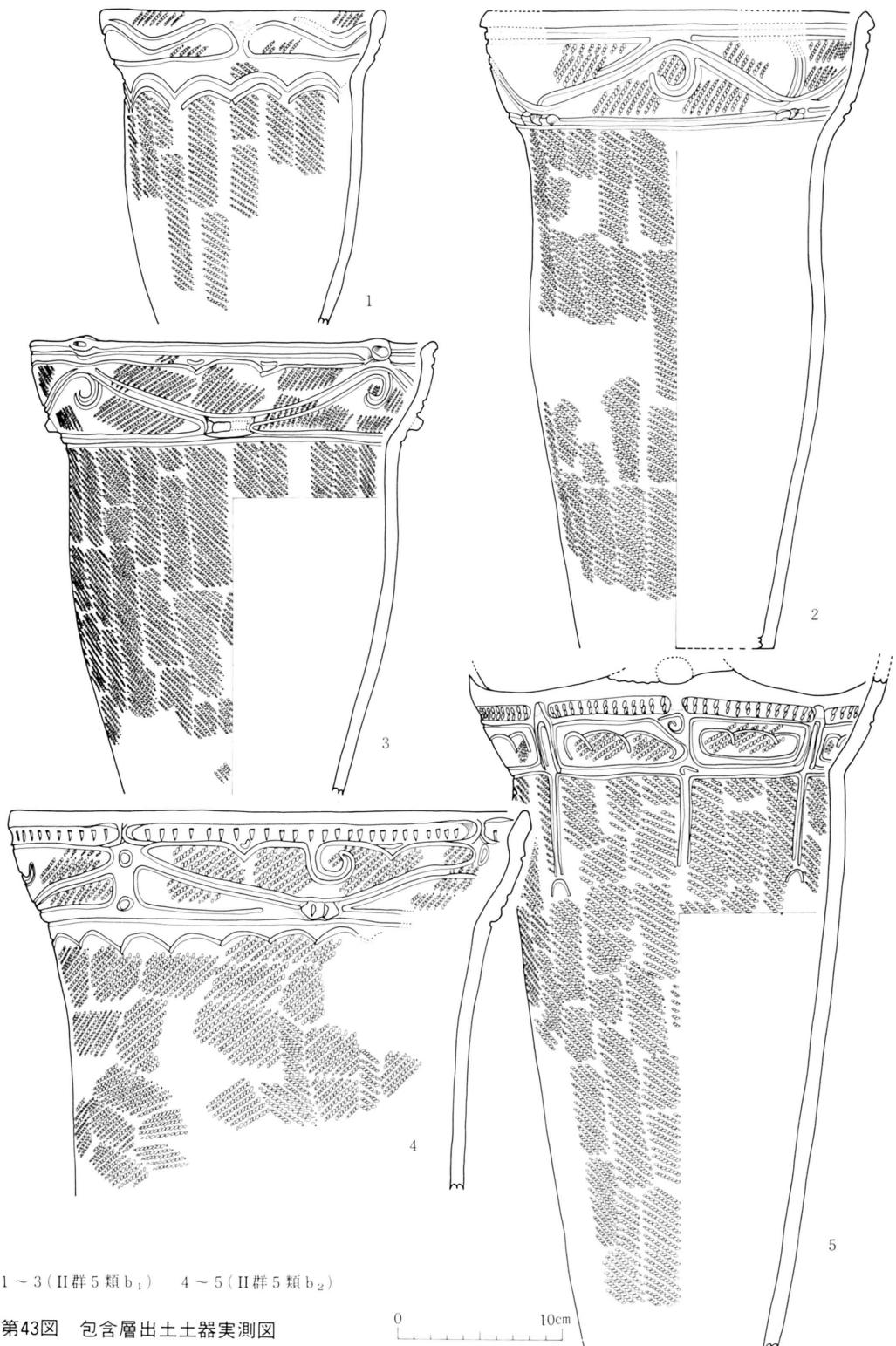
第43図3(図版7の40)は、口径24.8cm、器厚8mmの中型深鉢である。口縁部区画文様のモチーフは2の土器と同様である。こぶ状の小突起も見られる。地文はL—R単節斜縄文、胎土はしまり良好で、にぶい暗褐色を呈す。4/5残存、底部欠損。口縁及び胴部上半に煤付着する。

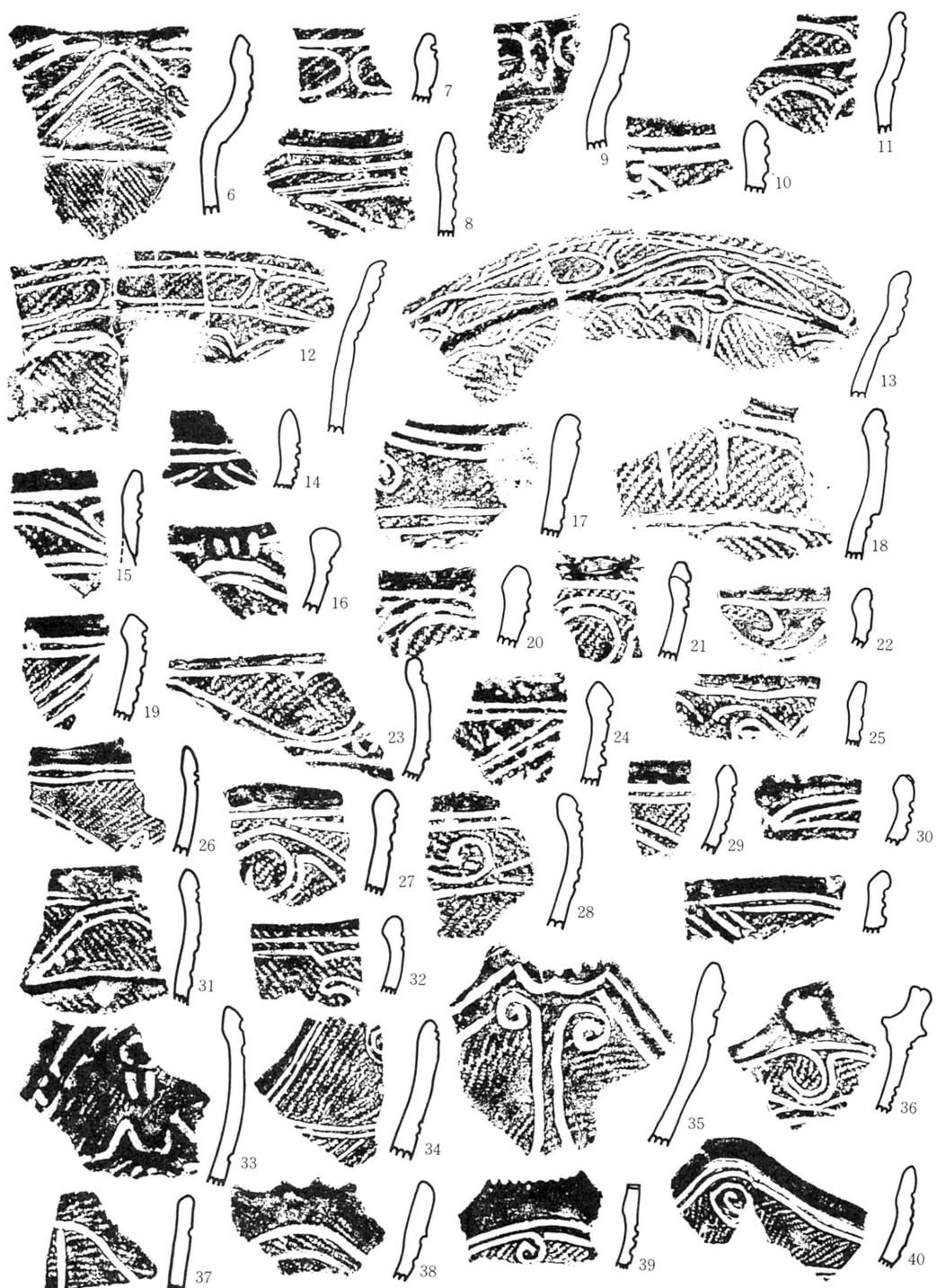
b₂ 沈線の区画文が口縁部にあり、器形もb₁と同様だが、区画文の上部、口縁上端に第II群4類に用いられた技法、つまり長楕円の隆起線の区画内や幅広の沈線帯に、縦の撚糸圧痕文や沈線文、刺突列点文を施す細長い文様帯があるものである。b₁と同様に中、大型がほとんどで、キャリパー形深鉢、平縁が多い。胎土色調もb₁と類似している。沈線の区画文様とそのモチーフもb₁に共通する。刺突や撚糸圧痕文の施していないものもある。

第43図4(図版7の42)は、口径32cm、器厚8mmの大型深鉢である。口縁は大波状に4区画し、渦巻文を配す。円文、つまみ状貼付文が加えられ、頸部には連弧文が施されている。長楕円区画内は、刺突列点文である。胎土のしまり良好で、赤褐色～褐色を呈す。地文は単節斜縄文で、縦及び横回転で、羽状をなす部分もある。 $\frac{1}{3}$ 残存し、底部欠損している。

第43図5(図版7の41)は、口径約25cm、器厚1cmの、円筒形に長い大型深鉢である。口縁部には、有孔の大突起が4箇所あったらしい。口縁部は、ほぼ長方形の区画文で8区画されてその中に連弧状の沈線が入る。区画の境目には渦巻文や、胴部に懸垂する平行沈線がある。上部文様帯内は、縦の撚糸圧痕列である。胎土はしまり良好、にぶい褐色を呈す。地文は単節斜縄文L—R、横、縦方向回転である。 $\frac{1}{2}$ 残存し、底部欠損している。

b₃ 沈線の区画文様を主とするが、器形の点で相違するものを包括した。口縁外傾ぎみのものと直上形の深鉢、浅鉢である。浅鉢は少ない。胎土色調は、b₁・b₂に類似し、容量は中型のものが多い。文様モチーフは、沈線の曲線文に連弧文が多用されている。直上形の深鉢では、沈線の文様が胴部にまで広がりを示す。出土量が少ない。尚、沈線文様をもち、口縁は外反する器形の深鉢は、後述の6類cに分類してある。

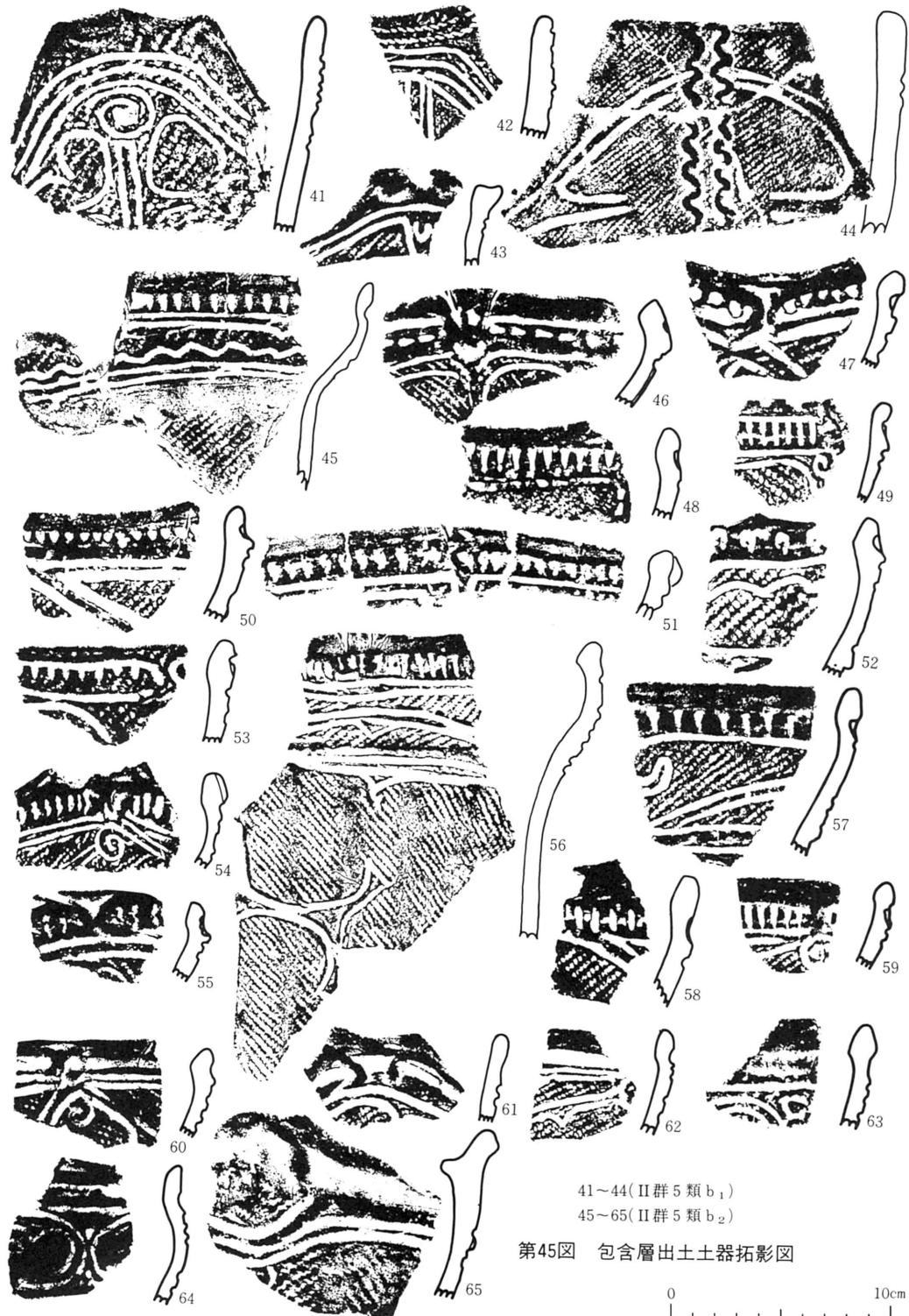




6~40(II群5類b₁)

第44図 包含層出土土器拓影図

0 10cm



第46図 包含層出土土器拓影図 66~80(II群5類b₃)

5類c—(第47図、48図、49図、図版8の43~50)

隆起線の区画文にそって撚糸圧痕文が施されているものである。文様構成の点から、c₁～c₄に細分した。c₁とc₂はひとつのグループとして見ることも可能であるが、文様帯の構成の相違から分けて記述する。またc₂が最も出土量が多い。

c₁ 隆起線の区画文、曲線文にそって撚糸圧痕文が施されている。器形は、口縁内湾するキャリパー形深鉢と少量の口縁外傾する深鉢も含む。器厚6～8mmの中型が主で、山形突起をもつ大波状口縁のものは大型である。胎土はもろくなっているものが多くにぶい褐色が主調色である。隆起線の区画文は、長楕円形、口縁を4区画する大波状、山形突起にそった曲線文等であり、その内側には、撚糸圧痕文の連弧文、渦巻文、曲線文が配されている。渦巻状の突起やつまみ状貼付文沈線の小波状文が見られる。大型突起の形状は、頂部が2又のもの、きざみをもつものがある。地文はすべて単節斜縄文でL—Rが大部分を占める。

第47図1(図版8の44)は、口径15.4cm、器厚6mmの中型深鉢で胴部に張りをもつキャリパー形である。隆起線の大波状の区画文にそって撚糸圧痕文が施される。胎土のしまりはやや不良

で暗褐色、地文は単節斜縄文 L—R 横、及び縦回転である。 $\frac{1}{4}$ 残存し、底部欠損している。

第47図2（図版8の43）は、口径約20cm、器厚7mmの中型深鉢である。口縁内湾するが胴部に張りのない形である。区画文様は長楕円が2段に重なったモチーフをもつ。胎土はやや不良で褐色～暗褐色を呈す。地文はL—R単節斜縄文である。 $\frac{1}{4}$ 残存、底部欠損。器壁内に煤付着。

c₂ 隆起線の区画文様帶の上部に、長楕円形状にかこまれた間を撚糸圧痕文の連弧文、小波状文、直線文、圧痕列等で充たした細長い文様帶がともなっているものである。器形は、口縁内湾するキャリパー形深鉢、口縁が強く内湾し、胴部下半が漏斗状に急にすぼまる浅鉢、内湾しつつ立ちあがり突起をもつ浅鉢などである。口径25cm以上、器厚6mm～13mmの中、大型のものが多い。深鉢形のものには、大型の山形突起は見られず平縁が大部分で、まれに渦巻状の小突起がつく程度である。浅鉢形土器には、大型の突起がついており、その形には、耳状に2つにはりだす形が目につく。低い渦巻状のものもある。隆起線による区画モチーフはc₁と共通するが、浅鉢形には、口縁部から胴部上半にかけて大きな弧状に懸垂させるものが使われる。連弧文は2本の平行線によるものが多い。口縁上端には、きざみを施した小波状の隆起線文の貼付が数点見られる。又、橋状の把手をもつものがある。区画文様の中央とか境目に用いられる渦巻文は大きく強調されることはない。地文は単節斜縄文L—R、複節は1点である。

第47図3（図版8の45）は、口径約40cm、器厚1.2cmの大型深鉢である。口縁内湾の、胴部には張りのないキャリパー形であろう。上部の長楕円区画内は、波状文、区画の境目は隆起している。胎土はしまり良好で、にぶい暗褐色を呈す。地文は単節斜縄文L—R。口縁部のみの破片。

第47図4（図版8の47）は、口径約29cm、器厚7mmの大型深鉢である。器形は図3と同じキャリパー形、平縁であろう。隆起線の区画文は、口縁を4区画してめぐり、その間に、波状や円形の撚糸圧痕文を配する。地文は単節斜縄文R—L縦回転、胎土のしまり良好で赤褐色、1/6残。

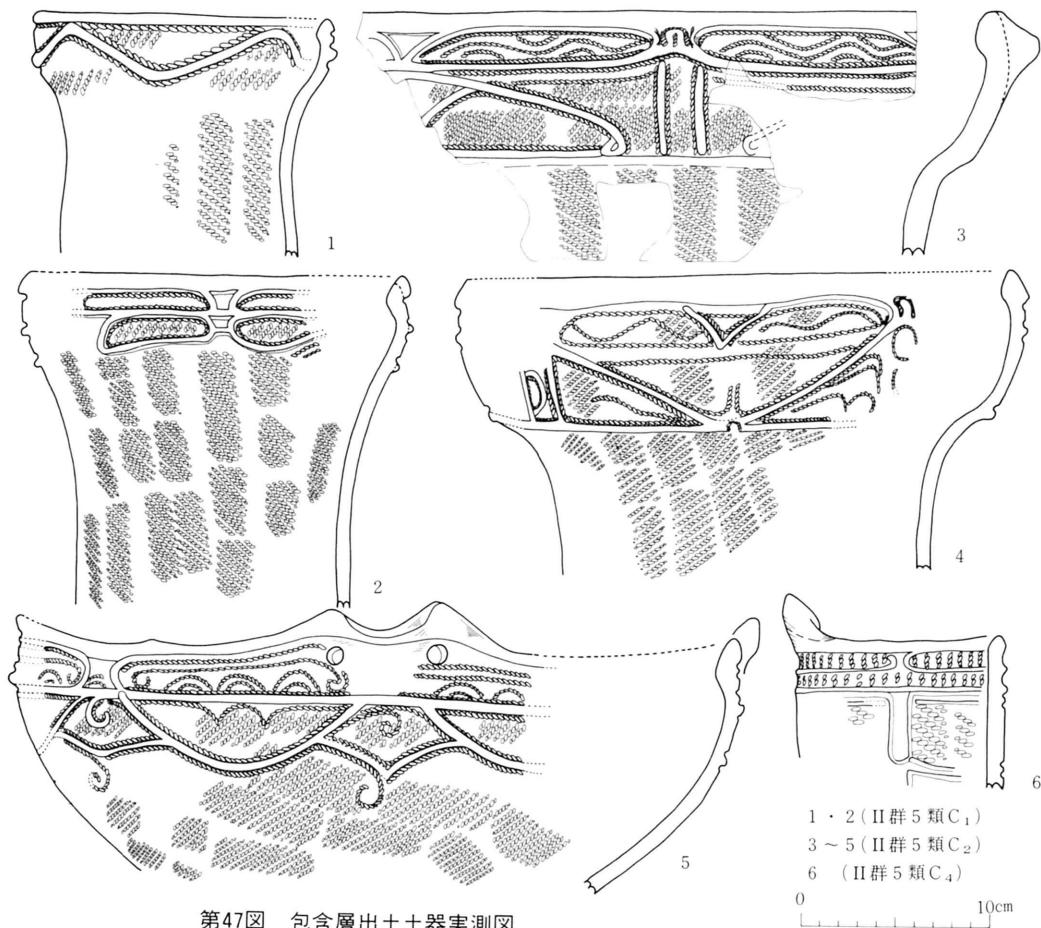
第48図7（図版8の48）は、口径28cm、底径7.6cm、器高15.5cm、器厚7mmの大型浅鉢である。口縁部が強く内湾し、底部は漏斗状にすぼまる形である。隆起線の区画文様は、小突起を結ぶ弧状文のみで、上半部には波状の撚糸圧痕文を施す。口唇部近くに小波状の隆起線を貼付している。胴部上半には、撚糸圧痕文の曲線文を配する。胎土のしまり良好で暗褐色を呈す。地文は複節斜縄文R—L—Rの縦方向回転。 $\frac{1}{2}$ 残存している。

第47図5（図版8の49）は、口径38cm、器厚8mmの大型浅鉢である。内湾しつ立ちあがる口縁に、背の低い有孔の突起を4箇所もつらしい。隆起線の区画文様は、胴部上半で大きな弧状を描き、その中に渦文を配する。上部文様帶は、撚糸圧痕文の直線文や連弧文である。胎土のしまり良好で赤褐色を呈す。地文はL—R横方向回転で、 $\frac{1}{4}$ 残存し、底部欠損している。

c₃ 隆起線の区画文にそった区画文様の上部に、太い隆帶をめぐらし、なでて調整された無文の隆沈帯をもつものである。破片のみで器厚が8mm～13mmと厚手で、口径は不明だが大型のキャ

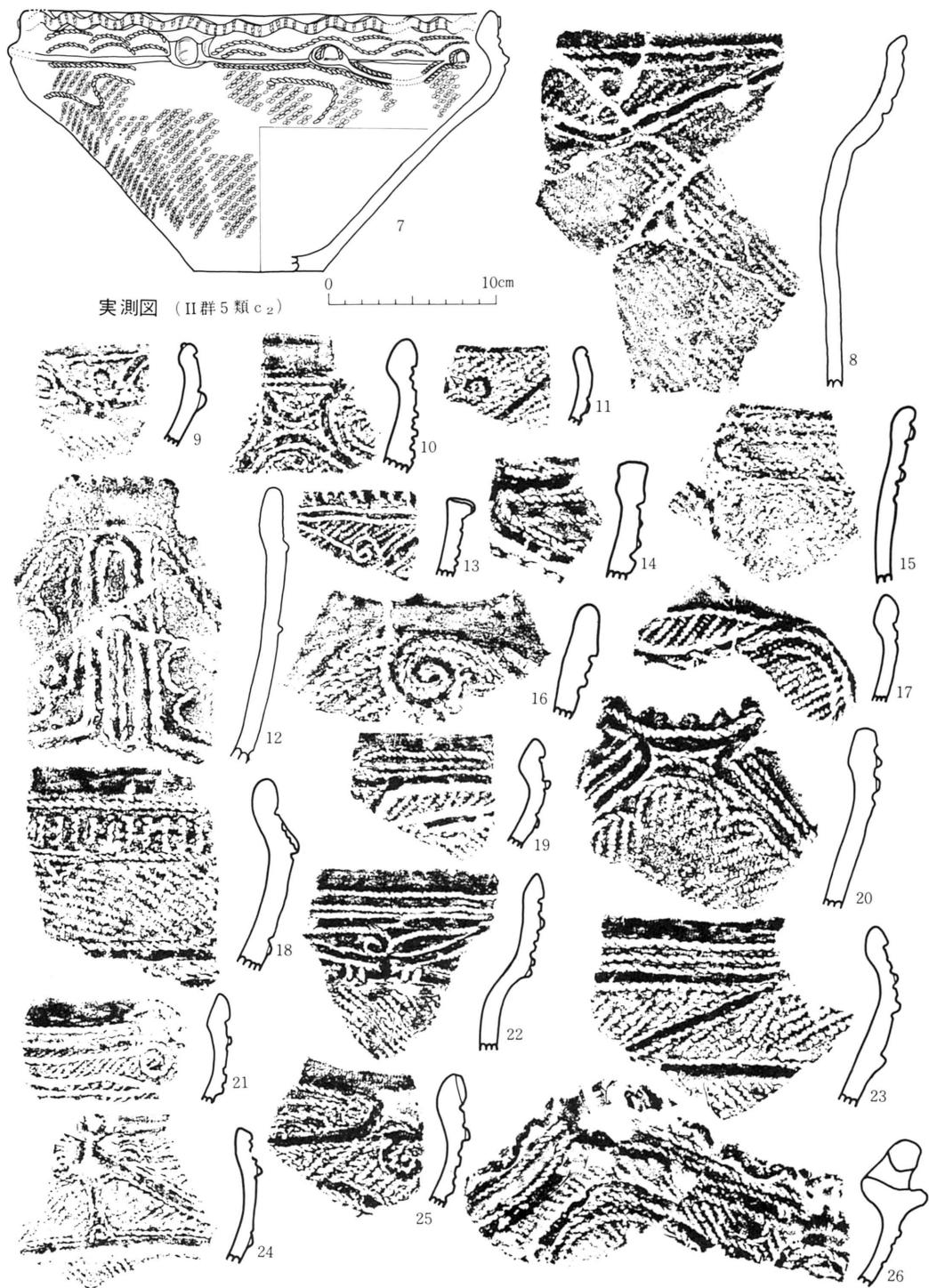
リパー形深鉢か浅鉢形になると思われる。大型の突起を有し、その形は横位の渦巻文をアレンジしたもので、 c_1 に見られた山形の突起とは異なる。区画文内の渦巻文は、大きく強調されて、文様の主体となっている感がある。胎土は砂粒を含むが、しまり良好のものが多く、又、色調は、黄褐色、暗褐色、赤褐色とバラエティーに富む。地文は、単節斜縄文 $L-R : R-L = 2:1$ の割合である。

c_4 隆起線の横帯と縦長の撚糸圧痕列が施されているものである。撚糸圧痕文が隆起線にそういうものでなく、5類Cに含めるはどうかと疑問が残る。出土数が少なく、用いる施文の種類と、器形に共通性があるので、一応入れて見た。暗褐色、赤褐色が主調色で、胎土は、細砂を含む。器形は、小、中型の深鉢である。横にはり出す渦状突起や、きざみのある小波状の隆起線が見られる。頸部に平行沈線を伴うものがある。第47図6(図版8の50)は、口径11cm、器厚8mmの小型深鉢である。口縁直上形で、大きな突起がつく。隆起線の横帯間に縦の撚糸圧痕列をもつ。胴部には、沈線の直曲線が見られる。胎土はもろく、暗褐色である。地文は単節斜縄文 $L-R$ 縦方向回転。 $\frac{1}{4}$ 残存し底部欠損している。



第47図 包含層出土土器実測図

第 VII 地 区



第48図 包含層出土土器拓影図

0 10cm



第49図 包含層出土土器拓影図

27~32(II群5類c₂) 33·34(II群5類c₃)35·36(II群5類c₄)

0

10cm

5類d—(第50図～第55図、図版8の51～図版10)

隆起線文の区画文、曲線文にそって沈線文が添う隆沈線文で表現されているものである。分類できた口縁部破片の中で最も多量に出土した類である。口縁内湾したキャリパー形深鉢が主体であり、浅鉢形のものは少量である。文様モチーフの違いから d₁～d₄ の4つに細分し得た。特に d₂～d₄ は共通点が多い。

d₁ 隆起線に沈線が添う隆沈線文の区画文が、文様帯を成しているものである。器形は口縁内湾のキャリパー形深鉢である。器厚は5mm～12mmの間にまんべんなく分布し、口径15cm以下の小型のものから、口径30cmを超える大型のものまで、その容量はさまざまである。口縁部は平縁が大部分であり、大きな山形突起をもち大波状口縁となるものは比較的少ない。大きな突起には、渦巻状や横S字状、半円形等がある。区画モチーフは、口縁を4～8等分する長楕円

第 VII 地 区

形、大波状を基本に、その内部をさらに区分する曲線文や懸垂文、渦巻文で構成されている。隆起線に添う沈線は、隆起線の両側 1 本ずつ 2 本の場合と、2 本ずつ計 4 本となっている場合がある。後者の場合、区画の内側にあたる沈線が、内側に屈曲したり、弧や渦巻文を描く。区画の境目や中央部には、渦巻文の他、円文、つまみ状貼付文が見られ、又沈線の連弧文は、文様帶下部の頸部にみられるが、文様帶の内部にくみこまれているものもある。胎土のしまり良好で、にぶい褐色が主調色、地文は単節斜縄文が大部分で、 $L - R : R - L = 4 : 1$ の割合、その他、羽状縄文 1、無節斜縄文 2 である。地文の回転方向は、口縁部横回転、胴部縦回転が多い。

d_2 隆沈線文の区画文は d_1 と同様であるが、その区画文様帶の上部に、隆起線文による長楕円状か幅広の沈線帶に撲糸圧痕列や直線文を施した細長い文様帶をもつものである。器形は口縁内湾のキャリパー形深鉢が大部分を占め、若干の浅鉢を含む。区画文様の境目には必ず渦状、S 字状等の突起がつく。しかし、山形に大きく盛り上がる大波状口縁のものは少なく、突起の大きさはひかえめである。突起の形状は、縦位、横位の渦巻状、S 字状、耳状に隆起するもの、こぶ状が見られる。器厚 7~10mm の、中、大型が主で、口径 40cm 以上の超大型もかなりある。用いられる撲糸圧痕文には、圧痕列、直線文の他、連弧文、小波状文等が見られる。胎土は、大旨しまり良好、色調はにぶい褐色が主、地文は単節斜縄文がほとんどである。

第50図 2 (図版 8 の 52) は、口径約 30cm、器厚 9 mm の大形深鉢である。口縁部を 4 等分する大波状の区画文に渦巻文を配する。上部文様帶は撲糸圧痕文、境目には小突起、X 字状貼付文をもつ。地文は単節斜縄文 $L - R$ 縦方向回転。1/5 残存。底部欠損。胎土がもろく、褐色である。第51図 4 (図版 10—39) は、口径 38cm、器厚 8 mm の大型平縁の浅鉢である。胴部上半には懸垂する隆沈線の区画文、平行沈線の曲線文、上部文様帶は長楕円区画文の内部に撲糸圧痕文を施す。胎土のしまり良好で暗褐色を呈す。地文 $L - R$ 単節斜縄文である。 $\frac{1}{3}$ 残存、底部欠損。

d_3 文様モチーフは d_2 と同様だが、上部文様帶に用いるのは、撲糸圧痕文ではなく、沈線や刺突列になっているものである。器形は、口縁内湾のキャリパー形深鉢がほとんどであるが、口縁直上形の深鉢も若干ある。 d_1 と同様に、大きな山形の突起をもつものは少なく、文様帶の境目に小突起のみつくことが多く、単に X 字状に隆起しているだけのものもかなり見られる。小突起の形状は、 d_1 に類似しているが、渦状のものが多い。刺突には、棒状、爪形状、列点状、沈線文では、直線や小波状、連弧文が用いられる。器厚 7 mm~10 mm、中、大型が多い。胎土色調は d_1 と同様である。地文は、単節の斜縄文 $L - R$ がほとんどである。

第51図 3 (図版 8 の 51) は、口径約 29cm、器厚 1 cm の大型深鉢である。口縁直上形で、ゆるやかに盛りあがる耳状の突起が 1 対あるらしい。長楕円に区画された文様帶の上部には刺突列点文が施されている。胎土のしまり良好で暗褐色、地文は単節斜縄文 $L - R$ 、 $\frac{1}{2}$ 残存、底部欠損。

第51図 5 (図版 10 の 60) は、口径 20.8cm、底径 11.6cm、器高 35.5cm、器厚 9 mm の大型深鉢であ

る。内湾する口縁部の区画文様は、大波状にめぐり、渦巻文を配する。上部文様帶は、刺突列点文である。渦状の突起はいくつであったかは不明である。頸部には沈線の連弧文と鉤状の懸垂文がある。胎土良好、暗褐色、地文は単節斜縄文L—R横回転、 $\frac{1}{3}$ 残存である。

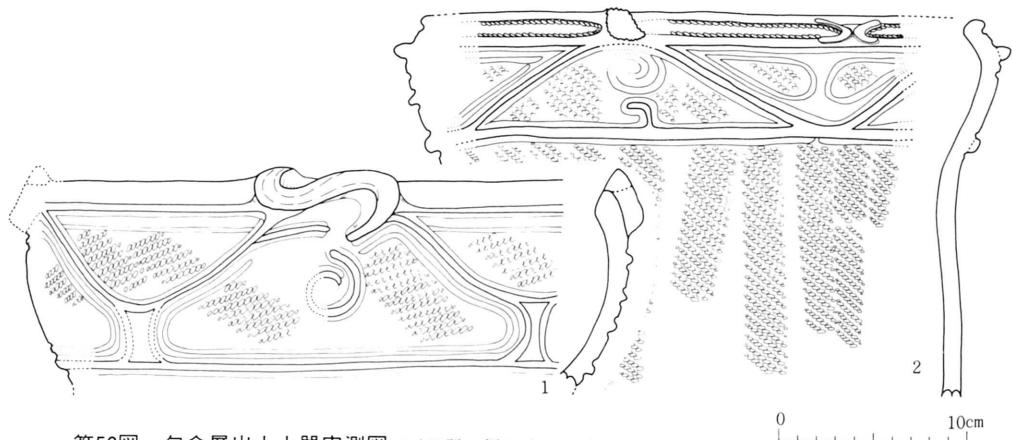
第52図8（図版10の69）は、口径27.8cm、器厚8mmの大型深鉢である。区画文様は上記の土器と類似するが、上部文様帶には、沈線の直線文が施されている。突起の数は4つと思われる。胎土は、ややしまりが荒く、赤褐色を呈す。地文はR—Lの単節斜縄文、 $\frac{1}{4}$ 残存、底部欠損。

d_4 文様モチーフは d_2 、 d_3 と同様であるが、上部文様帶にあたる部分には、撲糸压痕文、沈線や刺突文は施されずに、無文でミガキ調整のみのものである。器形はやはり、口縁内湾のキャリパー形深鉢が主体である。少量出土の口縁直上ぎみの深鉢や浅鉢形では、その文様帶は胴部上半まで広がりを見せる。山形に大きくつきだす突起は少なく、大部分は渦巻を縦、横位にアレンジした突起であり、それが大波状口縁様に大きく波うつのはまれである。器厚は7～12mm、口径30cmを超える大型のものが多い。区画文様のモチーフは d_2 、 d_3 に類似する。胎土、色調も同様である。地文の大部分は単節斜縄文でL—R：R—L=7：1の割合となっている。

第50図1（図版9の54）は、口径30cm、器厚1cmの大型深鉢の口縁部である。口縁部区画文様の中央に横S字状の突起が4つ付いていたらしい。口縁上端は隆帶の中央をなで調整し浅くくぼんでいる。胎土はやや不良で暗褐色、地文はL—R単節斜縄文斜め回転、胴部、底部欠損。

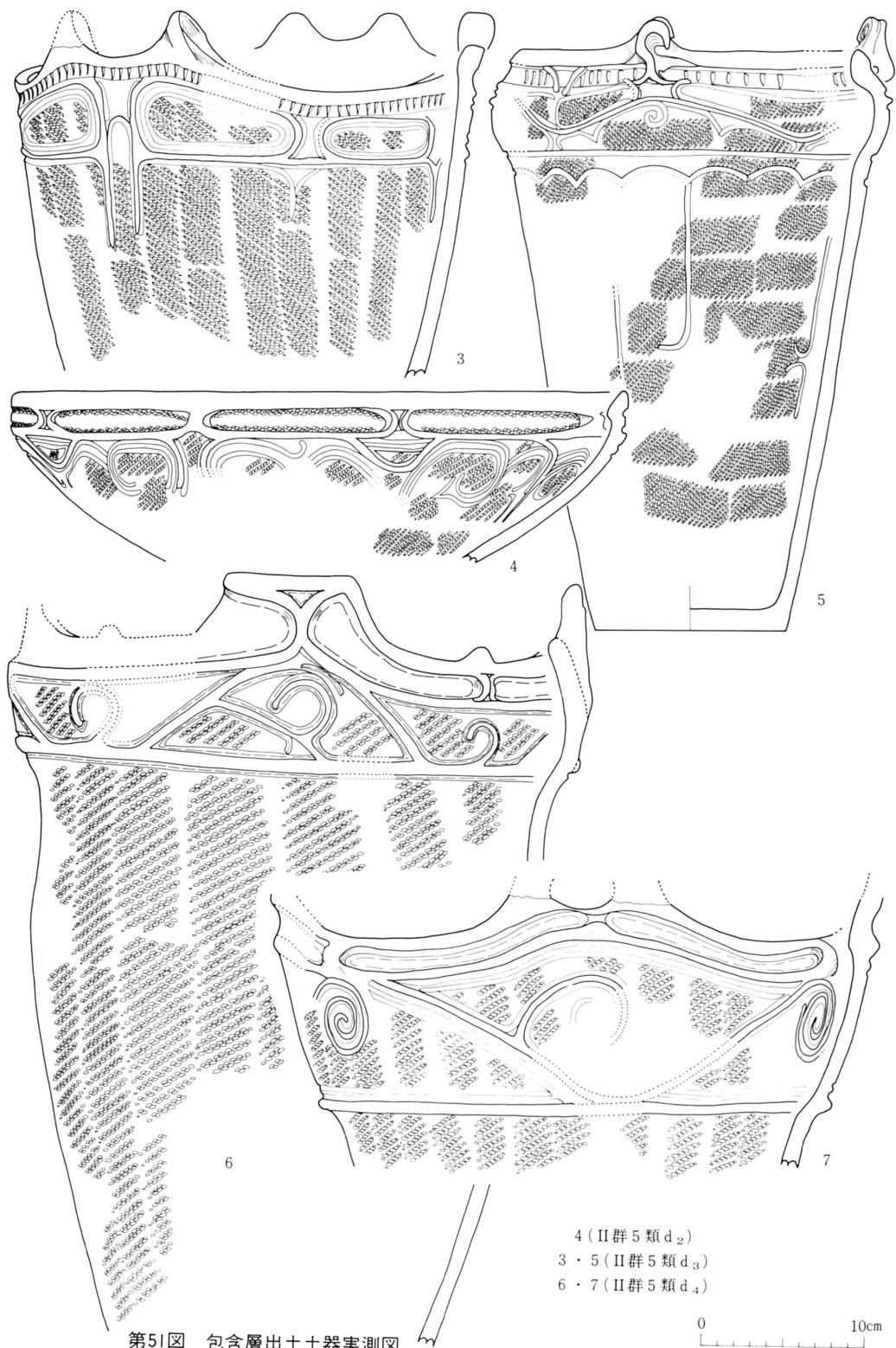
第51図6（図版9の55）は、口径36cm、器厚1cmの大型深鉢である。口縁部に大きく隆起した突起は4つ、小突起4つ付いていたらしい。区画文様の上部は、調整された隆帶がめぐる。地文は複節斜縄文R—L—R縦回転、胎土大粒の砂粒を含みやや荒く、赤褐色、 $\frac{1}{2}$ 残存、底部が欠損している。

第51図7（図版9の53）は、口径38cm、器厚1cmの大型深鉢である。大きな有孔の突起が4つ付いていたらしい。上部文様帶は、ミガキ調整されている。胎土のしまり良く赤褐色を呈す。地文は、単節斜縄文R—L縦回転、口縁部のみ $\frac{1}{3}$ 残存で胴部、底部は欠損している。

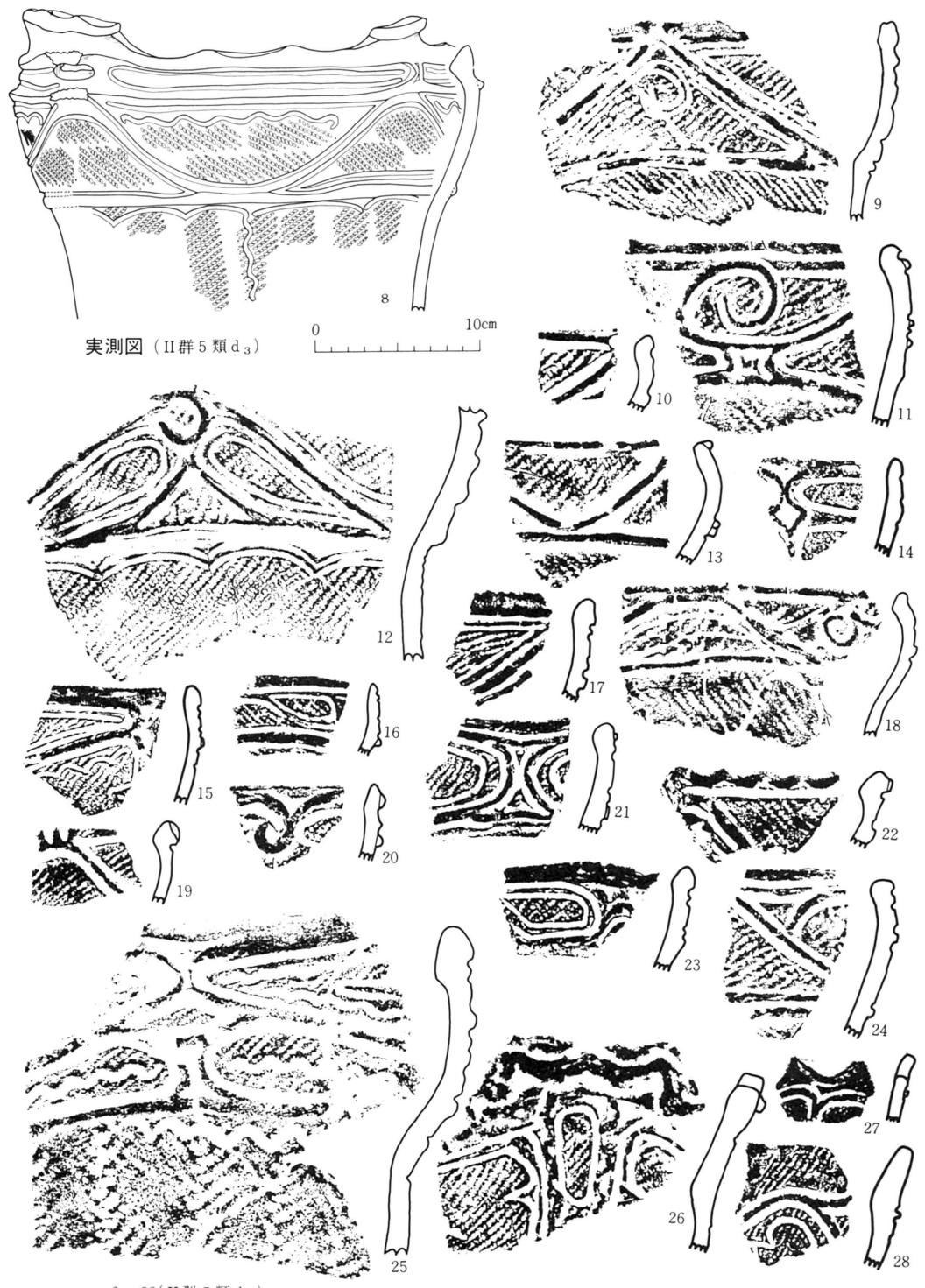


第50図 包含層出土土器実測図 1(II群5類 d_4) 2(II群5類 d_2)

第 VII 地 区



第51図 包含層出土土器実測図



9 ~28(II群 5類 d₁)

第52図 包含層出土土器拓影図

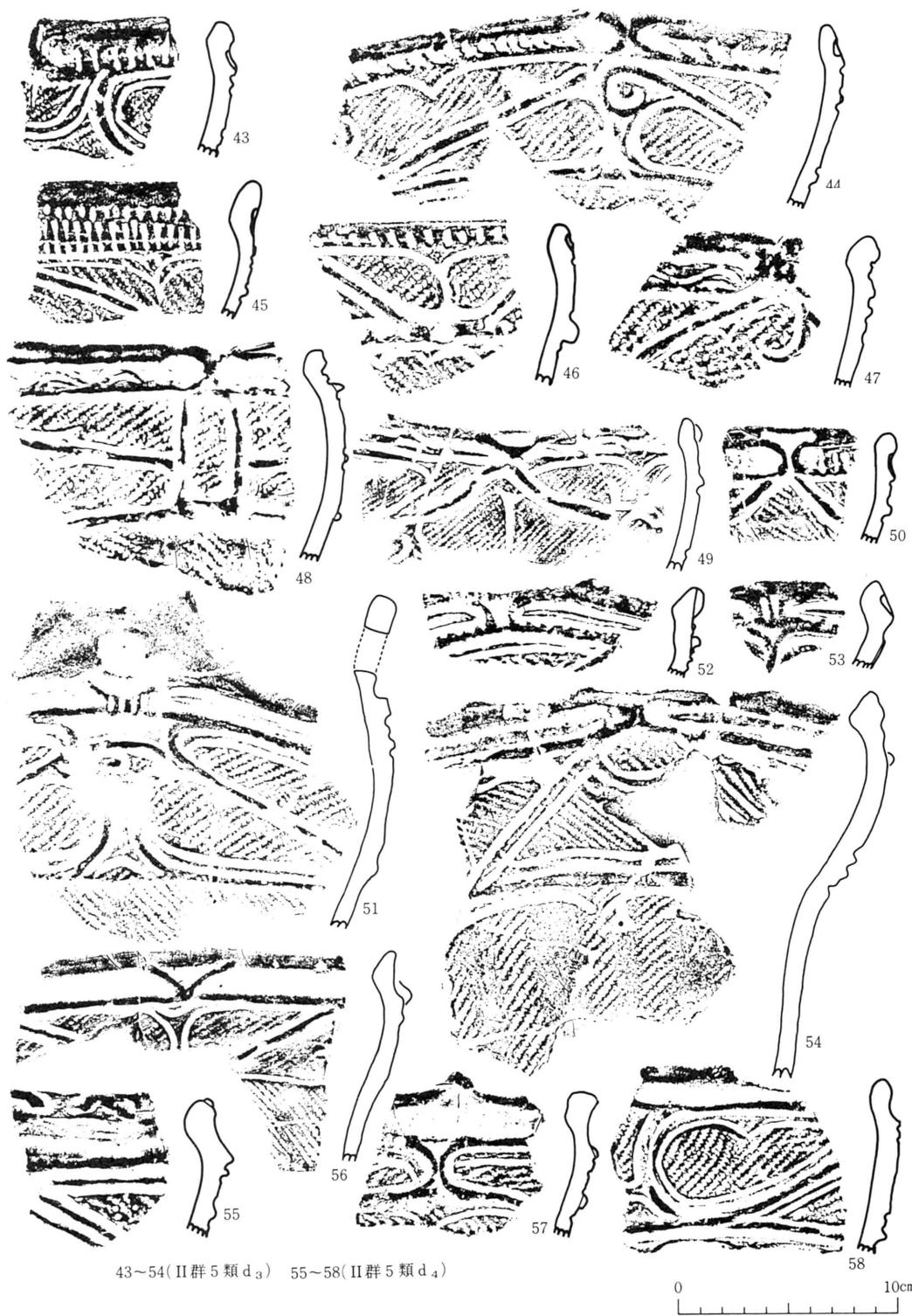
0 10cm



29~35(II群5類d₁) 36~42(II群5類d₂)

0 10cm

第53図 包含層出土土器拓影図



第54図 包含層出土土器拓影図



第55図 包含層出土土器拓影図

5類 e — (第56図～58図、図版11～図版12) 隆起線の区画文を文様主体とするものである。文様構成の上から $e_1 \sim e_2$ の2つに分けたが、さらに細分できそうな類である。

e_1 隆起線文の区画文が口縁部をめぐる。器形は、口縁内湾のキャリパー形深鉢を主体に浅鉢も含む。器厚は5～11mmと小型から大型まで、バラエティーに富む。平縁が大部分で、区画文様の境目には、渦状やこぶ状、つまみ状の小さめの突起がつく。少量ではあるが大きな山形や横S字状の突起も見られる。区画のモチーフは、大波状に口縁部を等分してまわるものその他、渦巻文が大きく強調され、ゆるやかな曲線で連結するもの、渦巻文が省略され、単純な直曲線のみのものなどである。口縁部区画文様の下部、胴部全面に、平行沈線による直曲線の区画文様が施されて、胴部にも文様帯を設けている深鉢がある。区画文を表現する隆起線は、単線によるものと2本の平行沈線によるものとがある。後者の平行沈線間は、ミガキか沈線の調整が施

されていることが多い。胎土は大旨良好であり、にぶい褐色を主調色に、黄褐色、赤褐色を若干含む。地文は単節斜縄文が大部分で、 $L-R : R-L = 2 : 1$ でかなり、 $R-L$ の比率も高くなっている。その他複節斜縄文 1 である。

第56図 1 (図版11の75) は、口径30cm、器厚 1 cm の大型深鉢である。口縁部は細い隆起線の区画文の中央上部に 4 つの大きな突起がつく。胎土のしまりやや不良で暗褐色を呈す。地文は単節斜縄文 $R-L$ の口縁部横回転、胴部縦回転、 $\frac{1}{4}$ 残存し底部欠損している。

第56図 3 (図版11の70) は、口径23.2cm、器厚 7 mm の中型深鉢である。平縁と思われる。2 本の平行隆起線による渦巻文が強調されている。胎土のしまり不良で褐色を呈す。地文は単節斜縄文 $L-R$ の横及び縦回転である。 $\frac{1}{4}$ 残存、底部欠損し胴部に煤付着している。

第56図 4 (図版11の71) は、口径48cm、最大胴径51.2cm、器厚 9 mm の大型浅鉢である。口縁部強く内湾し、底部は不明だが漏斗状にすぼまる形と思われる。隆起線文は小さな渦巻文を中心横走している。胎土はやや不良で黄褐色と暗褐色の部分がある。地文は単節斜縄文 $R-L$ の縦及び横回転である。1/6残存し底部欠損している。

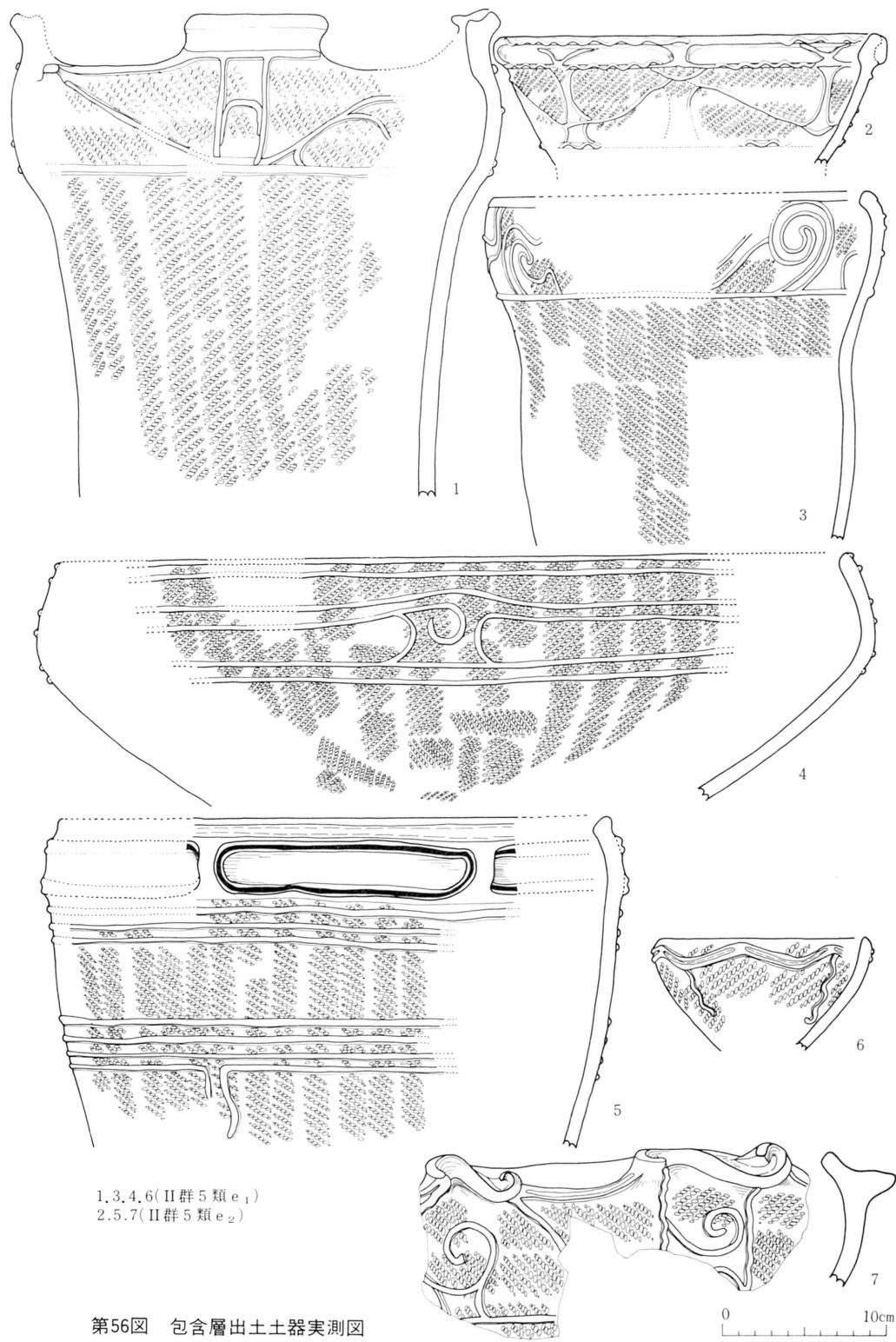
第56図 6 (図版11の77) は、口径12.6cm、器厚 7 mm の小型浅鉢である。隆起線の大波状文に小波状に懸垂する文様をもつ。太い隆帶の上は浅い溝が施されている。胎土のしまりやや不良でにぶい褐色を呈す。地文は単節斜縄文 $L-R$ 、 $\frac{1}{2}$ 残存し底部欠損している。

e₂ 隆起線の区画文上部に、太い隆起線による長楕円や幅広の沈線帯の細長い文様帯をもつものである。その多くは口縁 4 箇所で大きく隆起し、渦巻状の種々の大きな突起をもつ。器形は口縁内湾のキャリパー形深鉢である。器厚 8 mm ~ 12 mm の大型のものが多く、口径40cmを超える超大型もかなりある。区画モチーフは e₁ に類似する。突起には山形に隆起するものは少なく、渦巻文を縦、横にアレンジした形である。上部文様帯は、無文のミガキが加えられ、広い溝状になっているが、中に撚糸圧痕文、刺突列を施したものが少量見られる。胎土色調は e₁ と同様。地文は単節斜縄文が主で、 $L-R : R-L = 3 : 1$ の割合、複節斜縄文 2 である。

第56図 2 (図版11の72) は、口径23.4、器厚 7 mm の中型深鉢の口縁部である。隆起線の区画文様の上下に小波状隆起線の貼付がある。胎土やや不良で褐色を呈す。地文は単節斜縄文 $L-R$ 。

第56図 5 (図版11の79) は、口径33.4cm、器厚 9 mm の大型深鉢である。口縁上端は内湾ぎみの直上形深鉢で平縁と思われる。隆起線の直線文と上部に広い沈線帯をもつて、このグループに含めた。橋状把手をつくる隆帶の上には溝状沈線が施されている。胎土のしまり良好で褐色を呈す。地文単節斜縄文 $L-R$ 縦方向回転。1/5残存し底部欠損している。

第56図 7 (図版11の76) は、器厚1.1cmのキャリパー形深鉢の口縁部である。隆起線の区画文の上部には、ミガキ調整の施された広い隆帶があり、横 S 字形の大きな突起がつけられる。胎土のしまりやや不良で褐色である。地文は単節斜縄文 $R-L$ の縦及び横回転である。



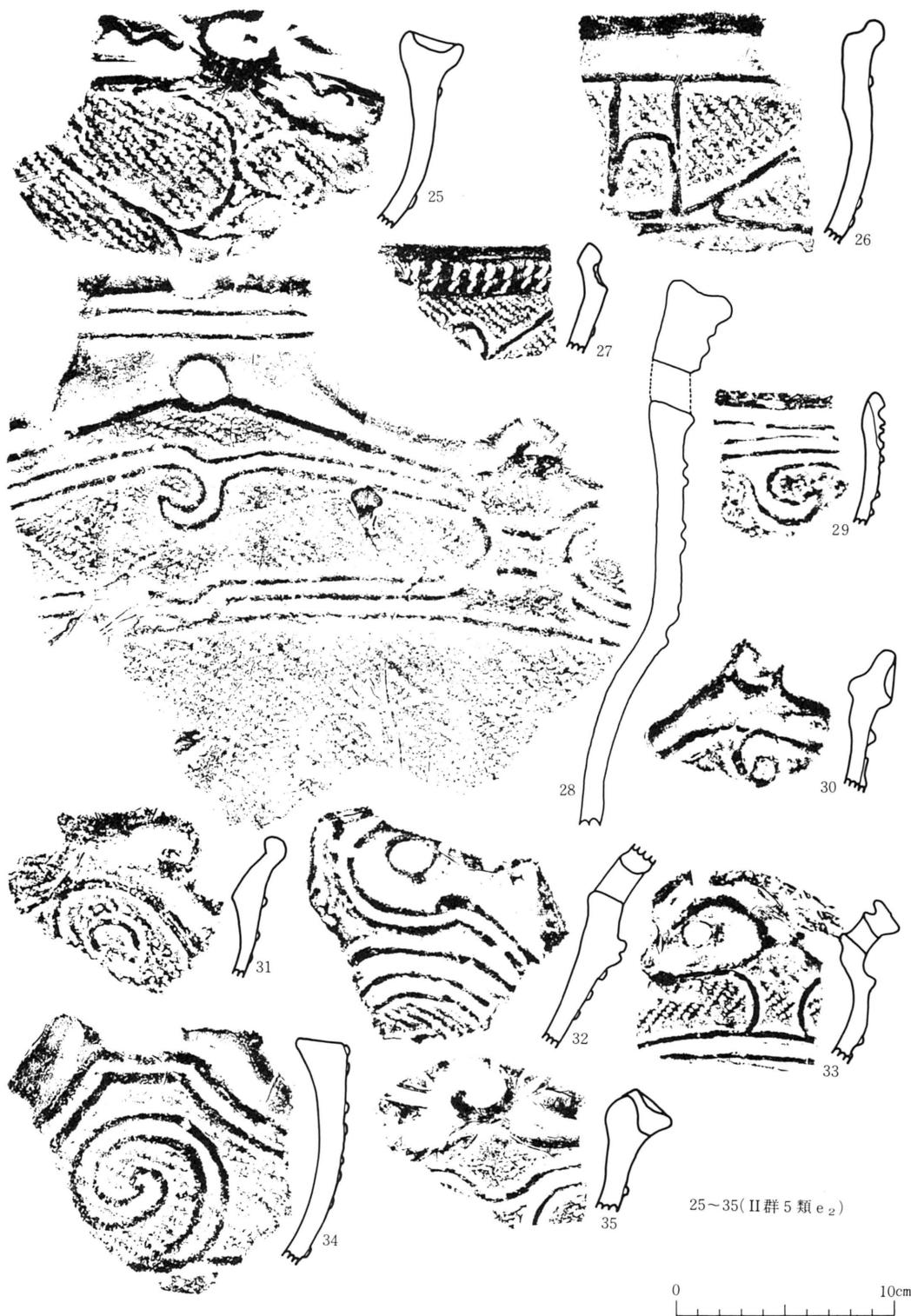
第56図 包含層出土土器実測図



8 ~ 23(II群5類e₁) 24(II群5類e₂)

0 10cm

第57図 包含層出土土器拓影図



第58図 包含層出土土器拓影図

6 類土器 (第59図～63図、図版13～図版14の98)

口縁部の外反する深鉢形のものを包括している。文様施文技法は、既述の各類に用いられているものだが、主に器形の相違で、各類から分離した。施文法から a～d の 4 つに細分された。

6 類 a (第59図1～2、第61図、図版13の84～86)

撚糸圧痕文を主に使用しているグループである。口縁部が外反する深鉢だが、外反の程度には強弱があり、胴部はやや脹らみをもつ。平縁で、横に張り出たこぶ状の突起をもつものがある。口縁部上端に隆帯をめぐらし、その隆帯の上に撚糸圧痕列、指頭圧痕を施したものと、隆帯の上に小波状の隆起線文を貼付しているものと 2 大別できる。隆帯から下部は地文のみのものや、撚糸圧痕文の曲線区画文を施したものがある。区画文のモチーフは、II群 5 類に類似する。胎土のしまりは良好なものが多く、色調は、暗褐色、にぶい褐色が主である。

第60図14 (図版13の86) は、口径27cm、器厚 9 mm の大型深鉢である。ほぼ直上形に近いが口縁上端が短かく外反している。口縁隆帯状に肥厚し、その上に縦の撚糸圧痕列を施している。沈線の横帯が添う。胎土やや不良で暗褐色、地文は単節斜縄文 L—R。 $\frac{1}{2}$ 残存、底部欠損。

第59図1 (図版13の84) は、口径24cm、器厚 8 mm の中型深鉢である。口縁は外反し、幅広の低い突起が 1 対付いている。口縁上端に小波状隆起線、文様は縦の撚糸圧痕列、連弧文があり、橋状の把手もつく。胎土やや不良、暗褐色、地文は単節斜縄文 R—L。 $\frac{1}{4}$ 残存、底部欠損。

第59図2 (図版13の85) は、口径18cm、器厚 8 mm の中型深鉢である。太い隆帯による波状文とほぼ隅丸方形の突起が貼付されたものである。撚糸圧痕文の弧状文なども施される。他のものに比べ特異な施文である。胎土は暗褐色でもろい。地文は撚りの細い単節斜縄文 L—R。

6 類 b (第59図3～4、第62図21～28、図版13の87～89)

沈線文を主に使用している、口縁外反の深鉢で、外反の程度が弱く、ほぼ円筒状に頸部から胴部、底部に到る形が多い。器厚 5～6 mm の小・中型が大部分。口縁部上端が隆帯状に肥厚しているものと、肥厚しないものがある。前者には、こぶ状か渦巻状の小突起のつくことが多く、又、小波状の隆起線の貼付や刺突列点など見られ、後者にはない。胴部には沈線文の直曲線、小波状、渦巻文、連弧文などが施され、文様の広がりは底部近くまで到るものがある。区画文様は II群 5 類に類似する。胎土はもろいものが多く、暗褐色やにぶい褐色が主調色である。地文は単節斜縄文で L—R : R—L = 2 : 1 の割合、複節斜縄文は 1 点。

第59図3 (図版13の87) は口径16.5cm、底径 9 cm、器高24.2cm、器厚 7 mm の中型深鉢である。口縁に 4 つの渦巻状の小突起があり、やや肥厚する。胴部は沈線による曲線区画文、渦巻文、小波状文等が施されている。胎土のしまりはやや不良で、上半暗褐色、下半はにぶい赤褐色を呈す。上半部表、裏とも煤が付着している。地文は単節斜縄文 R—L 縦回転。ほぼ完形土器。

第59図4 (図版13の88) は、口径12cm、器厚 6 mm の小型深鉢である。突起は大小 2 つあり、大

の方は、渦巻文と横S字文をくみあわせた。有孔の立体的なものである。胴部には、3本の平行沈線による区画文が施される。口縁上端の厚い隆帶上には刺突列点文がある。上半の表、裏に煤が付着している。胎土やや不良で暗褐色及び下半は赤褐色。地文はL—R底部を欠く。

6類c (第59図5~13、第62図29~46、第63図47~52、図版13の90~93、図版14の94~98)

隆起線文が主に使用されているものである。器形や施文法の相違が顕著なので、さらに c₁~c₄ に細分してみた。器形はいずれも口縁外反する深鉢である。

c₁ 口縁外反し、口縁上端が隆帶状に肥厚し、その上に小波状の隆起線の貼付をもつものである。隆帶の下は、地文のみのものと、隆起線や隆沈線の区画文、直線文が施されているものがある。口径40cmを超す大型もあるが、小・中型が大部分。貼付された隆起線の小波状文には、撚糸圧痕文が施されているものと、そうでないものがある。胎土はしまりやや不良が多く、にぶい褐色、明褐色が主調色である。

第59図5 (図版13の93) は、口径21.2cm、器厚7mmの中型の深鉢である。頸部から下には隆沈線文の区画文がめぐる。胎土のしまり良好で暗褐色、地文は単節斜縄文R—L、1/5残存する。

第59図8 (図版13の90) は、口径44cm、器厚9mmの超大形の深鉢である。施文法、胎土色調は図5に同じ、渦巻状の小突起がつき、隆帶の下は、ミガキ調整され無文帶がある。地文は単節斜縄文L—R縦方向回転。1/5残存し底部欠損している。

第59図12(図版13の91)は、口径18.6cm、底径約6.8cm、器高19cm、器厚6mmの中型深鉢である。隆帶の下は地文のみ。地文は単節斜縄文縦回転、胎土のしまり良好、暗褐色、内面下半に煤付着、4/5残存し底部欠損している。

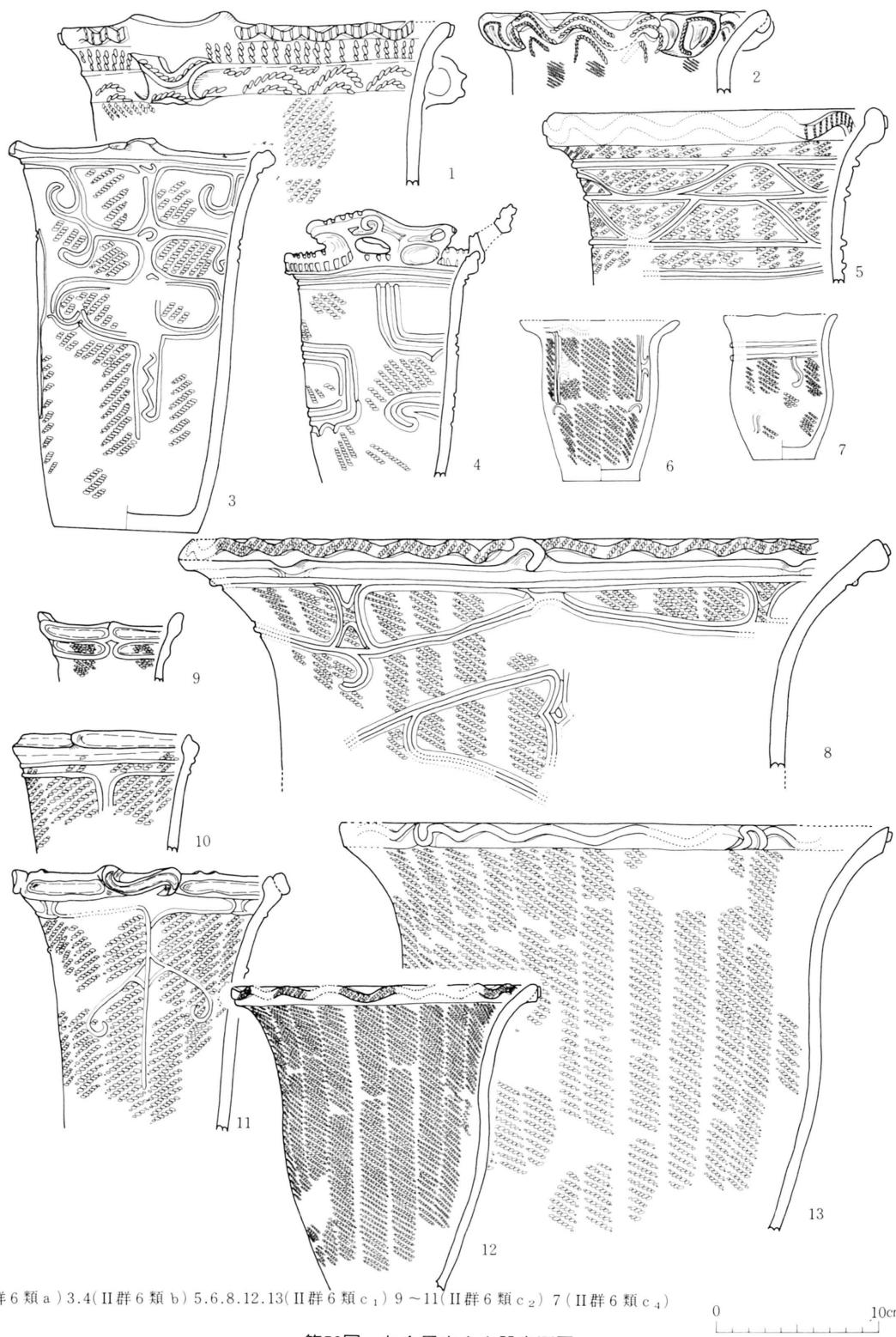
第59図13 (図版14の95) は、口径34cm、器厚7mmの大型深鉢である。波状隆起線には圧痕がなく、口縁4箇所に結び目をもつ。地文は単節斜縄文L—R。胎土やや良好。1/4残存、底部欠損。

第59図6 (図版13の92) は、口径10cm、底径4.8cm、器高9.8cm、器厚5mmの小型深鉢である。口縁の肥厚はない。隆沈線の懸垂文が施されている。地文は単節斜縄文L—R。1/3残存する。

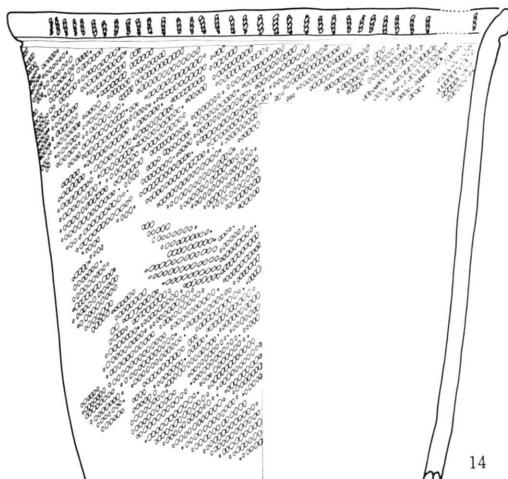
c₂ 口縁部は外反しつつ開くが、口縁上端が短く内湾する深鉢である。口縁上部には隆起線の横帶又は長楕円区画文をもち、そこには、刺突列点文やミガキ等が施され、頸部には細い隆起線の横帶や懸垂文などある。縦の撚糸圧痕列や小波状隆起線の貼付、横S字状や渦巻状の小突起が見られる。口唇部内側には、細い隆起線の貼付が見られる。胎土のしまりはやや不良であり、にぶい褐色、赤褐色を主とする。器厚5mm前後、口径15cm以下の小型のものが多い。地文は単節斜縄文が大部分、複節斜縄文は2点である。

第59図9 (図版14の97) は、口径9cm、器厚5mmの小深鉢である。長楕円区画文が2段になっている。胎土はややもろく暗褐色。地文は単節斜縄文L—R。口縁のみ残存する。

第59図10 (図版14の98) は、口径10.4cm、器厚6mmの小型深鉢である。頸部から下は細い隆起



第59図 包含層出土土器実測図



第60図 包含層出土土器実測図
14(II群6類a)

0 10cm

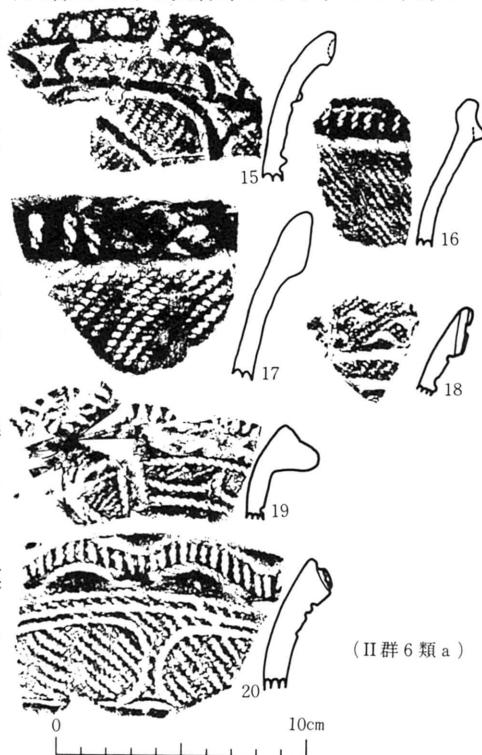
線の直線文が周る。胎土ややもろく黒褐色、地文は単節斜縄文R—L。 $\frac{1}{3}$ 残存、底部欠損。第59図11(図版14の94)は口径14.6cm、器厚7mmの小型深鉢である。口縁部上端には横S字状の突起、胴部には隆起線の区画懸垂文が施されている。胎土しまり良く、褐色である。地文は単節斜縄文R—L縦方向回転、 $\frac{2}{3}$ 残存し底部欠損している。

c₃ 口縁部外反の程度がゆるく直上形に近い深鉢である。口縁部隆帯状の肥厚はなく、隆起線の直線文や区画文が口頸部をまわるものである。細めの小波状隆起線文の貼付、隆

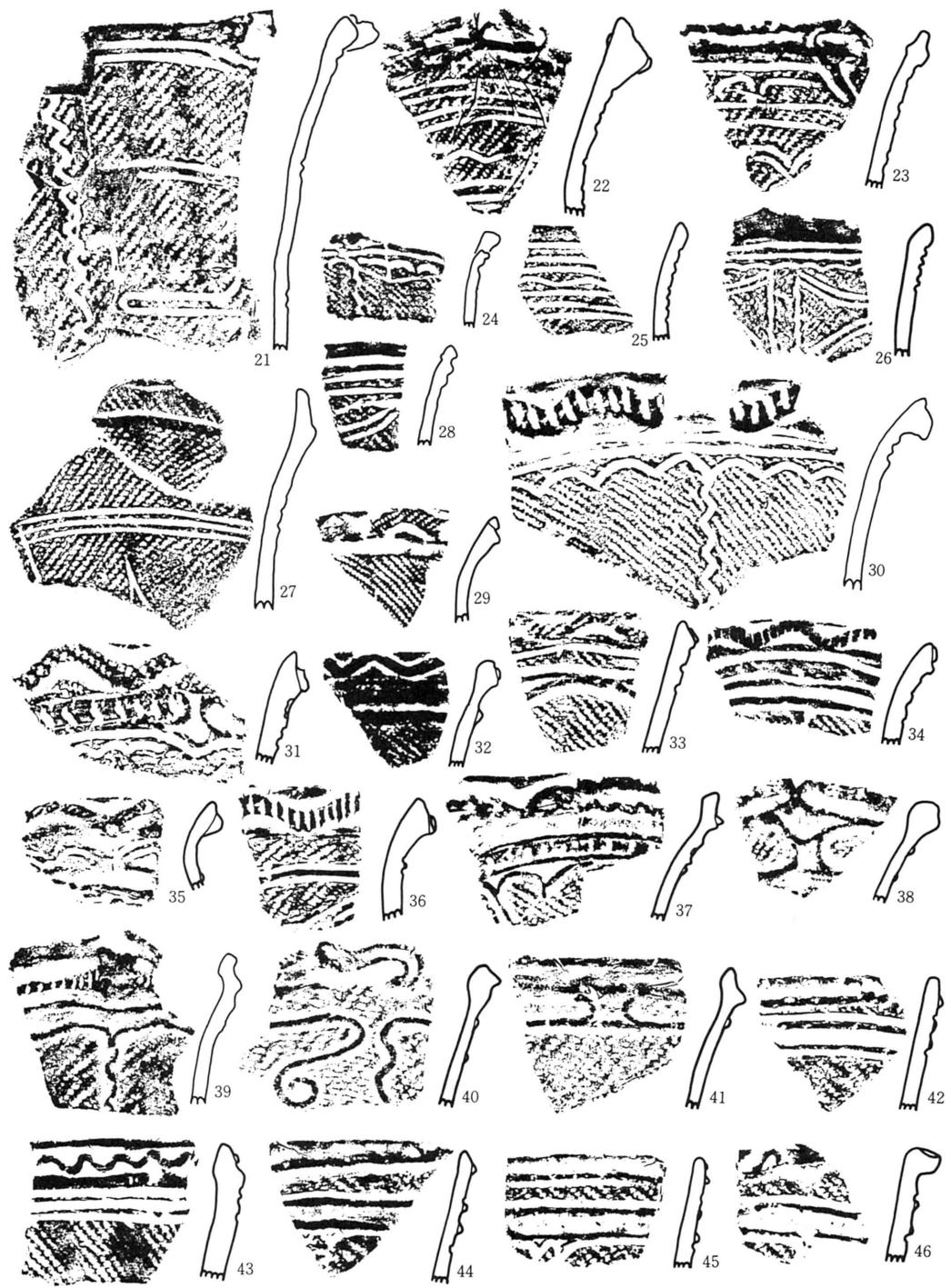
沈線文など施される。平縁が主で、ときに小さなこぶ状の突起がつく。器厚5mm前後の小型が多く、胎土のしまりは良好でにぶい褐色が主。第62図44や46は、c₃の模範的な特徴を有している。

c₄ 口縁部外反する深鉢で、隆起線や隆帯が主でc₁～c₃に含まれないものを一括してある。口縁上端部は、隆帯又は、平行隆起線による。細長く口縁をめぐる文様帶があり、その下部の無文帶をはさんで、胴部上半には平行沈線や細い隆帯が施されるものがある。渦巻状や山形の突起をもち、ゆるやかな大波状口縁になっている。刺突列点文や溝状沈線による渦巻文が特徴的である。器厚5～6mmの小、中型のものが主。胎土は緻密であるが、もろくなっているものが多く、暗褐色、黄褐色を呈す。地文は単節斜縄文で、L—RとR—Lは半々の割合である。

第59図7(図版14の96)は、口径7mm底径3.8cm、器高8.9cmの超小型深鉢である。口縁部は無文、頸部に隆起線をもつ。口縁部は大きく波打たないらしい。胎土はもろく、褐色部分と黒色部分がある。c₄の模範的なものとは言えないが、このグループに入れた。第63図55や57などは、c₄の、より新しいものであろう。



第61図 包含層出土土器拓影図
(II群6類a)



21~28(II群6類b) 29~36(II群6類c₁) 37~41(II群6類c₂) 42~46(II群6類c₃)

0 10cm

第62図 包含層出土土器拓影図



第63図 包含層出土土器拓影図

7類土器 (第64図~65図、図版14の99~104)

口縁部が「く」の字状に強く内湾した浅鉢形のものである。器厚6mm前後、口径25cm内外の中型が多い。屈曲部は隆帯の貼付、及びミガキ調整によって肥厚し、外に張り出す。屈曲部より上には隆起線による長楕円区画文や渦巻状の突起がくりかえしめぐる文様帯がある。渦巻状の突起が4、その間にこぶ状に張り出す突起部分4の組み合せが一般的で、まれに突起4つのみのものもある。文様帯の内部は、ミガキのみの無文、撲糸圧痕文、刺突列、沈線文など施されるが、最も多いのは撲糸圧痕文が、長楕円区画文にそっているものである。屈曲部の下、胴部には、撲糸圧痕文、沈線文や隆起線文様による曲線文、懸垂文が施されたものと、地文のみあるいは無文とがある。胎土大旨良好で、色調は、バラエティーに富む。地文は単節斜繩文L-Rが大部分、回転方向は、縦が多い。

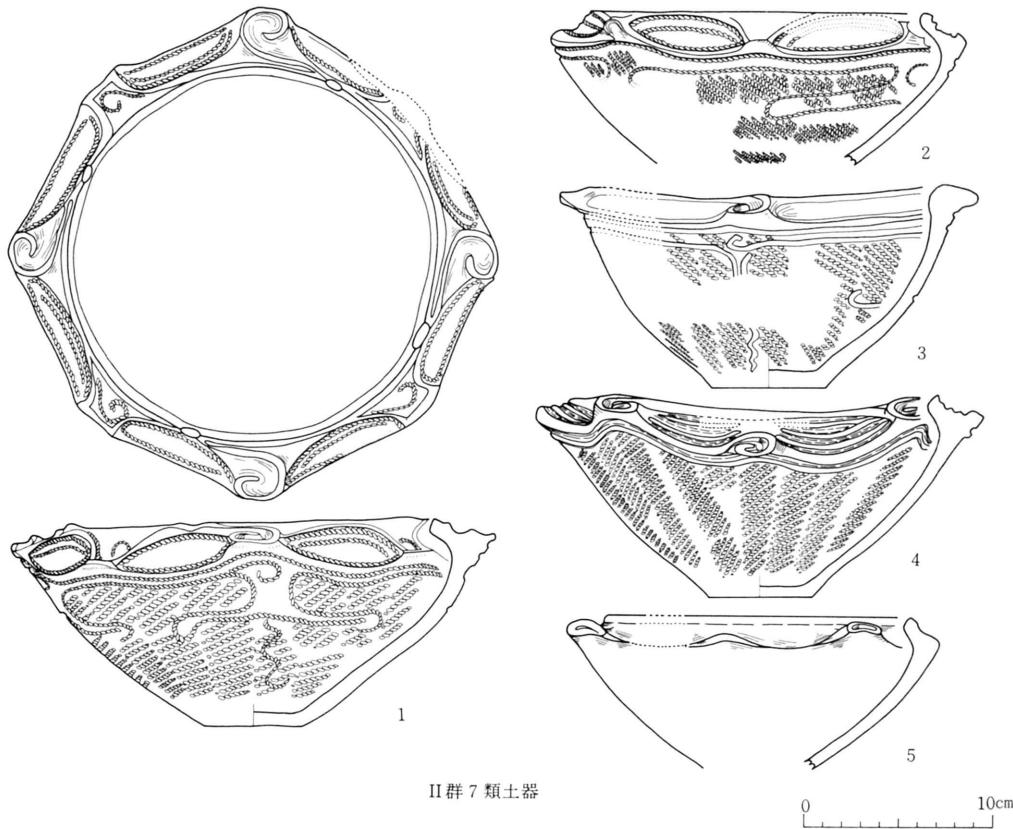
第64図1（図版14の101）は、口径26cm、底径5cm、器高11cm、器厚8mmの中型の浅鉢である。撲糸圧痕文の曲線文、懸垂文が多用されている。胎土やや不良で赤褐色を呈す。ほぼ完形品。

第64図2（図版14の100）は、口径約18cm、器厚6mmの中型浅鉢である。文様モチーフは、図1の土器と類似。胎土のしまり良好で暗褐色、地文は単節斜縄文R—L。 $\frac{1}{3}$ 残存、底部欠損。

第64図3（図版14の99）は、口径20.4cm、底径6cm、器高10.8cmの中型浅鉢である。内湾屈曲の程度が弱い。胴部は沈線の曲線文、懸垂文、胎土はやや不良で褐色、地文はL—R、 $\frac{1}{3}$ 残存。

第64図4（図版14の104）は、口径19cm、底径5.6cm、器高10.8cm、器厚6mmの中型浅鉢である。長楕円区画がより調整され、隆沈線文が添っている。突起はどれも渦状となる。胎土は密で、褐色を呈す。地文は、単節斜縄文R—L縦方向回転、 $\frac{1}{2}$ 残存している。

第64図5（図版14の103）は、口径16.4cm、器厚7mmの中型浅鉢である。全面ミガキ調整され無文である。突起の立ちあがりは滑らかである。胎土しまり良く暗褐色を呈す。 $\frac{1}{2}$ 残存、底部欠。



第64図 包含層出土土器実測図



第65図 包含層出土土器拓影図

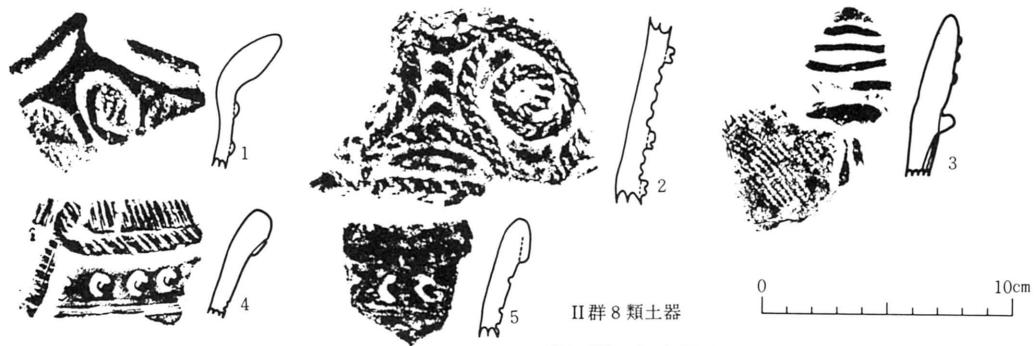
II群 7類土器

8類土器（第66図 図版14の105～109）

縄文中期に比定されるが出土数の少ない、特徴的なものを一括してこの類とした。

a 中期後半の大木9式のものである。1点のみ。黒褐色で摩滅が著しい。器形は口縁大波状を呈す深鉢であろう。口縁上端は、幅広の沈線帶、その下に渦巻文の退化したもの、長楕円文などを配する。（第66図1）大木9式の古い方と見られる。

b 中期の円筒上層式に層するもので出土数は8点。太い隆起線の曲線文、区画文とそれに伴う爪形（馬蹄形）の撚糸圧痕文をもつ円筒上層b式のもの（第66図2、4、5）と、退化した突起、細い粘土紐の貼付が特徴的な円筒上層e式（最花式）のものである（第66図3）



第66図 包含層出土土器拓影図

9 類土器 (第67図、図版14の110~112)

器形がII群土器のものに共通する特徴をもつ地文のみや、無文の土器類である。地文のみは

a 無文はbとし、器形により細分した。地文は単節斜縞文L—Rが大部分を占める。

a₁ 口縁内湾のキャリパー形深鉢である。内湾の程度は差異があり、口縁外傾形に近いものも含めた。平縁が一般的で、小突起が数点観察された。23点出土。

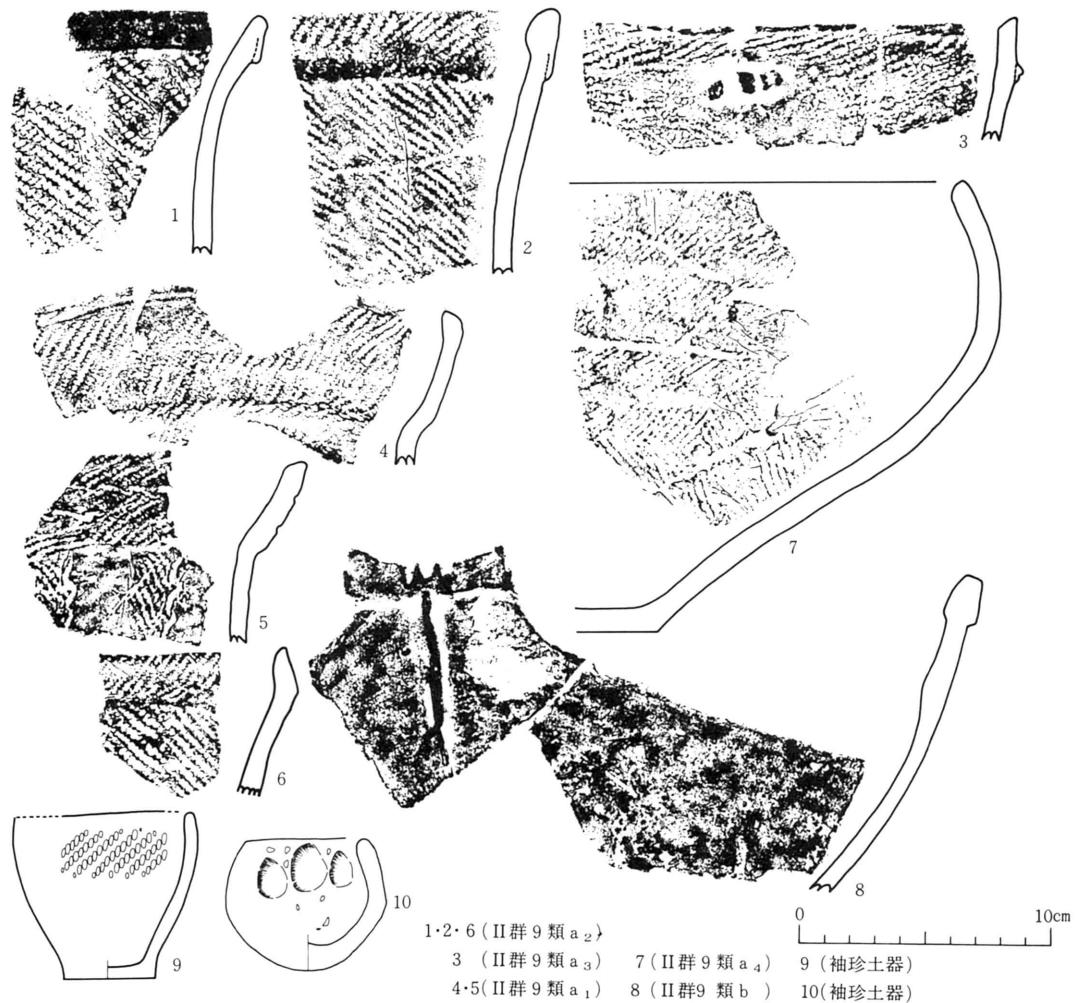
a₂ 口縁外反の深鉢である。口縁部折り返し口縁様に肥厚したものや、口縁部上端を磨いて無文にしたもの、山形の突起をもち大波状口縁をなすものなど含まれている。24点出土。

a₃ 口縁直上の深鉢である。口唇部わずかに肥厚し、丸みをもつものが多い。出土数29点。

a₄ 口縁内湾ぎみに立ちあがる浅鉢である。出土数7点。

a₅ 口縁内湾するが、深鉢か浅鉢か判別できないものである。出土数175点。

b 無文のもので、いずれも口縁内湾する深鉢、浅鉢を含む。出土数20点。



第67図 包含層出土土器拓影図

2. 土製品（第68図、図版15）

(1) 土偶（図1～10）胴部中央で折損しており、上半身に当る部分のものは図3、6～9、下半身が図1、2、4、5、10である。施文に沈線を用いるもの5点、撲糸圧痕文を用いるもの3点、単節の斜縞文を用いるもの4点、無文地にミガキをもつもの3点、頭部残存するもの2点見られる。共通する特徴は、腕は真横に短く突出し、胴部にくびれ、下腹部は張り出す。足は簡略化されているものが多いらしい。両乳房下の穿孔があり乳房及び臍は小さく貼付して表現される。胎土に砂粒を含む。焼成や色調は一様でない。図1、2は下端部に2つ足先状の突出部がついていたらしく、図1に片方だけ残っている。図3は無文地にミガキ調整を入念に施し全面光沢を持つ。抽象化された頭部には縦貫する孔が4、頸部下に首飾り又は襟風の隆起線の貼付をしている。胸部から胴部、背中の中央に縦に走る溝がある。残高10cm、横幅11cm、暗褐色。図4、5は土偶の脚部かと思われる。図6は無文地に平行沈線を施し青褐色焼成やや不良のもので頭部及び左胸のみ残存。図7、8、10は頭部と脚部欠損で胴部のみ、腹部に穿孔が2つある。図2、8は胴部中央の背腹両面に溝がひかれ、図10は背面に溝、腹面に棒状の貼付がそれぞれ施されている。図9は腕及び胸部の片方で、胸にはやはり2つの穿孔があつたらしい。図示以外3点、計13点の出土。いずれも遺構に伴ったものではなく包含層中からである。

(2) 土版（図11）隅丸の菱形であったと推定できる。推定長は縦14cm、横10.5cm程、中心部の厚さ2cm、縁辺部は丸みを持つがほぼ平坦である。両面とも太い沈線文様で、片面は縁に添う平行沈線の区画文、もう一方の面は縁どる線の内側に大きな渦巻文が描かれている。胎土には砂粒、金雲母を含み焼成は良好で、褐色と暗褐色部分がある。図示以外1点。計2点出土。

(3) スタンプ状土製品（図13、15）つまみ状に突出した部分と丸く平坦な部分を持つ、末広がりの円錐形を成しているものである。底の平坦面は、丸く凹みがつけられる。高さは4.5cm、底面径は3.5cm程である。ミガキが施され焼成良好、暗褐色を呈している。2点出土。

(4) 耳飾り、耳栓状土製品（図12、14）鼓状に両端がくびれて開くものと、片方だけ開くものの（図12）とがある。ほとんどは胴部に穿孔が見られるが図12には孔がない。開いた円形部分の径は3.4cm～4.2cmで、高さは2～3cm前後のものである。胎土は砂粒を含み焼成不良が多い。図示以外2点、計4点出土。

(5) 土製円盤（図16）径3.9cm、厚さ7mmの円形、縁辺は凹凸がある。地文単節斜縞文R—Lの土器の一部を使用している。胎土に細砂含み、焼成良好、灰黄褐色を呈している。1点のみ出土。

(6) 管状土製品（図17）形状は土錐に類似している。3本の平行沈線を巻くように施している。残存長8cm、径1.6cm、穿孔の径は0.9cmで、胎土に細砂含み、焼成良好灰褐色を呈す。1点のみ出土。



1~10(土偶) 11(土版) 12·14(耳栓、耳飾り?) 13·15(スタンプ状) 16(土製円盤) 17(管状土製品)

第68図 包含層出土土製品実測図

0 10cm

3 石器

(1) 石鎌 (第69図、図版16)

無柄のもの 2 点、有柄のもの 1 点である。1 は二等辺三角形をなし、両側縁、基部が直線的である。周縁は両面から規則的に押圧剝離され、背腹両面には一次剝離面を残す。2 も細長い三角形を呈す。尖頭部のみ刃部加工された粗雑なもので、両面には大きな一次剝離面を残している。基部は全く調整されていない。3 は有柄のもので、側縁が僅かにふくらむ二等辺三角形で基部は Y 字状に取りつく。周縁は両面から押圧剝離されている。基部と先端部が破損している。石材は珪質泥岩 2 、硬質泥岩 1 である。

(2) 石錐様石器 (第69図、図版16)

pick 状の尖頭部を有するものであるが、つまみが異常に大きいことから石錐様石器とした。4 は打撃点の反対側に pick 状の短い錐部をもつもので、錐部は片面からのみ加擊加工されている。四周は方形に調整されており、石籠状石器等の破損品を二次使用したものと見られる。5 は比較的幅広の錐部を有するもので先端部のみ二次加工されている。6 は自然面を残す横長・剝片を利用したもので、側縁の下半から先端にかけて両面加工されている。錐部は鋭く尖り短い。石材はいずれも泥質凝灰岩である。

(3) 石匙 (第69~71図、図版16)

つまみを有するもの、あるいはかつてつまみがあったと考えられるものを石匙とした。破損品を含めて38点である。形態にはいわゆる縦形と横形があり、前者が29点で約 76% を占める。

なお23、25の如く置き方によっては横形と見られるものもあるが、つまみ方向と側縁方向の一致するものについては縦形に含めた。

つまみは30、39の 2 点を除いて打瘤部にあり、大きく粗雑なものと、小さく入念に仕上げられたものとがある。その比率は 5 : 26 で後者が圧倒的に多い。つまみの粗雑なものは、刃部加工もそれほど精緻でない。加工順序は①刃部調整の前に形成されたものと、②刃部調整の後に形成されたものとがあり、①には刃部の再調整されたものが含まれている。また片面を同時に形成するものと、右側縁あるいは左側縁を先行させるものとがあり、15 : 13 と相半ばしている。

縁辺は縦形、横形とも直線的なものと、曲線的なものの両者があり、縦形には片側のみ彎曲するものが 2 例含まれている(20、28)。曲直の違いは程度差であり、必ずしも明瞭に識別できるものではなく、総体的な目やすにすぎない。縦形の先端部には二次加工したもの(18例)と自然面あるいは調整打面をそのまま残すもの(7例)とがあり、前者では鋭く尖るもの(12例)と丸味をもつ平なもの(6例)とが見られる。

全体的な形状では左右対称形をなすものと、非対称形なものとがあり、各々 16 点で同数存在する。基本的には縦形が 2 側辺からなる縦長で、横形が基部近くの 2 斜辺と対辺からなる三角

形である。以上のことまとめると、縦形が 4 類、横形が 2 類に分けられる。

A-1 類 左右対称形に近いもので、先端部が尖るもの (6 点)。(7~12)

A-2 類 左右対称形に近いもので、先端部が平になっているもの。6 点 (13~18)。

A-3 類 非対称的なもので、先端部が尖るもの。7 点。(19~25)

A-4 類 非対称的なもので、先端部が平に近いもの。6 点 (26~31)

1、2 類が左右対称形をなすもので、3、4 類は側縁の一方が張り出すか、側縁が彎曲するものである。後者には前述の如く置き方によっては縦形と見られるものを含んでいる。30は一方の側縁に角を有している。1、3 類は先端部が尖るもので 9、10、21、22、24 が特に鋭く尖っている。しかも 21 は極めて細長い。2、4 類の先端部は丸味をもつて平に近いもので、14~16、18、26、28 が調整剝離されている。

B-1 類 左右対称形に近いもの。4 点。(36~39)

B-2 類 非対称形をなすもの。3 点 (40~42)

1 類はつまみがほぼ中央にあって左右対称形をなすもので、2 類はつまみが一方に片寄るものである。以上の他には縦形とみられる破損品が 4 点、横形と見られるものが 2 点存在する。

なお、14 は側縁が短く横形的であり、38 は先端部が尖りぎみの逆三角形をなし縦形的様相を呈している。

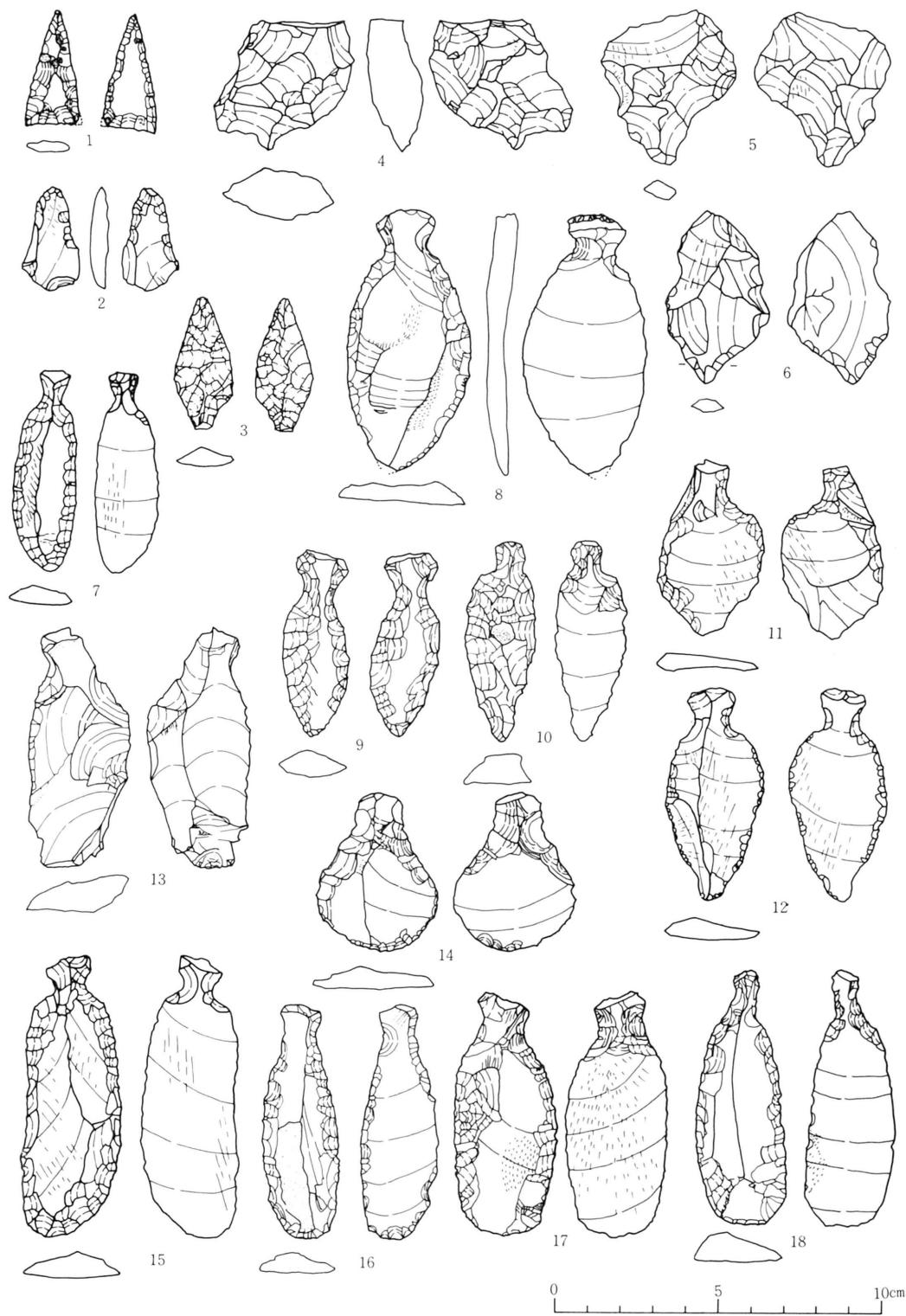
刃部には使用痕が観察されることから、二次加工されないものも含めた。また、つまみ加工と刃部形成との識別は判然としないが、押圧剝離的なものを刃部形成とした。縦形における刃部は基本的には左右両側縁にあり、中には先端部に及ぶものがある (7 例)。横形では主に対辺である。しかし、中にはつまみ加工の延長部を利用するものもある (37)。

加工方法は主に背面から押圧剝離によって形成される片面加工であるが、腹面から加工される逆のものも見られる (1 例)。また、両面加工されるものが 21 例認められ、このうち両刃的なものは 12 例である。これらのほとんどは刃部加工に時間差を有するもので、背腹両面が同時に形成されたと見られるものは薄い素材の 3 例にすぎない。加工範囲には側縁全体に及ぶものと、一部分に限られるものとがあり、刃部加工には単独一回のものと、二次、三次と再調整されるものとがある。概して薄手の剝片を利用したのに単独のものが多く、厚い素材のものには数回あるいは数十回と調整されるものが多い傾向にある。

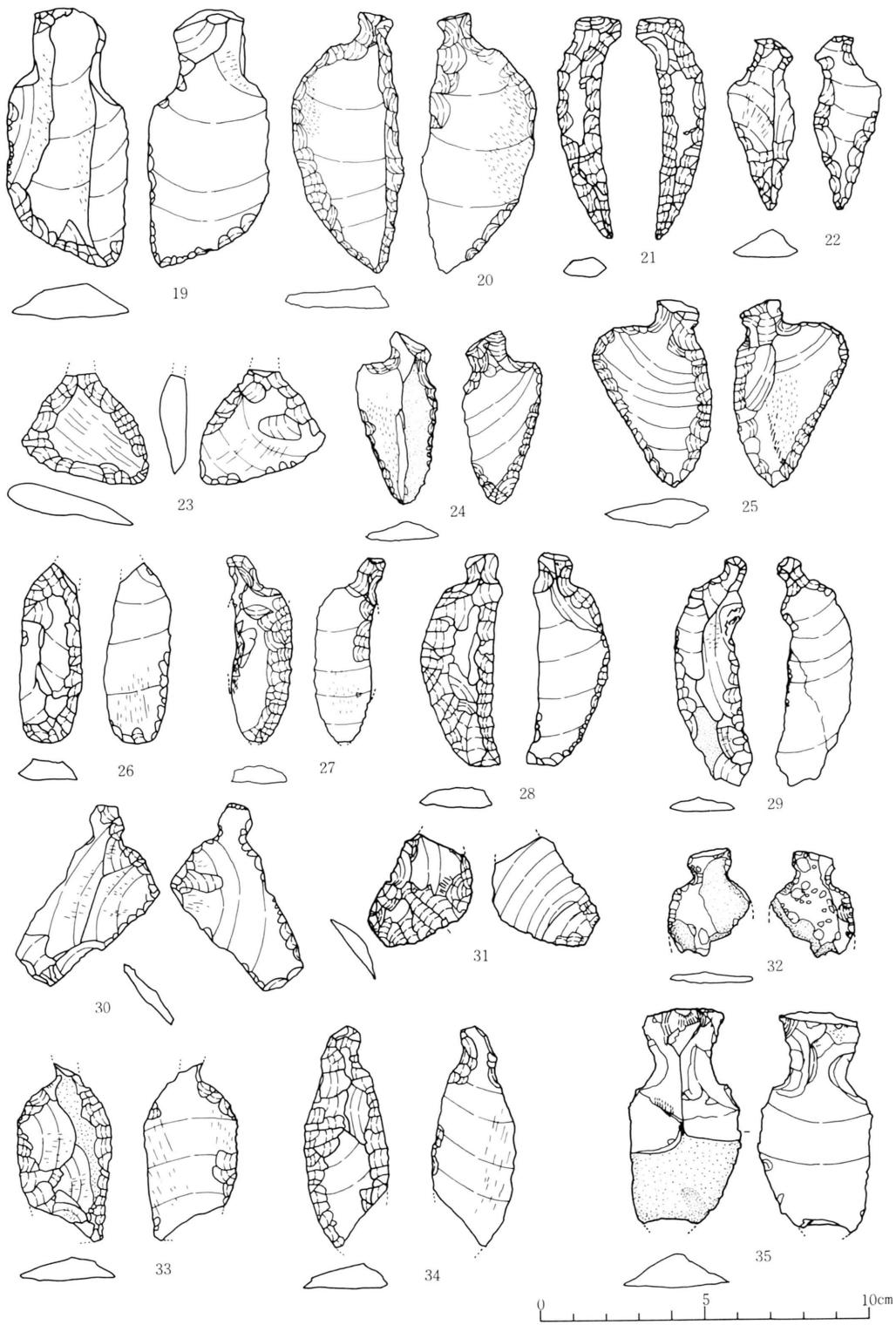
刃部形態には、①細かい二次加工のもの (例えば 12)。^{註(1)} ②粗い二次加工のもの (例えば 39)。^{註(2)} ③オーリニヤック的な二次加工のもの (例えば 34) の 3 形態が認められ、全く加工の施されないもの (例えば 36) を含めると 4 形態となる。

①は剝離の単位が小さく、長さも短いもので、②はそれよりやや大きいものである。③は粗い剝離の後に小さな剝離が施されるもので、前 2 者より複雑なものである。そのあり方は個体

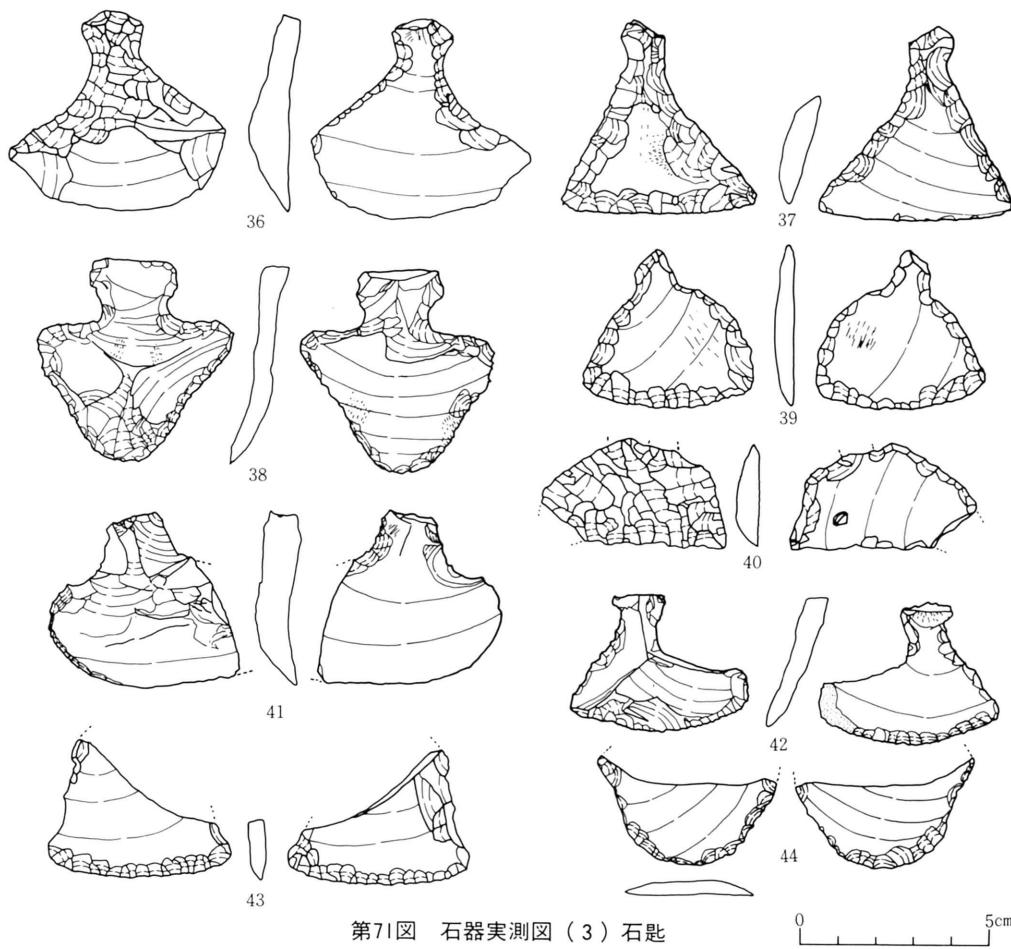
第 VII 地 区



第69図 石器実測図 (1) 1～3 石鎌 4～6 石錐様石器
7～44石匙



第70図 石器実測図(2) 石匙



第71図 石器実測図 (3) 石匙

ごと、各辺ごとに分けられるが、中には同一の辺に異なる形態が混在する場合がある。これには摩耗痕に強弱の違いが認められ、加工に時間差を有することを物語るものが含まれている。

刃部の角度は 33° ～ 70° で、片面加工、両面加工ともほとんど一致しており差異は認められない。刃部形態では①より②、②より③が鈍くなり、また素材の厚いものほど鈍角になる傾向がある。全く刃部加工の施されない35、36は 36° ～ 60° であり、前述の範囲内に含まれている。

使用痕は破碎痕と摩耗痕について観察を行った。破碎痕とは刃部先端の長さ、幅とも1 mm以内の極めて微細な剥離痕で、一般に見られる剥離痕とは異なるものである。摩耗痕とは主に刃部形成の調整剥離における稜線が摩滅しているもので、中には剥離以外でなめらかになっているものもあるが、数は少ない(1例)。

破碎痕は36を除いて刃部加工に限られ、その位置は縦形ではa、bが7例、dが1例、eが2例で、表面の両側縁に多く認められ、横形ではaが2例、eが3例で表面対辺の占める割合が多くなっている。刃部の形態別では①が7例、②が4例、③が10例で複雑なものがやや多い。
註(3)

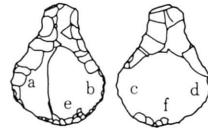
摩耗痕の観察されるものは a が 8 点、 b が 10 点、 c が 5 点、 d が 7 点、 e が 5 点、 f が 1 点の合計 19 点で、縦形では側縁に見られるものが 26 点で、先端部に及ぶものは 1 点のみである。横形では対辺が 4 点で圧倒的に多い。刃部の形態別では①が 13 点、②が 11 点、③が 11 点でほぼ同数存在する。なお、破碎痕と摩耗痕の両者が認められるものは 7 例である。

破損しているものは 15 点（実数は 13 点）で、つまみ 4 点、体部 10 点、先端部 1 点である。いずれの場合も背面または腹面からの加圧による折損で内訛は、前者が 8 点、後者が 5 点である。ただし、44 は刃部方向からの加圧によるものであり、32 は剥落によって破損したものである。

石材は珪質泥岩（15 点）、硬質泥岩（3 点）、凝灰質硬質泥岩（3 点）、石質凝灰岩（6 点）、泥質凝灰岩（5 点）、鉄質石英（3 点）、石英、松樹石、黒耀石（各 1 点）であり、比較的硬質なものを選択使用している。泥岩類が 55.3%、凝灰岩類が 28.9% で、両類で 84.2% を占める。

素材は当然のことではあるが、縦形が縦長剝片、横形が横長剝片を多用している。自然面を残しているものは 6 点で、全体の 15.8% である。

- 註(1) 型式と分類 藤本強 日本の旧石器文化 5 第 22 図参照、1976、雄山閣出版 KK
 (2) サケット、モヴィウスの属性をもとに製作したものである。
 (3) 刃部加工の位置は右図による。



(4) 石籠状石器（第 72～75 図、図版 17、18）

長方形に近いもので一端に刃部を形成したものを石籠状石器とした。なお、先端が尖り石錐に類似するものもあるが、大きいものをこれに含めた。破損しているものを含めて 47 点で、細身で棒状に近いもの（11 点）と単冊形に近いもの（15 点）とがある。

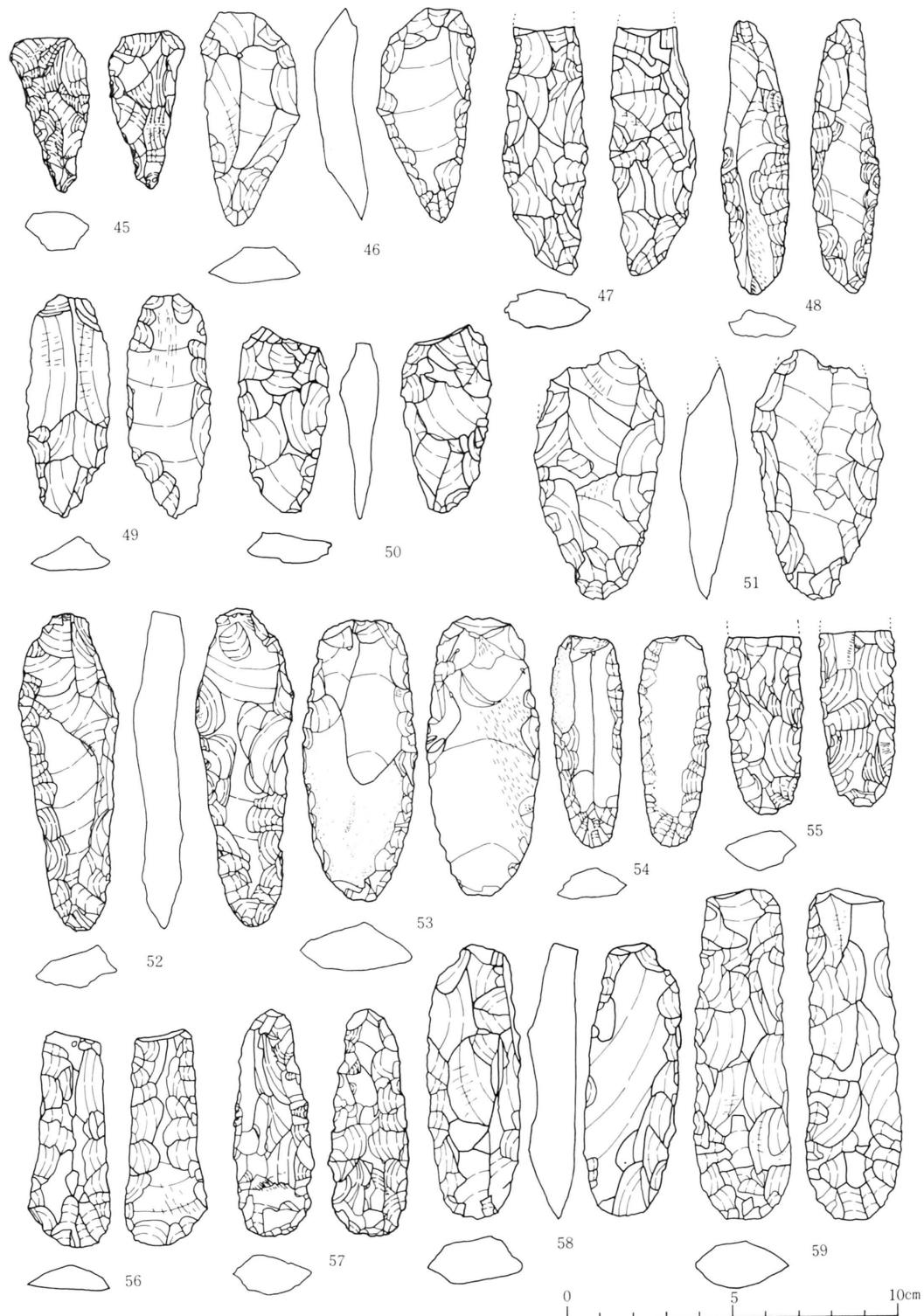
基部には①急激に幅狭くなるもの（14 点）、②徐々に狭くなるもの（18 点）、③徐々に広くなるもの（3 点）があり、その厚さでは①急激に薄くなるもの（14 点）、②面をなすもの（16 点）、③丸味をもつものの（5 点）がある。①には特に鋭く尖るものが 11 点含まれ、②では自然面を残すものが 8 点、調整打面をもつものが 8 点で、①、③はいずれも二次調整されている。

側縁は幾分彎曲するものもあるが、ほとんどは直線的である。その加工は打撃剝離によるもので、背面加工、腹面加工の両者が見られる。横断面形は三角形、菱形、台形あるいは蒲鉾形など種々あるが、背面が平坦を基調とするものが 30 例で、63.8% を占める。

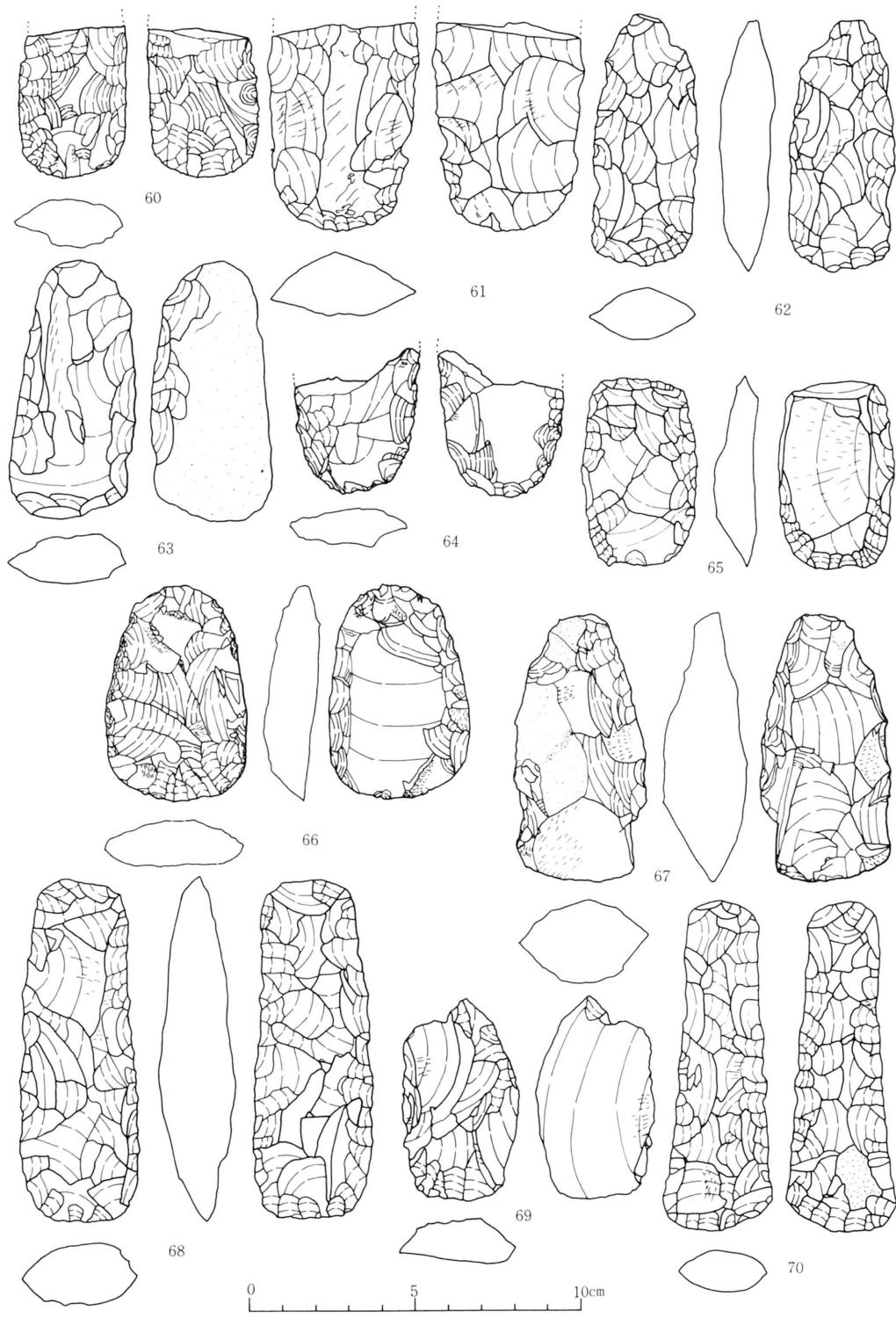
先端部はいずれも薄くなるもので、①尖るもの（11 点）、②彎曲するもの（9 点）、③直線的なもの（13 点）に分けられる。①には著しく尖るものが 4 点、丸味をもつものが 7 点あり、③には隅の丸くなるもの 5 点、斜めになっているもの 4 点を含む。

刃部はいずれも一端にあり、一部側縁に及ぶものを含む。加工法は最後に背面から押圧剝離されるもので、大きく剝離された後に再加工されたものがある（10 例）。中には両面加工（刃部として両面から加工されているもの）のものもある（6 点）。刃部角は 50～86° で、60～80° のも

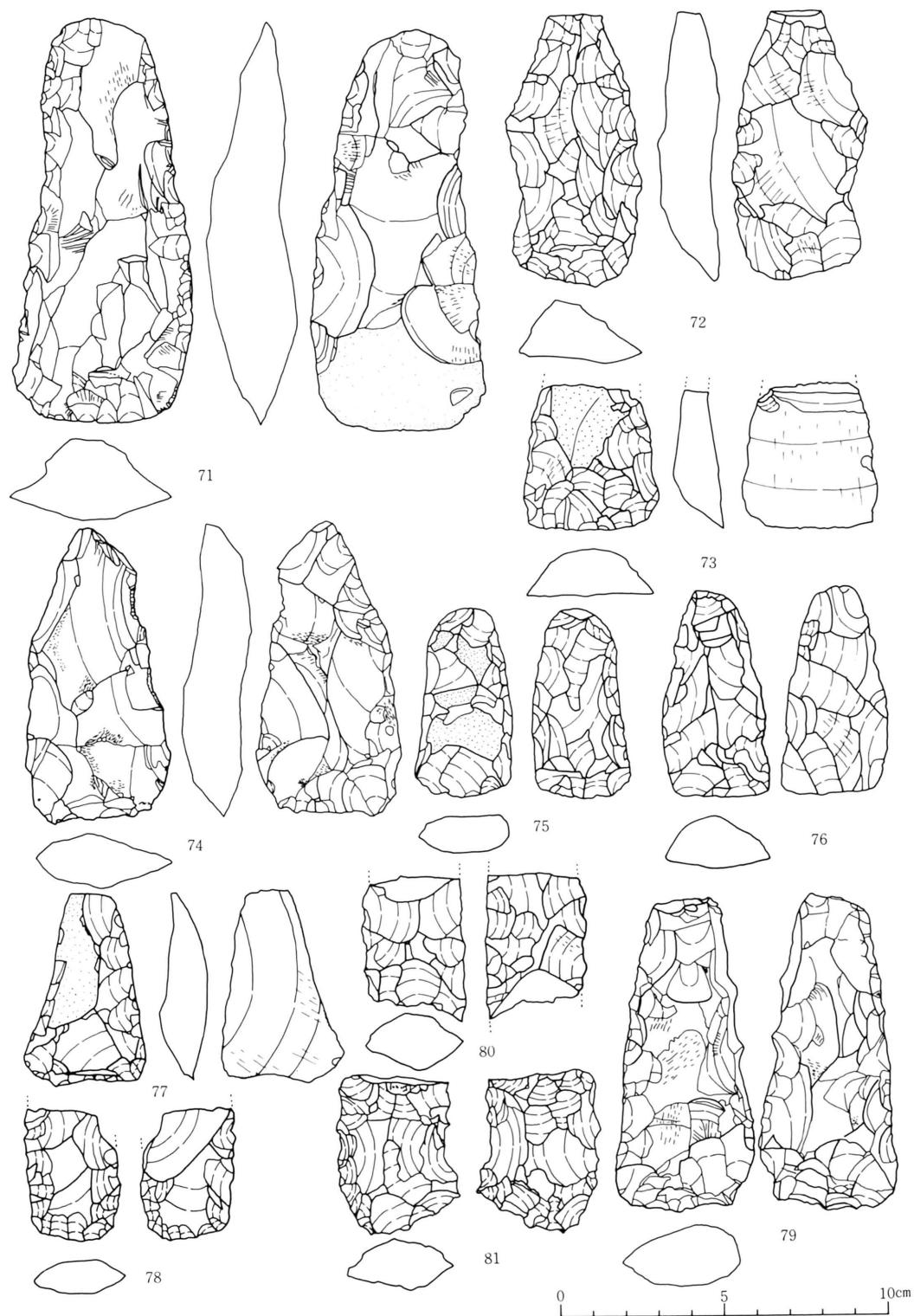
第 VII 地 区



第72図 石器実測図 (4) 石箆状石器

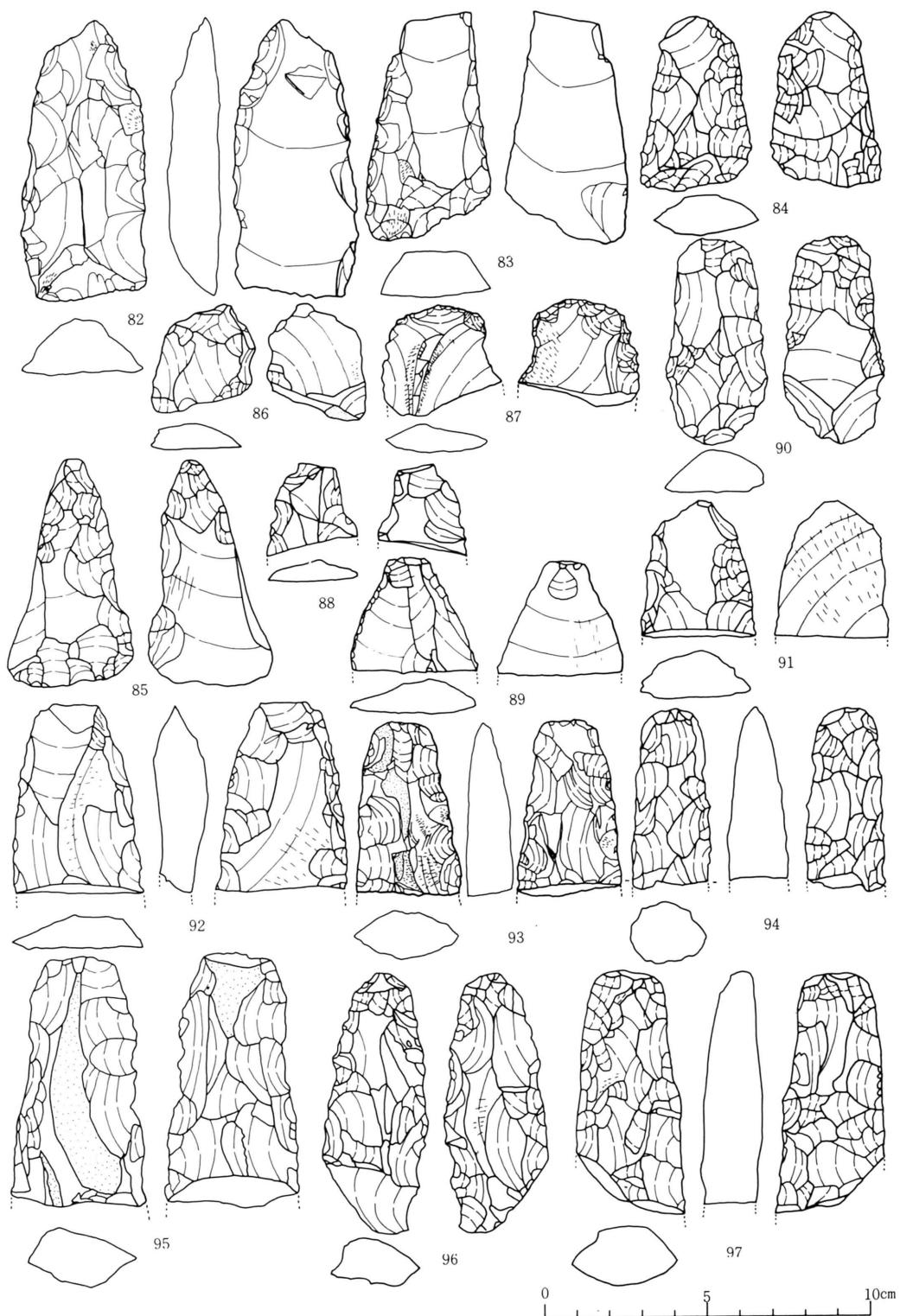


第73図 石器実測図 (5) 石籠状石器



第74図 石器実測図 (6) 石斧状石器

第 VII 地区



第75図 石器実測図（7）石籠状石器

のが多く石匙より鈍角である。刃部形態は長い押圧剝離による粗雑な二次加工である。

使用痕は破碎痕、剝離痕、摩耗痕について観察した。破碎痕は長さ、幅とともに1mm以内の微細な剝離痕で、その位置は先端部が7点（3点は1部分）、先端から側縁が7点（2点は全面）、側縁が2点である。剝離痕は刃部破損を示すと見られるもので、いずれも先端部である（7例）。摩耗痕は稜線が摩滅しているもので、11例（ただし4例は光沢を有す）見られる。

破損品は21点で全体の45%を占める。背面あるいは腹面からの加圧で破損したものが18例で、側縁方向の加圧によるものが5例である。81、90の2例は刃部破損の大きいものと見られる。

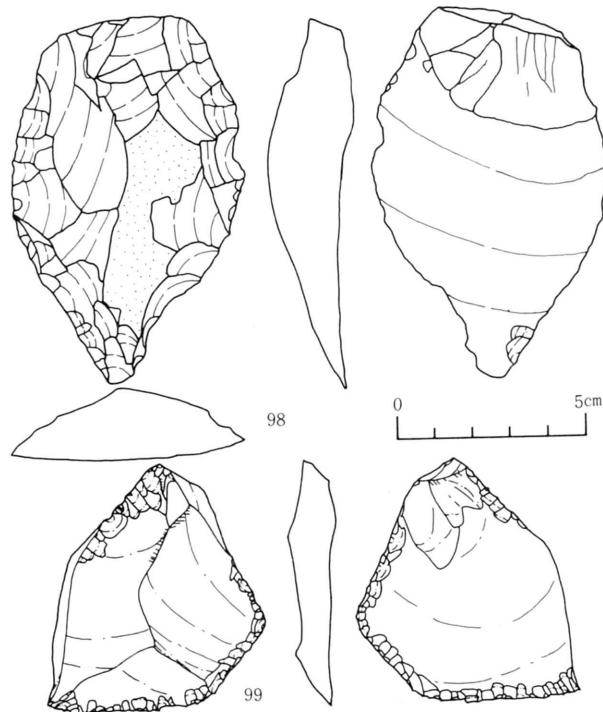
石材は珪質泥岩（10点）、硬質泥岩（10点）、凝灰質硬質泥岩（6点）、珪質凝灰質泥岩（1点）、石質凝灰岩（10点）、珪質石質凝灰岩（5点）、泥質凝灰岩（9点）、粘板岩（2点）である。泥岩類が50.9%、凝灰岩類が45.3%を占め、両類がほとんどである。

素材は大多数のものが縦長剝片を用い、9点が打瘤を基部としている。中には側縁に打瘤部を有するものがあり、横長剝片を縦に利用するものも認められる（65、69、77）。これらのうち自然面を残すものは24点（45.3%）で、このうち、基部に有するものが12点である。

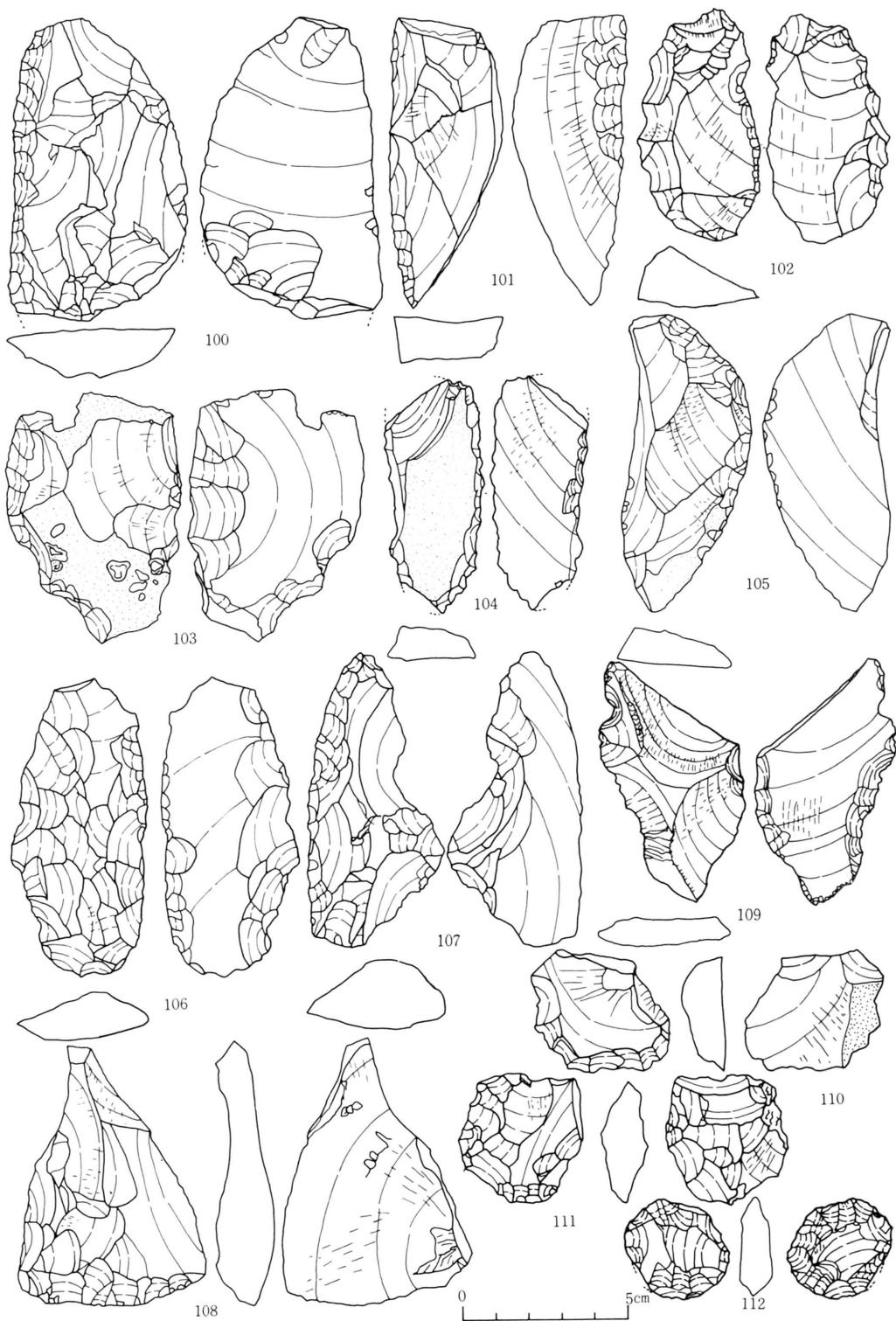
（5） 搗器類（第76～79図、図版18、19）

この中にはいわゆる摗器的なもの、削器的なもののほかに、使用痕を有する剝片、粗雑な摗器とみられる摗器様打製石器をも含めることにした。摗器と削器は識別困難であるが、素材が肉厚的で、刃部角の比較的鈍角なものと摗器とした。摗器的なものは破損品を含めて15点である。全体的な形状は方形（100、103）、あるいは円形（112）、その他分類困難な不定形を呈している。なお、106は石籠状石器に酷似しているが、先端部加工が認められないものである。

刃部は①打撃点の反対側、対辺にあるもの（3点）、②打撃点に隣接する側縁にあるもの（5点）とがある。直線的なものと彎曲するものがあり、104、110は鋸歯状を呈し、98は一端が突出している。刃部加工は106、112を除いて背面から押圧剝離

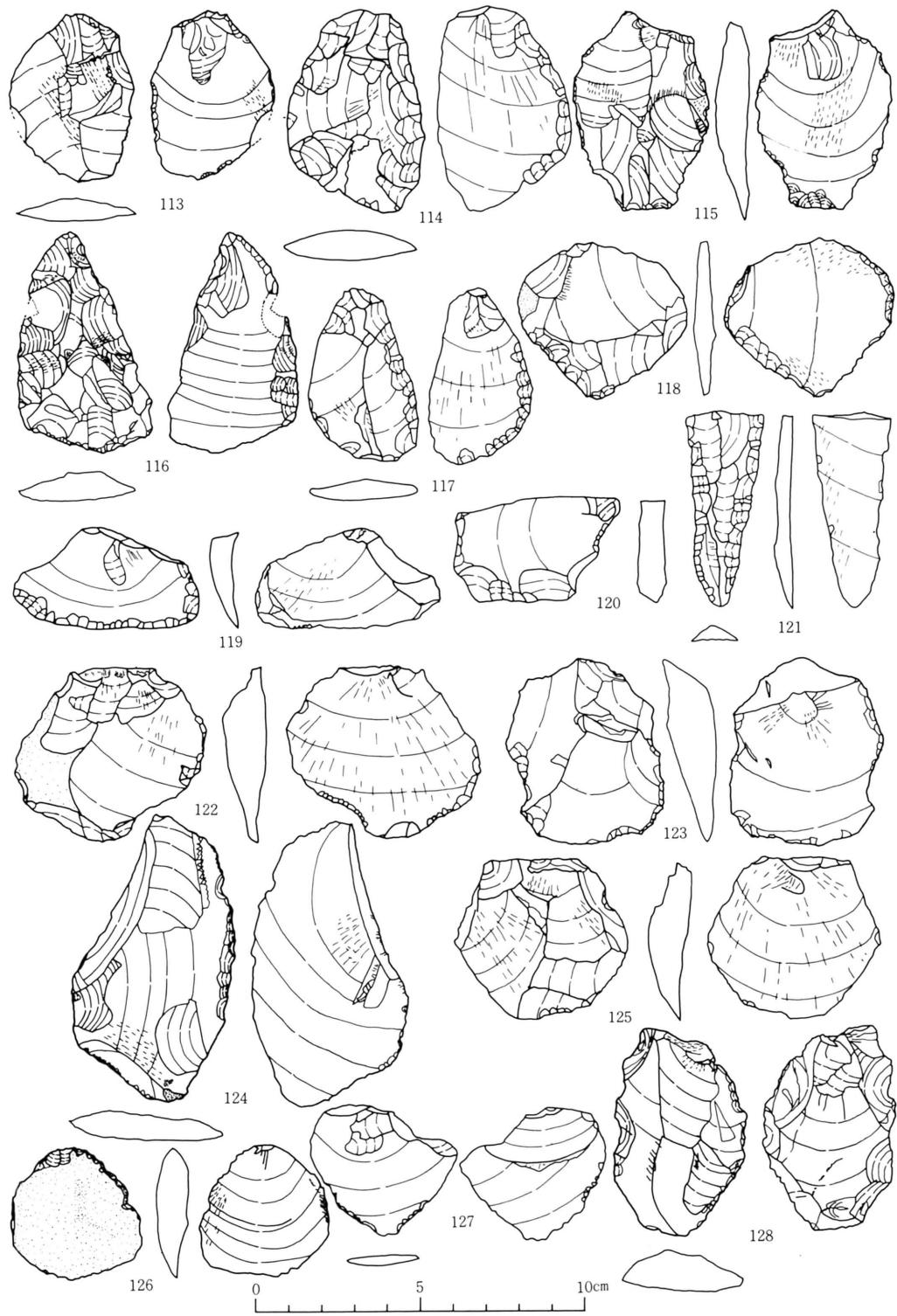


第76図 石器実測図（8）摗器
— 238 —



第77図 石器実測図 (9) 搗器

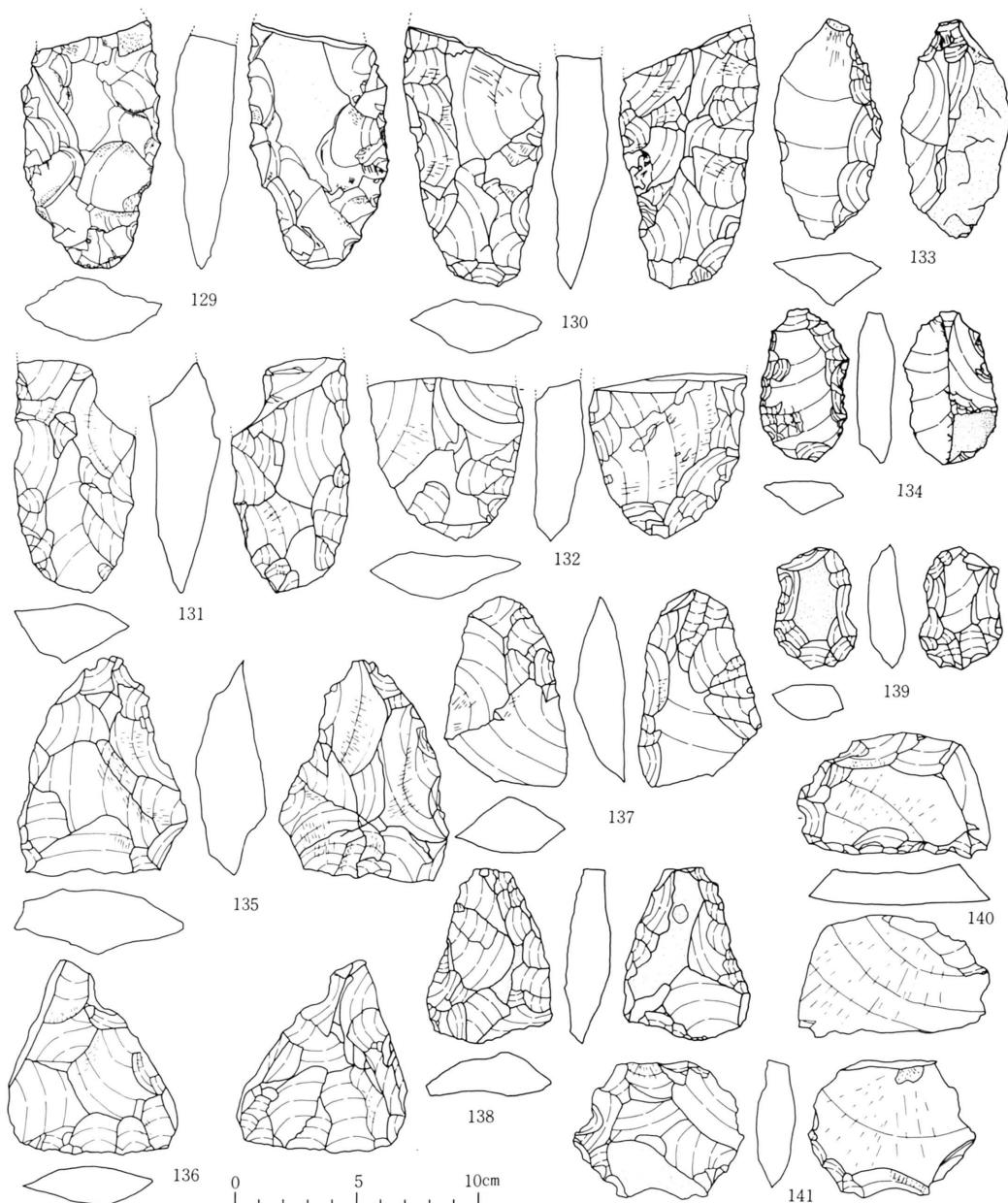
第 VII 地区



第78図 石器実測図 (10) 搔器類 (削器・使用痕を有する剝片)

されたもので、刃部形成はオーリニヤック的な複雑な二次加工のものが多い(10点)。その角度は41~88°で、45~70°に集中している。使用痕は微細な破碎痕と摩耗痕で、主に刃部加工部に認められる。摩耗痕の観察されるものは106、107、108の3例である。

石材は珪質泥岩6、硬質泥岩1、凝灰質硬質泥岩4、石質凝灰岩2、粘板岩1である。



第79図 石器実測図 (II) 搢器類

第 VII 地 区

素材が比較的肉薄で、鋭利な刃部角を有するものを削器とした。削器的なものは 9 点である。なお、使用痕を有する剝片とは刃部加工の規則性と刃部加工がある一定の長さを有することを区別した。119 はつまみが付くと横形石匙と見られるものであり、同様に 113～117 は縦形石匙のバリエーションに含まれるものである。なお、118 は破損しているが pick 状の突出部を有していたと考えられ、それを境に反対側から剝離加工されている。また、121 は石槍様を呈している。

刃部は前者が対辺にあり、後者は 115 を除いて側縁に形成されている。刃部加工は 115 の先端部を除いて背面あるいは腹面から押圧剝離される片面加工である。刃部形態は細かい二次加工とやや大きい二次加工で単純なものが多い。その角度は 31～71° である。観察される使用痕は石匙、搔器と同様、微細な破碎痕で刃部加工部に多く見られる。

石材は珪質泥岩（2 点）、硬質泥岩（1 点）、凝灰質硬質泥岩（3 点）、石質凝灰岩（2 点）、流紋岩（1 点）である。

使用痕を有する剝片は薄い剝片の一端に小さな剝離痕をもつもの 7 点である。中には人為的に加工されたものを含んでいると考えられるが、識別困難なので、使用痕を有する剝片と一括した。前述の搔器、削器とは刃部の不規則性、縁辺の一部使用であることで区別した。使用痕を有する剝片は搔器、削器の原初形態と見られなくもなく、元来は同様の機能を有するものかもしれない。全体的形態は素材に大きく左右され、定形化されていない。剝離痕は小さな二次加工的であり、しかも縁辺の一部分である。

石材は珪質泥岩（3 点）、凝灰質硬質泥岩、石質凝灰岩（各 1 点）、流紋岩（2 点）である。

搔器様打製石器は、搔器に類似するものであるが、刃部形成されない点（押圧剝離による二次加工されない点）で区別した。いずれも粗雑な加撃剝離によって整形されたもので、比較的大型のものが多い。全体的形状によって 3 類に分けられる。

(1)石籠状石器に類似するもの 6 点(129～134)。細長い長円形に近いもので、129～131 が石籠状石器の刃部下半に、132 が基部に類似している。大型の石籠状石器と見られなくもないが、先端に刃部形成されない点で異なる。あるいは同類に含めるのが妥当かもしれない。

(2)三角形を基調とするもの 4 点(135～138)。二等辺三角形をなすもので、幅の広い下底辺を刃部としている。特に 135、136 の刃部は幅広い。137、138 の 2 例は、刃部形成がかなり早い段階に行なわれたもので、トランシェ様石器に類するものと思われる。

(3)その他 3 点 (139～141)。140 が方形をなし、141 が円形に近い。139 は分銅形に近い形をなすものである。

刃部は明確ではないが、使用痕（石匙、搔器等に見られる細破碎痕）は先端部（対辺を含む）に認められるものが 3 点 (129、131、136) であり、側縁で観察されるものが 4 点 (130、131、134、137) である。さらに 131 は摩耗痕が著しい。なお、トランシェ様石器に類似する 137 は側

縁に破碎痕が認められる。

石材には石匙、搔器同様に硬質泥岩（3点）、石質凝灰岩（6点）、凝灰質硬質泥岩（4点）が使用され、破損しているものは1類の5例で、いずれも背面あるいは腹面からの加圧による折損である。

この類の石器は、石匙と同様に形態変化するものであるならば（後述）、刃部形成の認められないことから石籠状石器の原初形態と考えられなくもなく（1類）、はたまた、押圧剝離加工の認められない点からは粗削り用の搔器と見られなくもない（2、3類）。いずれにしても形態にはあまり限定されないものようである。

（6）磨製石斧（第80、81図、図版20）

石斧には磨製石斧と打製石斧、局部磨製石斧がある。局部磨製石斧（154）は数が少ないので、磨製石斧の中で取り扱うこととする。

磨製石斧は破損品（15点）を含めて27点である。全体的に風化している8点を含む。大きさは15～17cmの大型のもの（2点）と、10～13cmの中型のもの（4点）がある。^{註(1)}形状は縦長の長方形を基調とするが、基部と先端部の関係から①細長いもの（4点）、②単冊形のもの（6点）、③末広がりとなるもの（13点）に分けられる。

基部は幅が狭く平坦であるが、中には丸味を有するものもある。側縁は彎曲する2点（144、153）を除いて直線的である。面をなすものもある（163）が、幅が狭く不明瞭なものが多い。

先端部は直線的なもの（3点）と弧状をなすもの（7点）がある。横断面形には扁平なもの（9点）、隅の丸い方形なもの（12点）、円形に近いもの（4点）がある。

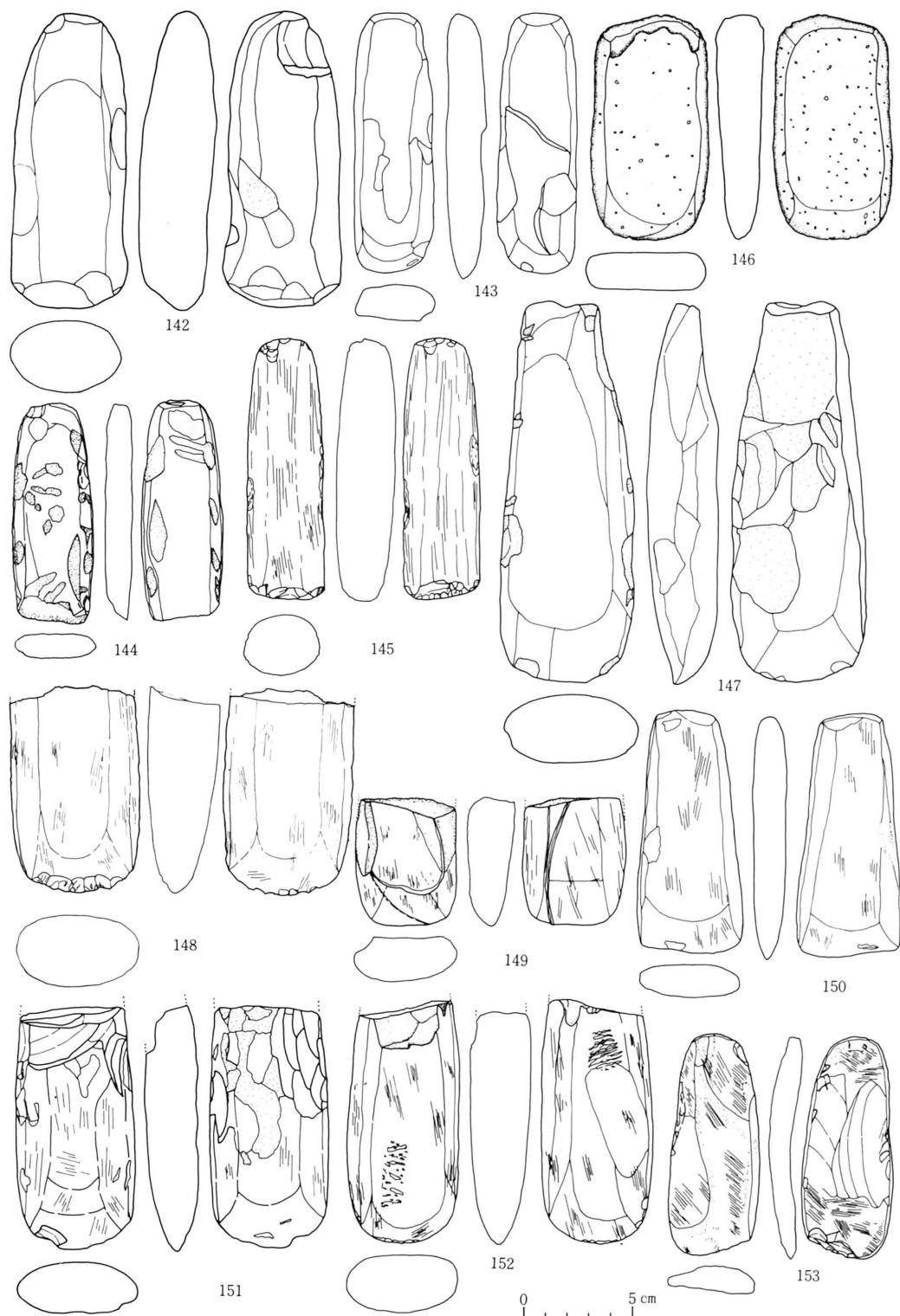
刃部は、両面から研磨して形成しているが、片刃的に一方に片寄るものが3例（143、147、149）見られる。刃部角は50～79°で、65～75°に集中している。

石斧の作出は敲打後の研磨によるものであるが、僅かに打痕を残すものがある（144、145、152、158、165）。また、擦痕は長軸方向に若干認められるが、顕著な153、155の2例は方向が一定ではなく斜め方向のものが多いようである。

破損品は15点で57.7%を占めるが、刃部破損の6点を加えると80.8%となり、かなり高い比率をなす。破損はいずれも背面あるいは腹面からの加圧によるもので、基部近くか、刃部近くの折損である。

石材は珪質泥岩1、緑色角礫凝灰岩5、淡緑色砂質凝灰岩8、粘板岩4、粘板岩ホルンフェルス5、雲母片岩1、プロピライト2、角閃石玢岩1である。主に硬質なものを選択利用しているが、中には軟質なものが含まれている。

註(1) 東裏遺跡（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VI）では、10～14cmを大型、6cm以下を小型としている。当遺跡では15cmを越えるものがあり、大型、中型とした。中型は東裏遺跡の大型に当たるものである。



第80図 石器実測図 (12) 磨製石斧

第VII地区



第81図 石器実測図(13) 磨製石斧

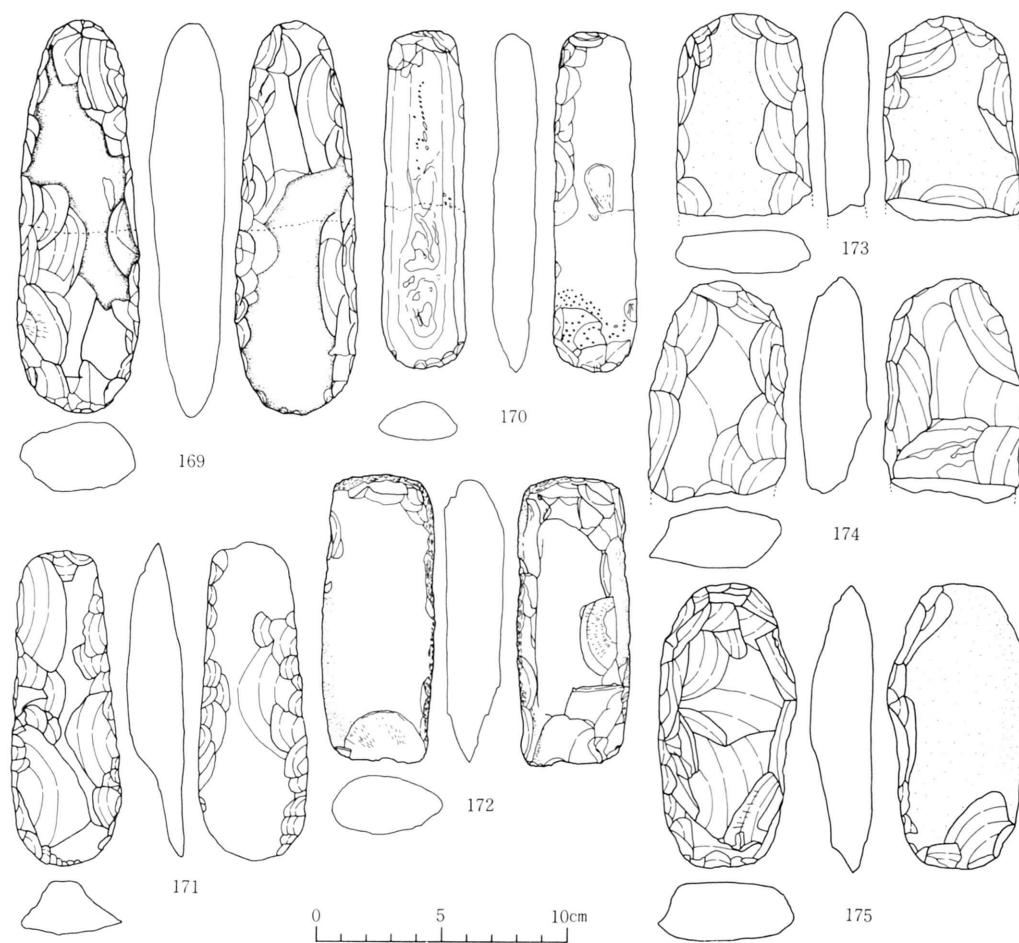
(7) 打製石斧 (第80・83図、図版20)

石鍬と見られる大形のものもあり、一応10~15cmのものを打製石斧、16cm以上のものを石鍬とした。

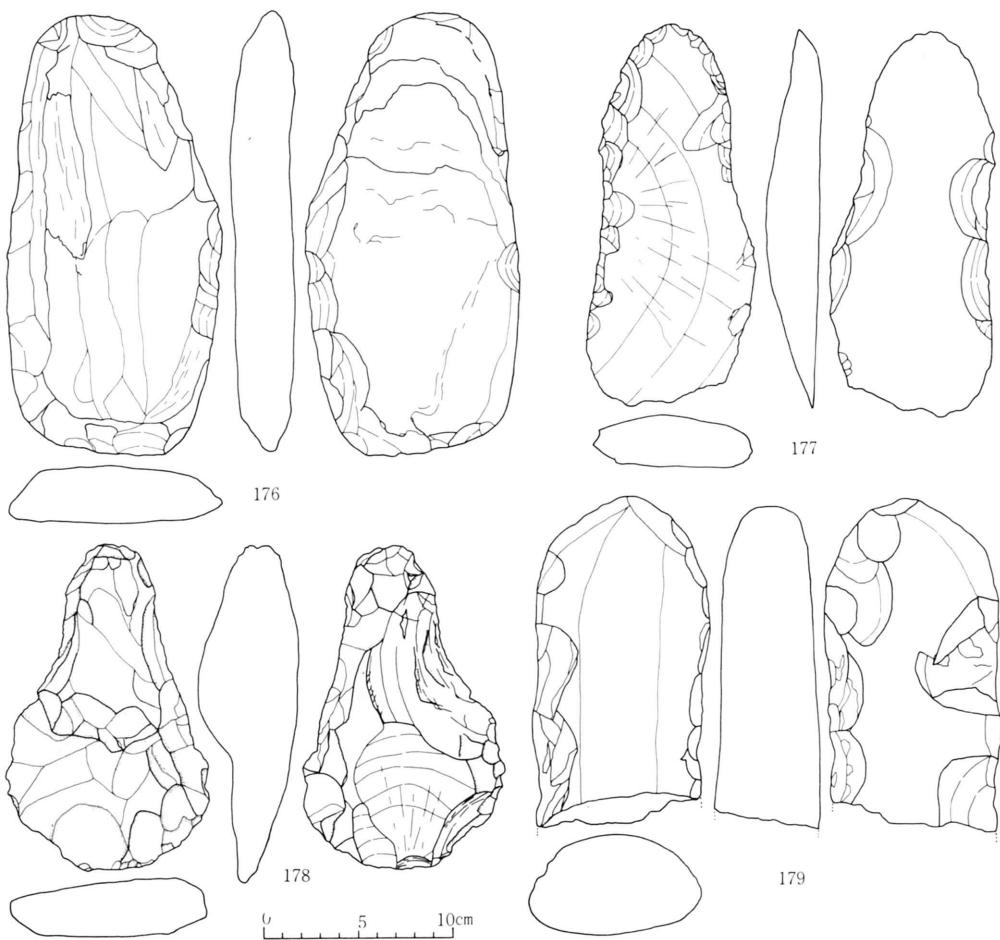
打製石斧は破損している2点を含めて7点である。形状は169、170が縦に細長く、他は単冊形をなす。基部は169を除いて方形をなし、側縁は直線上をなすものと彎曲するものとがある。先端部を刃部としており、刃部欠損とみられる172を除いて丸味を有し、その角度は50~70°である。基部及び刃部の幅は2.2~4cm、2.9~3.7cmであり、長さが10~15.6cmである。全体的な形成は打撃剝離によるもので169、172、173が両面に、175が片面に自然面を残している。刃部は片面加工的である。破損品は両者とも片面からの加圧による折損である。

石材は淡緑色凝灰岩1、粘板岩3、粘板岩ホルンフェルス3である。

石鍬と見られるものは4点である。このうち176、179は折損あるいは風化が著しく加工痕が明瞭でない。石鍬と断定できないがこれに含めた。177、178の2例は全体的形状が洋梨様を呈



第82図 石器実測図 (14) 打製石斧



第83図 石器実測図 (15) 石鋤

す。178は本体が薄くなつており基部が細く厚い。177は基部近くを打ち欠いただけの簡単な作りで、一面が自然面をなす粗雑なものである。

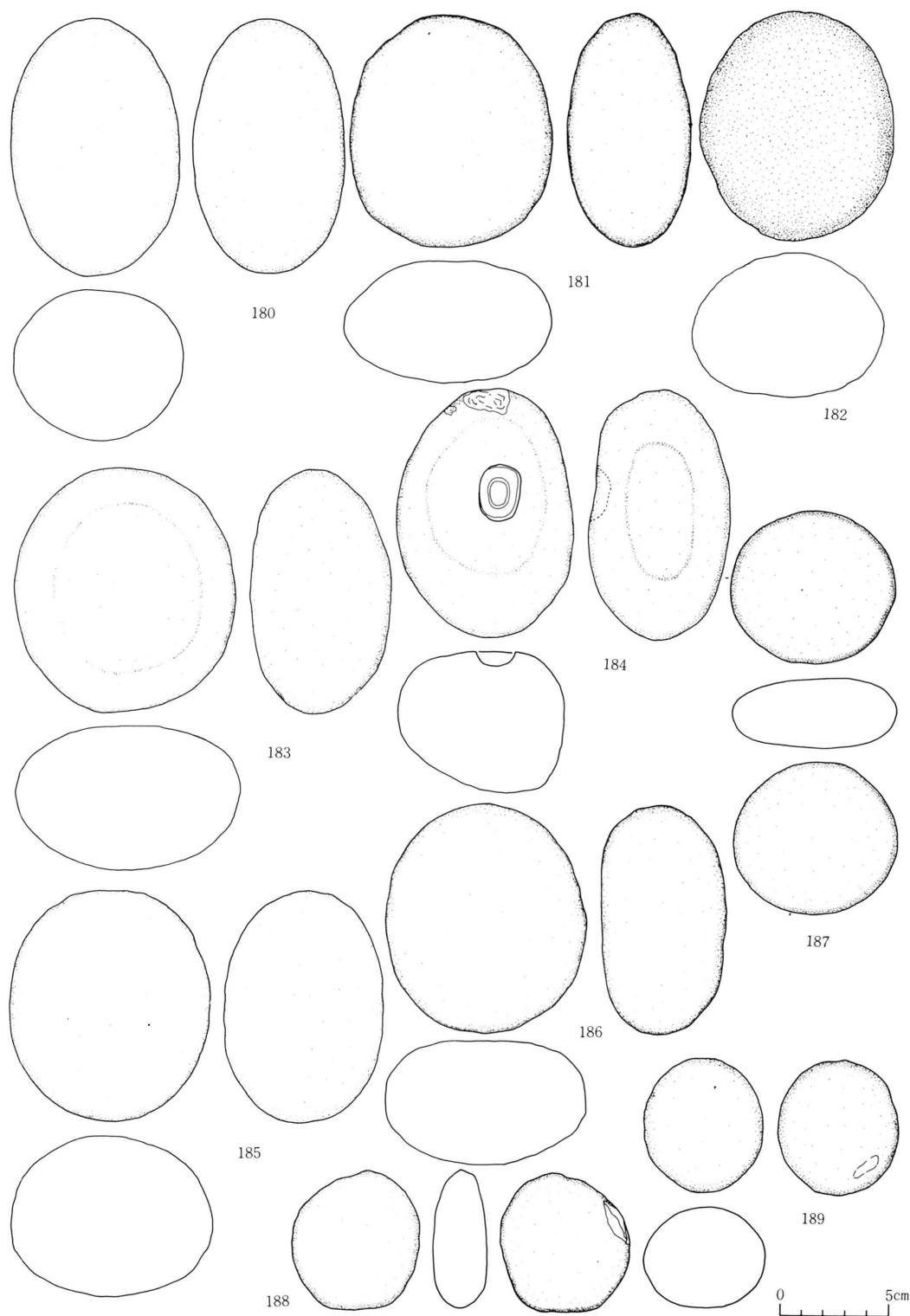
石材は濃緑色粗粒凝灰岩、複輝石安山岩、プロピライト、千枚岩が各1点である。

(8) 磨石及び凹石 (第84~86図、図版20)

磨石は使用痕の明瞭でないものを含めて15点である。本来は使用痕の確認をもって認定すべきものであるが、使用痕の風化を考慮して類似するものを含めた。なお、小さいものについては自然石と見られるものが多く、使用痕の認められるものに限定した。

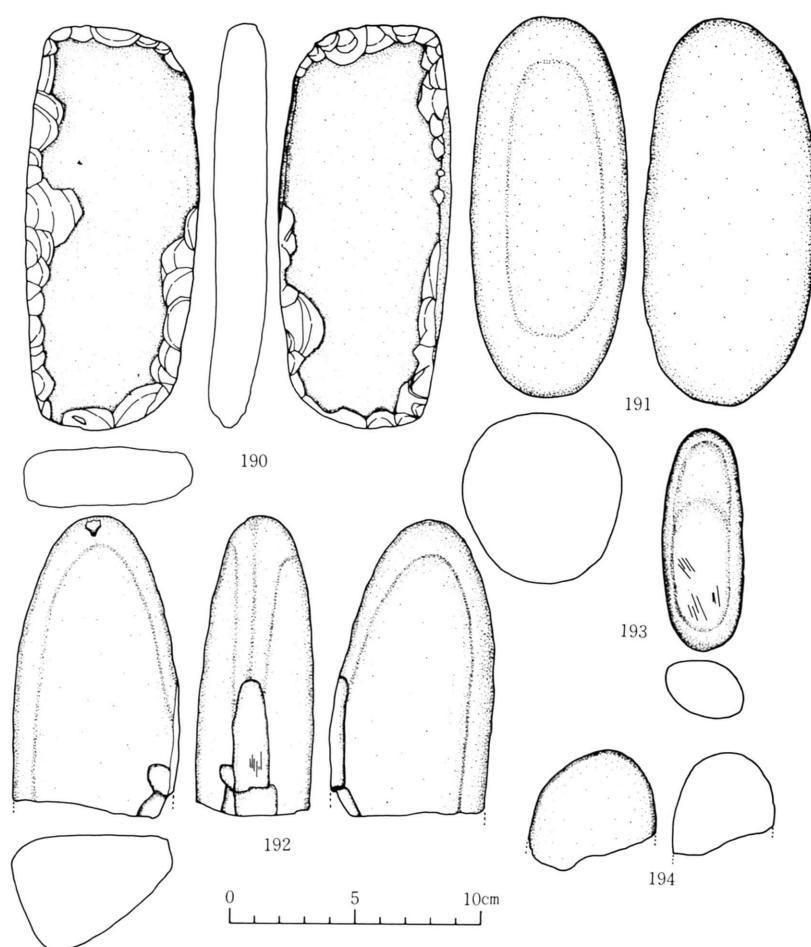
全体的形状から1類：扁平な円を基調とするもの(10点)、2類：棒状を基調とするもの(5点)に大別できる。前者は長径6.2~7.5cmの小型のもの(3点)と、10.5~11.8cmの大型のもの(7点)とがあり、主な研磨面は表裏両面(5例)、あるいは片面(2例)で、側縁が使用されているものはない。

第 VII 地 区



第84図 石器実測図 (16) 磨石

後者には長さが8.8cmの小さいもの(1点)と、15.1～15.9cmの大きいもの(2点)があり、表裏両面、あるいは3面、片面の「面」使用のもの(191、193、194)と側縁を使用しているもの(190、192)がある。なお、192は幅の狭い部分が主に使用されており、190は周縁を両面から打撃剥離した後に研磨している。重さでは80.9～252gの軽いもの(4点)

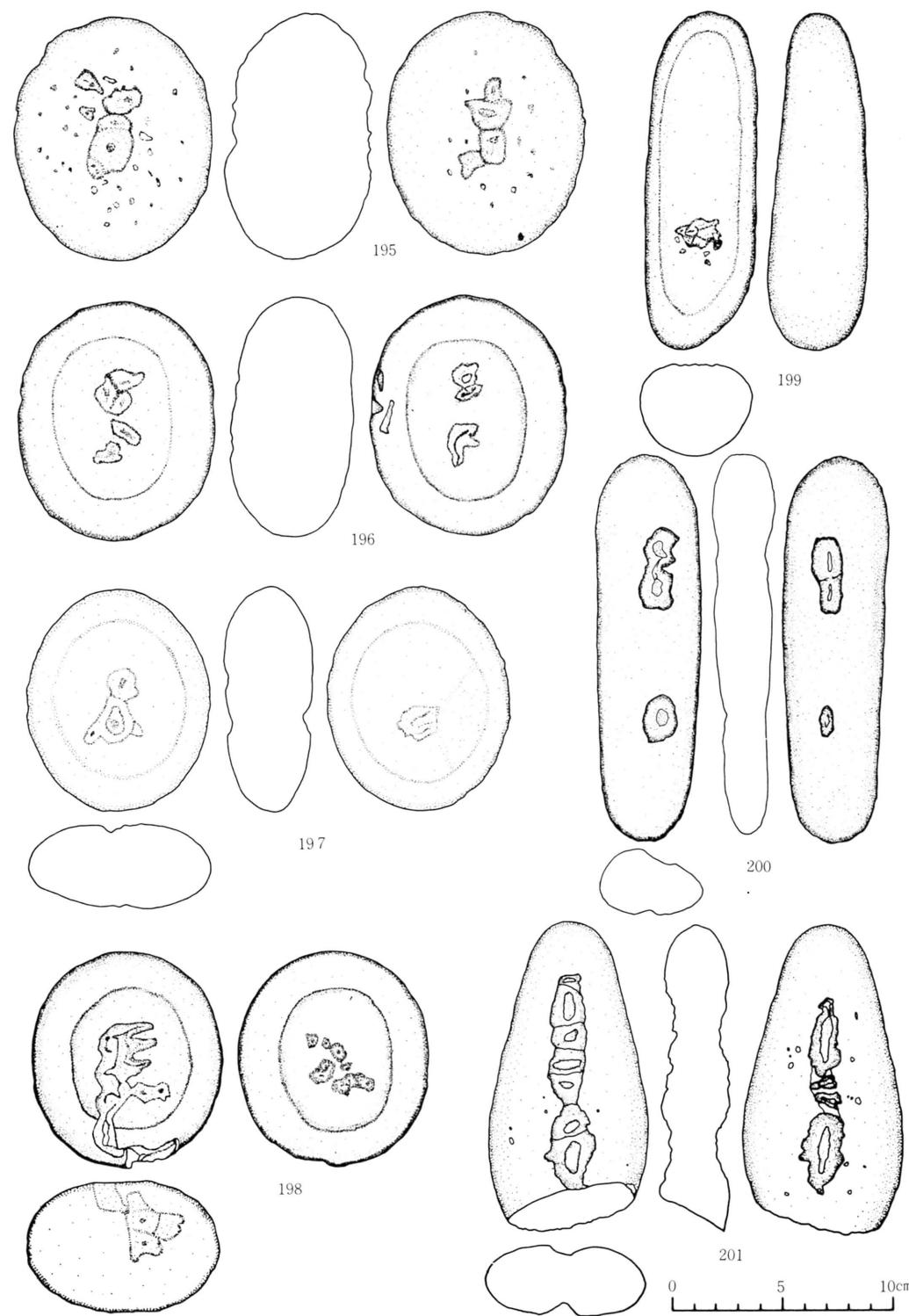


第85図 石器実測図(17) 磨石

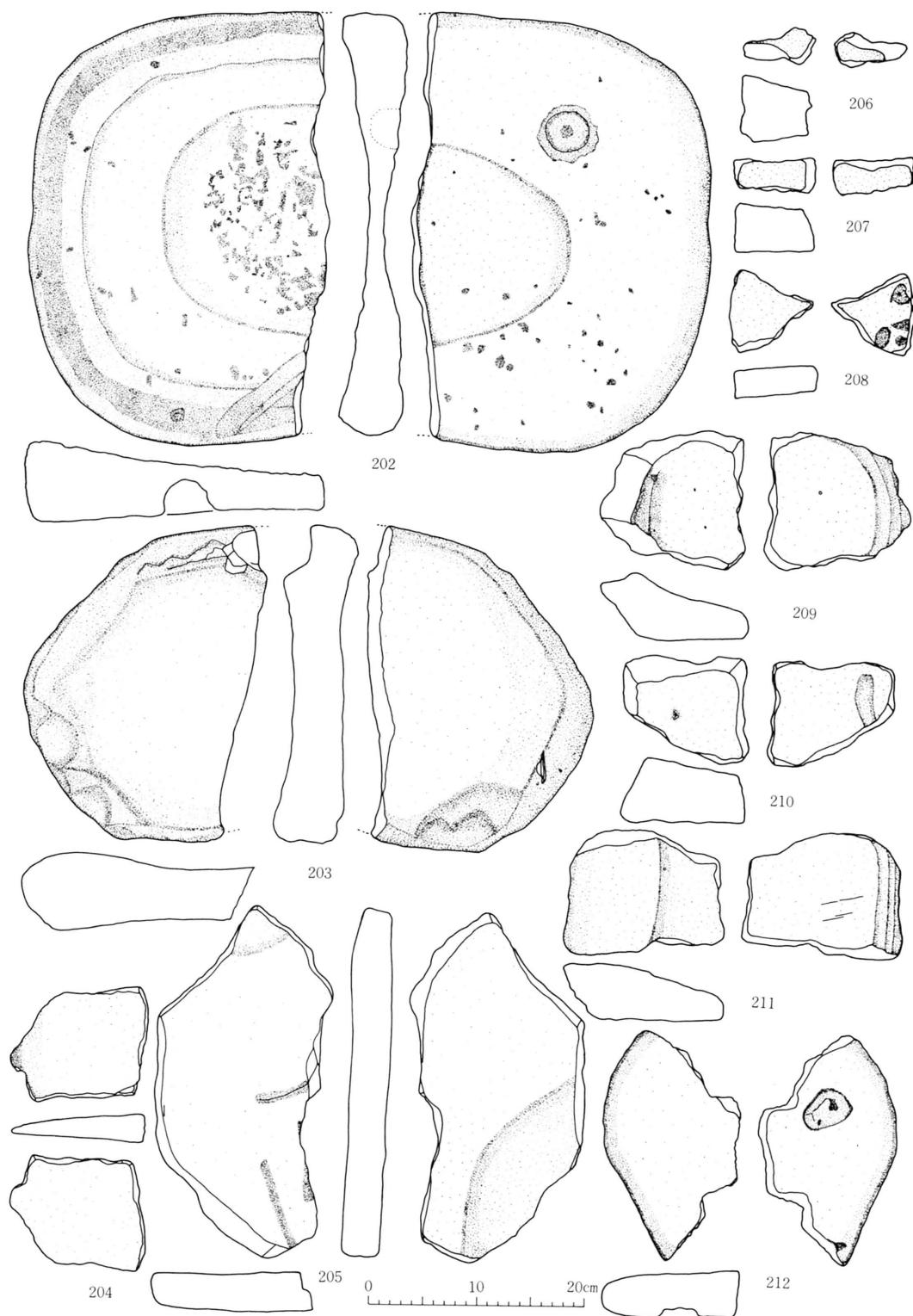
と730～990gの重いもの(8点)とに2分される。研磨面は側縁使用の2例を除いて側縁に比して表、裏面が若干滑らかなもので、摩滅痕はそれほど顕著ではない。

凹石は7点で、このうち研磨痕をもつものが6例である。研磨痕は全面あるいは両面に認められるもの5点、片面のみのもの1点で、磨石と見られる。磨石とは便宜的に凹の存在によって区別した。磨石、凹石は元来両様に使用されるもので、区別されないのかもしれない。

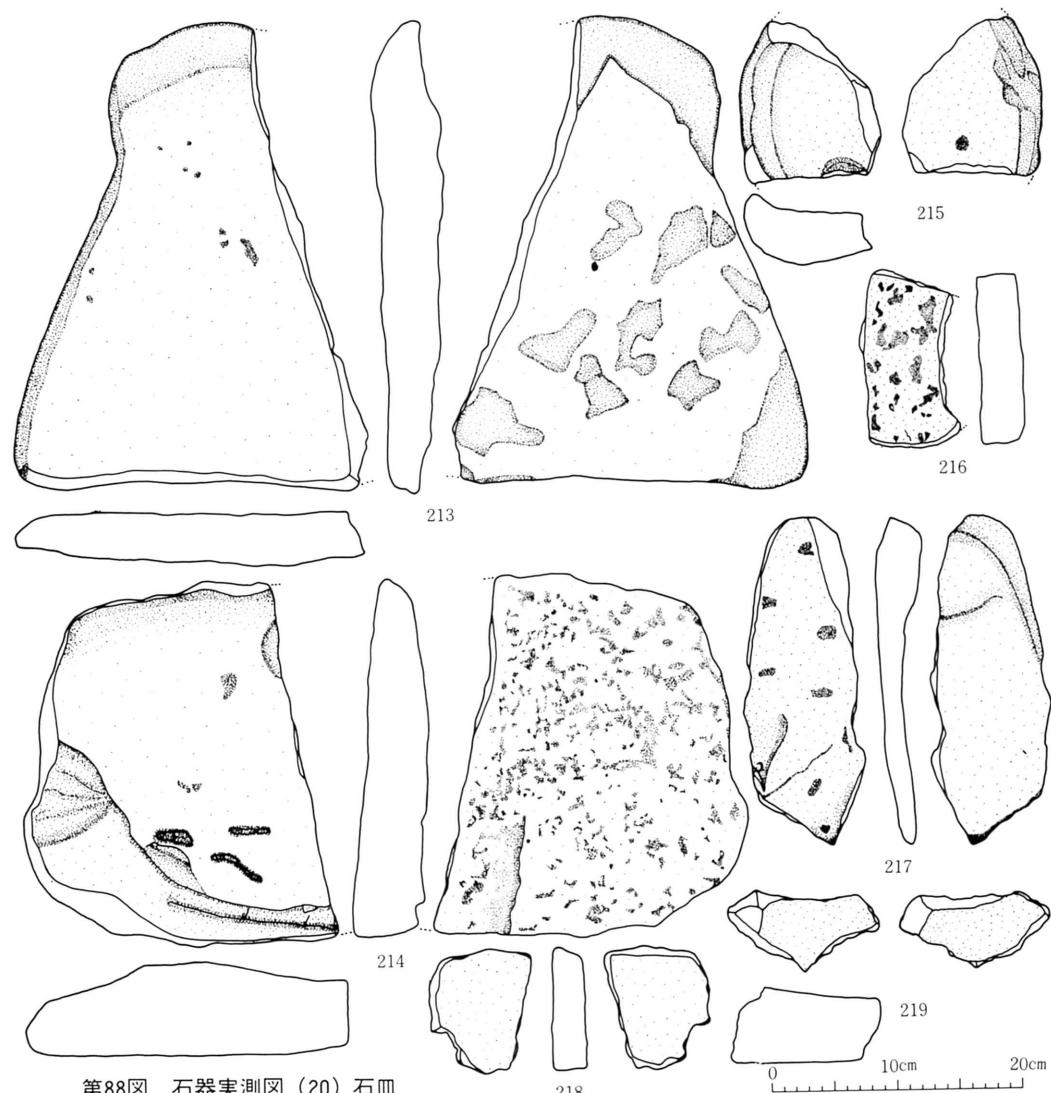
凹石も磨石同様、全体的な形状から1類：扁平な円を基調とするもの(4点)、2類：棒状を基調とするもの(3点)に大別される。前者は直径9.4～10.9cmで、後者の長さが13.9～17.3cmである。重さは300～810gである。直径・長さは磨石よりやや大きいが、重さはほぼその中間に位置している。凹はほとんど表裏両面に認められ、いずれも複数の穴が穿たれている。特に201は長軸に添って連続している。凹はV字状あるいはU字状、皿状を呈し、深いものと浅いものとがある。なお、200は磨石192のように側縁が研磨によると見られる幅6cmの細長い平坦面を形成している。



第86図 石器実測図 (18) 凹石



第87図 石器実測図 (19) 石皿



第88図 石器実測図 (20) 石皿

石材は砂質凝灰岩 6、緑色角礫凝灰岩 1、粘板岩ホルンフェルス 1、複輝石安山岩 3、プロピライト 8、流紋岩 1、角閃黒雲母花崗岩 2である。

(9) 石皿 (第87、88図、図版21)

石皿と考えられるものは18点で、いずれも破損品である。 $\frac{1}{2}$ ほどのものが2点で、他は小破片である。形状の推定される202、203は長円形をなすとみられ、前者は扁平な自然石の両面を使用面としており凹を形成している。後者は側縁を造り出したもので中央部の使用が顕著でかなり凹んでいる。また、裏面も使用されたと見られ滑らかである。大きさは前者が $29 \times 20\text{cm}$ 以上、後者が $37 \times 25\text{cm}$ 以上で大型の部類に属する。小破片を見るとほとんどのものは片面使用であるが、206、219の2点は両面が使用されている。側面を造り出しているものは202、215の2

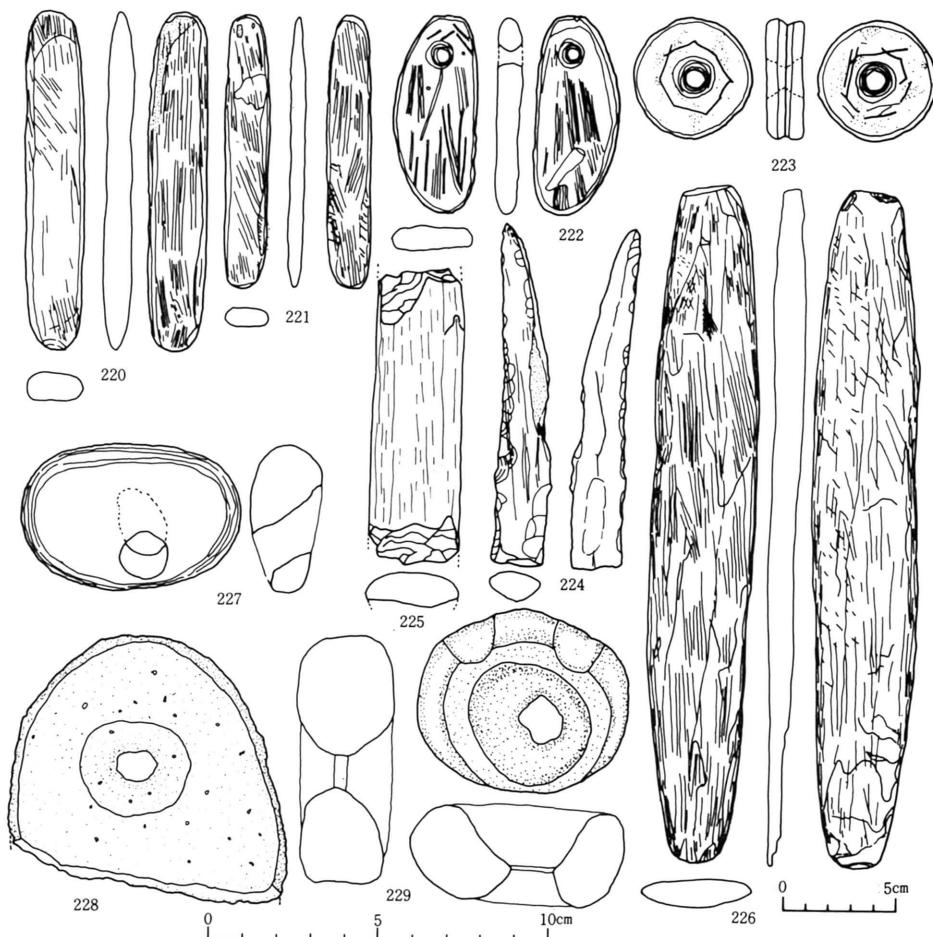
例で、脚の認められるものはない。209は外面が滑らかに加工されており、側縁の造り出しに続くものかもしれない。なお、209～211は直接接合しないが、同一個体と見られ、火熱のためか内面が黒色を帶びている。使用痕は中央部が凹んでいる他は風化が著しく観察されないものが多い。

石材は複輝石安山岩が16点、角礫凝灰岩、淡緑色角礫凝灰岩が各1点で、圧倒的に複輝石安山岩が多い。

(10) その他の石製品（第89～91図、図版20、21）

この中には装飾品及び分類困難なものを一括した。

滑車状石製品（223）。直径3.5cm、厚さ1.1cmの滑車状をなし、細粒凝灰岩製の耳飾りと考えられる。全体的に研磨され周辺に約2mmの溝がめぐる。中央には両側から穿孔された穴があり、



第89図 石器実測図 (21)

220・221小型磨製石製品 222・227～229有孔石製品
224刺突具 225・226石劍 230・231線刻を有する石製品

第 VII 地 区

そのまわりに6、8角形を呈する線刻が施されている。

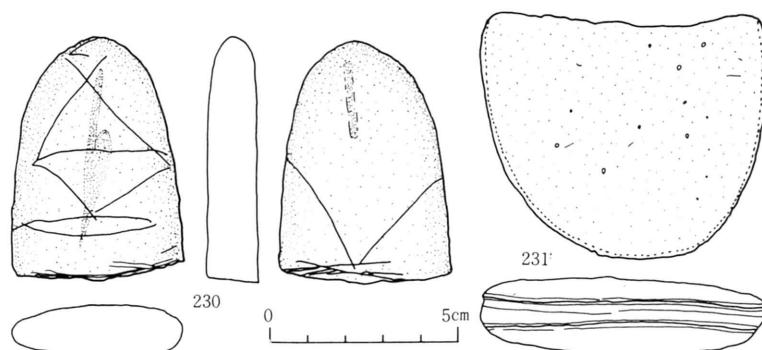
有孔石製品(222、227~229)。222は長さ5.8cm、最大幅2.1cmの扁平な勾玉状を呈す。上部に両側から穿たれた穴が貫通しており、垂飾りと考えられる。細粒凝灰岩で器面全体に擦痕が観察される。228は複輝石安山岩熔岩塊を扁平な長円形に整形したもので、下半が欠損している。中央には両側から穿孔された大き目の穴があいている。他の2点も有孔石製品であるが、人為的に穿たれたものではない。輝石安山岩と淡緑色砂質凝灰岩である。

小型磨製石製品(220、221)。両者とも長さが9.8cm、8.0cm、幅が1.7cm、1.3cmの細長い単冊形をなすもので、両端を刃部としている。刃部は鋭く尖る両刃をなし、小型の鑿を思わせるものである。石材は粘板岩で、全面粗雑に研磨されており器表面の擦痕が目だつ。

刺突具(224)。細長い槍先状を呈し、鋭く尖り彎曲している。粘板岩ホルンフェルス製の刺突具と考えられる。自然面を残す石材を敲打成形し、内面を削り取って内彎させたものである。

石剣(225、226)。226は長さ30cm、最大幅4.6cmの完形品である。一端が自然面を残す基部で、他端が薄く尖っている。全面異方向の擦痕が認められ成形はそれほど丁寧ではない。225は幅2.5cmで、側縁が丸く仕上げられた破損品である。石質は両者とも粘板岩である。

線刻を有する石
製品(230、231)。
230は扁平な川石
の表裏両面に柄頭
を思わせる幾何学
文様を有するもの
である。文様は直
線を主体とした弱

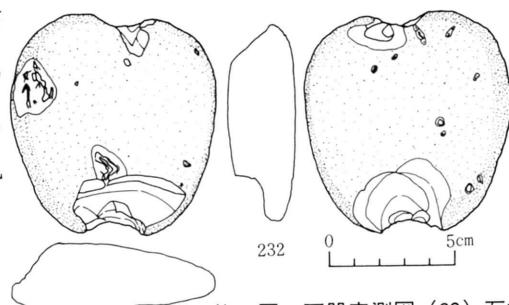


第90図 石器実測図 (22) 線刻を有する石製品

い線で粗雑に描かれている。淡緑色凝灰岩製で、ちょうど両面をめぐる線刻部分で折損している。231は複輝石安山岩熔岩塊を扁平な長円形に成形したものです、中ほどで折損している。全面研磨成形されたもので、特に裏面が滑らかである。周縁には1条の沈線がめぐっている。

石錐(232)。淡緑色砂質凝灰岩の扁平な川石の両端を打ち欠いて紐かかりとしたものである。重さは273gで、かなり大きいものである。

以上の他には石核、剝片、破片が大量に発見されている。また、中世あるいは近世のものと考えられる砥石(図版21)がある。



第91図 石器実測図 (23) 石錐

III 考察とまとめ

1 竪穴住居跡について

発見、確認された竪穴住居跡は重複を含めて3棟である。検出された3棟はいずれも遺存状態が悪く、周溝の検証によって辛じて確認されたものである。

平面形は長円形をなし、その規模は $8.0 \times 6.5m$ の大型のものと、 $5.0 \times 4.2m$ の小型のものがある。床面は地山を削り出したもので、周溝は検出されない部分もあるが、本来は全周していたものと思われる。主柱は5柱か6柱で周溝のやや内側にあり、炉跡を通る軸線を境に線対称形をなす。なお、柱穴の中には外方に傾斜するものが含まれている。炉跡は川石を方形に並べた石囲い炉で住居跡のほぼ中央に位置している。いずれも焼土はあまり残存せず、流出した可能性がある。焼土遺構は掘り込みを有するもので地床炉と考えられ、住居跡に伴うと見られる。

その他の施設としては、第1住居跡の貯蔵施設とみられるAi74埋設土器、貯蔵穴と考えられるP12、第3住居跡のBa80土壙等がある。竪穴住居跡内の埋設土器は卯遠坂遺跡^{註(1)}、野駄遺跡^{註(2)}に類例がある。

伴出遺物は極めて少なく、明らかに伴うと見られるものは第1住居跡の埋設土器と若干の床面出土遺物である。それらによると第1住居跡はほぼ大木7b式に、第3住居跡は大木8a式に比定され、縄文時代中期前葉～中葉に位置づけられる。

なお、発見された住居跡は僅か3棟にすぎないが、炉跡等が4例発見されており、本来の竪穴住居跡はもっと多かったと推測され、集落を形成していたものと思われる。その範囲は現在となっては確認すべくもないが、包含層遺物の供給地が南方に求められることから調査地南方に続いていたものと推察される。

註(1) 卯遠坂遺跡 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I 昭和54年 岩手県教育委員会

(2) 野駄遺跡 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 昭和55年 勝田県埋蔵文化財センター

2 埋設土器について

検出された埋設土器は8例である。利用されている土器はすべて深鉢形土器で、完全な形で遺存するものは3例(2、6、Ai74)で、他は上半が破損している。完形に近いものが2例(1、4)。口縁部から体部のものが2例(5、7)、底部から体部のものが1例(3)である。このうち、煤の付着しているものは第4埋設土器とAi74埋設土器の2例で、煮沸用具を転用したと見られるものである。これらの埋設土器は竪穴住居跡周辺に散在しており、いずれの形にしろ集落に伴うものと考えられる。なお、発見された土器内には遺物の埋納されたものはない。

設置の方法では①正立位に埋設されたもの(1、3、4、5、7、Ai74)。②倒立位に埋設されたもの(2)。③横位に埋設されたもの(6)の3類に分けることができる。①類が圧倒的多数を占め、

破損しているものがすべてこの類のものである。

①は土器より僅かに大きい土壙に正位（ほぼ垂直）に設置されたもので、Ai74埋設土器を除いて確認面である第III層上面からの掘り込みが浅く、第1埋設土器は地山面には達していない。土器は第5、7埋設土器の2例を除いて底部から埋設されている。このことは本来の掘り込み面がかなり上位にあったことを物語ると考えられる。この種の埋設土器は「埋甕」として埋葬施設が考えられている。^{註(1)}また、埋設される土器の例には埋設炉が上げられる。^{註(2)}しかし、本例の場合はそれぞれ単独で存在し、焼土等を伴わないことから上記のことを積極的に証明するものではなく、その性格は不明と言わざるを得ない。

反面、Ai74埋設土器は口縁部の約7cmを残して第1竪穴住居跡の床面下に埋設されており、住居跡に伴うことが確認されている。この例は口縁部が床面から露出している点で卯遠坂遺跡の埋設土器（第2竪穴住居跡内）^{註(3)}に類似しており、おそらくは貯蔵施設として利用されたものであろうと推察される。

②は土器よりひとまわり大きい土壙に倒立状態に設置されたものである。このような例は繫遺跡で6例、柿木平遺跡で5例見られ、群集する埋葬施設と考えられ、これらの中には底部に意図的に穿孔されたものが5例認められている。^{註(4)}当遺跡の第2埋設土器は単独で存在し、底部の穿孔が認められないが、逆位に設置されている点が共通している。同様の機能を有するものとも考えられるが、異なる部分も少なくなく即断できない。

③は長円形の土壙に2個の深鉢形土器を横位に設置したもので、一見合せ口甕棺を思わせる。一方の深鉢形土器の口縁部に他の底部を入れたもので、土器を直列に並べた特異な状態をなす。後の土器の中には扁平な川石が入っており、前の土器が土圧のため押し潰れた形を呈す。堂ヶ沢遺跡^{註(5)}では単体の深鉢形土器が横位に設置され、その口縁部には扁平な川石が蓋となっている。当遺構の後の土器が類似している。また、筏遺跡では平地伏せガメ、土壙墓、合せガメと共に「副葬容器」^{註(6)}が発見されているという。どのような形態のものが不明であるが、前の土器が蓋と考えられる川石の前にあり、この副葬容器にあたるものではなかろうかと考えられる。もしそうだとすれば、埋葬施設と副葬容器を同時に直列に並べて埋納した例となろう。しかし、前述の如く、副葬品を思わせるものは発見されてなく詳細は不明である。

註(1) 繩文時代における埋甕風習 渡辺 誠 考古学ジャーナル40、1970、ニュー・サイエンス社

(2) 繩文時代中期後葉から後期にかけて一般に認められるものである。

(3) 卯遠坂遺跡 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I 昭和54年 岩手県教育委員会

(4) 甕棺と思われる繩文文化中期の土器群 吉田義昭 石器時代第3号 昭和31年 石器時代文化研究会

(5) 堂ヶ沢遺跡 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 昭和55年 関東地方埋蔵文化財センター

(6) 繩文時代のカメ棺(1) 賀川光男 考古学ジャーナル34・1969. ニュー・サイエンス社

3 土器の編年的位置について

第 I 群 1 類は早期末～前期初頭に比定されるものである。1 類 a は横位に綾絡文をもち、胎土に纖維が含まれていない、ガリガリした硬質焼成のグループである。裏面に縄文や条痕文がなく、口唇部に刻みをもつ点などから、早期末の早稻田 5 類期^{註(1)}、梨木畠式期^{註(2)}に併行すると思われるが、纖維を含まないことから古い方であろう。他に類例が少ないので明らかでないが、神沢海岸遺跡^{註(3)}で上川名 I 式期^{註(4)}に近いとする A 群 b 類に綾絡文の使用が見られている。早期の綾絡文の用い方については不明の点があり、出土例の増加を待ちたい。

1 類 b は底部形態不明だが口唇部の刻みや地文と胎土等からやはり早稻田 5 類期とみてよいだろう。1 類 c は斜縄文や撚糸文などの地文のみのものであるが、纖維混入の有無や多少からの類別は難しく、内面調整や焼成から編年上の位置を求めた。内面調整が粗雑であり焼成が比較的軟質のものは早稻田 5 類併行とみて、内面調整が良く平滑さを持つものは前期初頭として区別した。第29図 8、10 は前者に、同図 9、18、19 は後者にと分けられる。その中で 18、19 は後述の 1 類 e と同様大木 2 式に比定される。c 類の中で相対的に見れば早期末的な前者が多い。

1 類 d は羽状縄文をもつものである。羽状はほとんどが異原体によるもので、節や条が深く密であり、内面調整に平滑さをもつことから、前期初頭に類するものかと思われる。ただ東北北部では、羽状縄文をもつ長七谷地 III 群を前期初頭に、又東北南部では船入島下層式(早期末)^{註(5)}から見られており、当遺跡の羽状縄文土器をどう扱うか疑問の残るところである。ともあれ d₁ は口縁部の破片がないのでなんとも言えないが、口縁部や底部に正整、不整の撚糸文をもつ d₂ は大木 1 式に含められよう。なおループ文を持つ胴部破片は 1 点だけしかなく、羽状に伴った沈線や撚糸圧痕文、結節羽状縄文等は全く見られなかった。とりあえず d₁ は大木 1 式より前段階であり、d₂ は大木 1 式期ととらえておく。口唇部分しかなく、その部分全体に正整、不整の撚糸文もつ破片は、口唇部の断面形態の類似性から 1 類 d か 1 類 e のどちらかに組み入れた。正整なものには大木 2a 式に含まれるものがあるはずである。

1 類 e は器面全体に不整撚糸文を施したものであり、大木 2a 式に比定される。^{註(7)}

その他底部破片は 1 類 d に属する平底の第30図 21～24 は前期初頭に、26 は早期末の早稻田 5 類期にそれぞれ比定できるが、25 の尖底部は、尖頭部がゆるやかなことと地文のあり方から、同じく早稻田 5 類期の古い方と考えられる。

以上 I 群 1 類土器は早期末～前期初頭までで、下限は大木 2 式であろう。尖底部の出土はあるが、器内外両面に縄文・条痕文をもつものは 1 片もなく、赤御堂式期、上川名 I 式早稻田 4 類期までさかのぼることはないだろう。他遺跡の早稻田 5 類併行と称される土器群には少量の撚糸圧痕文や条痕文が混じるが、それらは全く見られないことは本遺跡の特徴と考えられる。県内で早期末の土器を出土する遺跡は大渡野遺跡^{註(9)}、熊の沢遺跡^{註(10)}、宮手遺跡^{註(11)}、野駄遺跡^{註(12)}、沢内 B

第 VII 地 区

註(13) 遺跡、崎山弁天遺跡、蛇王洞遺跡、白沢遺跡 等があるが、縄文尖底土器の終末期のものは前5遺跡で見られる。本遺跡の1類b、cは大渡野3群a類、宮手、野駄II群A、沢内B1類Bに類似するが、宮手には口縁部文様帯に不整撚糸文をもつものがあり違いがある。1類dは大渡野4群、熊の沢5類、野田III群A、沢内B1類Bに類似するが、大渡野では口唇部に刻み目や口縁直下の刺突文など見られ、その点で相違がある。詳細な比較はできなかったが、早期末～前期初頭の様相を知る1資料になるだろう。

I群2類は前期後半の大木5式に比定される。梯子状文や口縁部の山形や環状の装飾体から第31図1、2、5、6は大木5a式に、ボタン状貼付文をもつ図3、4は大木5b式にと分けられる。破片数が少なく、又この期前後の 大木3～4、大木6に比定されるものは見られなかった。

II群土器は縄文中期前葉～中葉に比定されるものであるが、中期初頭にあたる大木7a式と見られるものは出土していない。従来から大木7a式には大木6式期からの竹管による沈線や刺突文が多用され、又器形的にも大木6式との関連性が言われているが、その典型的なものはない。ただ大木7a式に含められるべき破片が入っているとすれば、2類の一部と9類の折り返し口縁の深鉢などであろう。大木7a式期に撚糸圧痕文も使われたとみると、1類aの直上形深鉢も加えられるかもしれない。いずれ大木7a、7bの見体的な様相が明らかになっていない現状では、撚糸圧痕文をもつものは大部分大木7b式にくみ入れて考えざるを得ない。

1類と2類は撚糸圧痕文と沈線文という施文法の違いはあるが共通点は多い。器形的には口縁上端に丸味をもち平縁が主であること、深鉢は口縁直上ぎみのものが大部分で、中に口縁や内湾又は外反するものを含むこと、浅鉢は口縁ゆるやかにたち上がる単純な浅鉢でこぶ状の小突起をもつものが少量あること等あげられる。文様モチーフでは口縁上端にせまい文様帯をもち、横位の直線文を軸に連弧文、櫛歯状文、列点文を施すことがある。少量ではあるが綾絡文が加わっていることも同様である。沈線文の替わりに撚糸圧痕文を、あるいはその逆になって沈線文と撚糸圧痕文両方用いている破片も見られ、以上の共通性から、1類と2類はほぼ同時期に存在したと推定できるものである。大木7aの竹管の沈線文等から、あるいは沈線をもつ2類が1類に先行するかとも考えられるが、逆に大木8aでも沈線が多用されることから2類が新しくなるとも見られ、結局1類、2類の時期差を認める根拠は見い出し難い。1類、2類は大木7b式の古い方に位置づけて良いと思う。同類のものは県内において大館町遺跡 IIIa群9類、IIIb群4類、5類、天神ヶ丘遺跡3群、高谷野原遺跡1類、樺山遺跡、北館遺跡などに見られる。大旨大木7b式にしているが一部を大木7a式ととらえる見方もある。

3類は隆起線を上端に施した、口縁やや内湾する直上形に近い深鉢である。この器形は口縁内湾の傾向をたどる中期土器群に伴って発生し、それは内湾の程度や胴部の張りを強くしながら晩期土器までつづくと考えられるものである。施文技法的には古い時期から見られる隆帶の

貼り付けであるが、器形の面で違いがあり、II群土器（大木7b～8a）に共伴してくるものであろう。他の出土例は西田、樺山、^{註(22)}中荒巻 遺跡などに見られ大木8a式に伴っている。

4類は口縁部に隆起線による長楕円もしくは隆帯にはさまれた幅広の沈線帯を施した。細長い文様帯をもつものである。文様帯の中に撚糸圧痕文や沈線文、刺突文をもつ4類aやbは一般に凹みが浅く、無文になっていてミガキ調整されている4類cは凹みが深い。器形は深鉢と浅鉢両方あるが、せまい文様帯ということから、浅鉢形に多く用いられたものと思われる。ただ4類cにあっては深鉢形が相当数ある。口縁部の長楕円の区画文は大木7b式のめやすともなっているので、4類a、bは大木7b式とみて良いが、4類cは大木7b式から大木8a式にかけてのものでないかと思われる。それは後述の5類d、eに多用されることと、隆帯間をミガキ調整する手法は大木8b式土器の口縁部によく見られるからである。連弧文、撚糸圧痕列、刺突列から1類、2類とのつながりを示しており、又4類にあるこれら長楕円形の文様帯は5類土器の文様帯内部にとりこまれており、多くは共伴関係にあるものと考えられる。4類土器は前述した各遺跡の大木7b式に伴って多く出土している。

5類土器は1～4類に比べ幅広い文様帯を展開するものであり、浅鉢も含まれているが大部分は深鉢形で占められる。施文技法には撚糸圧痕文、沈線文、刺突文、隆起線文などの違いがあり、時期的には大木7b～8aと幅をもってとらえられるだろう。編年上の位置づけで大木7bと大木8aの移行の過程は今のところ必ずしも明確にされていないので、5類a～eのうちどれが大木7bとか大木8aであるかと一線を引くのは、難しい部分である。

從来から知られている大木7b式のメルクマールのうち、①撚糸圧痕文の使用と②大型の突起をもつ大波状口縁の存在、大木8a式では③口縁内湾のキャリパー形深鉢の一般化と④渦巻文の隆盛という、4つの観点を基本にして5類土器を観察してみた。

5類aは撚糸圧痕文の使用と大形の山形突起（扇状把手、弁状突起）をもつものを含むこと口縁内湾の著しいものがないこと、渦巻文が少量しか見られないことから、大木7b式のものと見て良いだろう。連弧文をもつものは1類との関連を示している。

5類bは沈線文が文様主体であるが、区画文様モチーフは5類aのものと共通性がある。ただ口縁部文様帯の中を4あるいは8等分する区画がより多く用いられ、渦巻文がめだつてくることに違いがある。大型の山形突起をもつグループがあり、大木7b的要素が強いとともに、口縁内湾するキャリパー形深鉢が多くなるという大木8a的側面もある。口縁部の連弧文は2類と、口縁上部文様帯に長楕円の細長い文様帯をもつb₂は4類との関連性が考えられ、中心に渦巻文を配する区画文様は5類c、dに類似している。b₃は器形は異なるが沈線文様のあり方からb₁、b₂に共伴するものと思われる。

5類cは隆起線にそって撚糸圧痕文を施すこと、大型の山形突起をもつ器形を含むことから

大木7b式に比定されようが、キャリパー形深鉢が多く、渦巻状の突起もかなりあるということから大木8a的要素も強いと見られる。特に c₄ は大木8a式と見て良いものである。

5類dは隆起線にそって沈線文を施しているが、この文様モチーフは5類cに類似し、5類cの撲糸圧痕文を沈線文に置き換えたものと見ることもできる。5類cとdの共通点は、施文技法を別にすれば、ともにキャリパー形深鉢が多いこと、口縁部を長楕円や大波状、三角形状に区画するモチーフをもつことである。異なる点は横S字状の大きな貼付文、突起が見られること、d₄ のように口縁上端の太い隆帶間にミガキ調整された無文部分をもつものが多いということであろう。区画内の渦巻文もやや大きく強調されたものも増加している。以上5類c、dには施文の違いだけで共通要素が多く、時期差を考える根拠に乏しいが、大木8a式期に沈線文や渦巻文が多用されることから、5類dの方がより新しく、一応大木8a式期の範疇に含めて考えたい。

5類eは隆起線文の区画文をもつものである。口縁部を大きく区画して渦巻文を配するモチーフで5類c、dに類似するものもあるが、口縁部の区画文がくずれて、単に「ㄣ」状に区画線が流れるもの、渦巻文が横に連結するだけのもの等のモチーフが現われている点から、5類c、dよりも新しいものと考えられる。隆起線には1本による区画表現と、2本の平行線によるものとがあり、後者は次の大木8b式に特徴的な隆沈線に移行する前段階と見られ、前者よりは新しいものととらえている。

前述のように5類a、cは撲糸圧痕文をもつことで大木7b式としたが、その中で口縁内湾の著しいキャリパー形深鉢はより大木8a式に近い新しいものと見られるし、5類bも大旨大木7b式とするが、そのうちキャリパー形の深鉢は大木8a式に含めている報告書もあるので、より大木8a式に近いと考えられる。5類d、eは、キャリパー形深鉢が大部分であり、隆起線が主体になっていることから大木8a式としたが、やはりその多くをより古い大木7b式に比定する考え方もあり断定はできない状況にある。本遺跡の5類土器のa～eのグループ内には、より古いもの、より新しいものを含んでいること、文様帶の変遷や渦巻文のあり方、器形の吟味などさらに検討を加えなければならない問題点を多く残している。5類土器に類似した土器群は、前述の縄文中期遺跡で多量に出土しているが、編年上の位置づけには、見方が分かれているようである。

6類土器は口縁外反する深鉢を包括してある。撲糸圧痕文のあることから6類aは大木7b式に、又6類bは胴部にめぐらす平行沈線文から大木8a式にとそれぞれ比定される。6類cは隆起線や沈線を用いており、大旨大木8a式に含めて良いだろう。従って6類aと6類c₁に見られる口唇部の小波状貼付文は大木7b～大木8a式の両時期にわたって用いられたものと考えられる。6類c₄は大木8b式にも見られ、より新しいものととらえた。

7類土器は口縁部屈曲し、渦巻状の突起を4～8個持つ共通の器形を示す浅鉢である。時期差を認めるとすれば、撲糸圧痕文を用いるものが古いと考えられるが、大木7b～大木8a式にわたっているグループととらえておきたい。第64図1、2と全く同形で施文もそっくりのものは樺山、西田、大館町、北館等にあり、日本原始美術^{註(23)}にも紹介されているが大木7b～8aと見方が分かれている。

8類土器は円筒上層b式、同e式などが含まれており、本遺跡の土器群とほぼ並行関係のもので、円筒土器文化圏との若干の交流が想定される。9類土器は地文のみか無文のものであるが、その器形から他類とのつながりを推定できるが、すべてII群土器の器形に通ずるものばかりである。

以上のことから本遺跡出土の土器の編年的位置は下記のようにまとめられる。

早期末～初頭……I群1類 前期後葉（大木5式）……I群2類

中期前葉（大木7b式）……II群1類、2類、4類a、b、5類a、c、6類a

中期前葉（大木7b）～中葉（大木8a）にわたるもの……II群3類、4類c、5類b、d、6類b、c、7類

中期中葉（大木8a式）……5類c₄、5類e

從来から大木8b式といわれるものを少量含むもの……5類d、e、6類c₄

註(1) 青森県上北郡早稻田貝塚 二本柳正他 考古学雑誌 43巻2号 1958

(2) 梨木畠式 日本の考古学II 繩文時代 東北 林謙作 昭53

(3) 神沢海岸遺跡 和田吉之助他、秋田県本荘市 46年4月

(4) 上川名式 宮城県史 昭32. 1

(5) 長七谷地遺跡 青森県教育委員会 55年3月

(6) 大木式土器理解のために(1) 興野義一 考古学ジャーナル13 1967

(7) リ (2) リ 16 1968

(8) 赤御堂遺跡発掘調査概要報告書 八戸市教育委員会 昭50

(9) 東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書 II 岩手県教育委員会 昭54. 3

(10) 盛岡市一本松熊の沢遺跡調査報告 草間俊一他 郷土資料写真集第10集

(11) 東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書 III 岩手県教育委員会 昭55. 3

(12) 東北縦貫道関連遺跡発掘調査報告書。埋文センター報告書第11集 昭55. 2

(13) リ 第7集 昭53.

(14) 崎山弁天遺跡 岩手県大槌町教育委員会 昭49. 2

(15) 岩手県蛇王洞洞穴 芹沢長介、林 謙作 石器時代7号 昭40. 10

(16) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 V 岩手県教育委員会 昭55. 3

(17) 大館町遺跡（盛岡市）岩手大学考古学研究会 1978年

(18) 天神ヶ丘遺跡 岩手県稗貫郡大迫町教育委員会 昭49. 3

(19) 高谷野遺跡 リ 金ヶ崎町教育委員会 1973.

(20) 樺山遺跡調査報告 「北上市史 I巻」緊急調査報告 昭43

(21) 東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書 V 岩手県教育委員会 昭55

(22) リ X リ 昭56 発刊予定

(23) 日本原始美術 1、繩文土器 講談社 1964

4 石器の組成と石材について

発見された石器は、石核、剥片等の素材を除いて232点である。ほとんど生産用具であるが、この他には滑車状石製品、有孔石製品、線刻を有する石製品、石剣などの装飾品、祭祀儀仗具がある。数は9点と少ない。生産用具を用途別にまとめると、狩猟、漁撈具(石鎌、石錐)、穿孔を目的とした工具(石錐様石器、刺突具)、切削、剥搔機能を有する搔器類(石匙、石箆状石器、搔器、削器、使用痕を有する剥片等)、伐採、切断あるいは土掘りを目的とした打割具(磨製石斧、打製石斧、石鍬、小型磨製石製品)、調理加工用の粉碎具(磨石、凹石、石皿)となる。この組成比は穿孔具1.8%、漁撈具0.5%、狩猟具1.4%、搔器類60.5%、打割具17.9%、粉碎具17.9%である。穿孔具及び狩猟、漁撈具が極めて少なく、打割具、粉碎具がそれに続く。反面搔器類が過半数の圧倒的多数を占めている。

中期前葉から中葉にかけての主な遺跡の組成比は、下図に示した如く全般的に穿孔具が少なく、搔器類が多い。粉碎具は12.5~29.3%でそれほど多くはない。漁撈具では、西田遺跡、狩猟具では大館町、北館遺跡、打割具では梅ノ木、西田遺跡が比較的多く一定していない。

これらの中には當遺跡は狩猟、漁撈具が極端に少なく、搔器類が多い。狩猟、漁撈具の少なさは狩猟、漁撈に対する生活依存度が低かったことを示すと考えられるが、狩猟具にあっては「行動と共に移動する性格」をもっていると考えられており、即断できない。しかしその出土頻度は群を抜いて少なく、ある程度生活形態を示唆していると推察される。

漁撈具の少ないものには大館町、北館、大地渡遺跡があり、狩猟具の僅少なものには中荒巻遺跡⁽³⁾がある。それほど特異な例ではない。搔器類の多さは石箆状石器の比率によると見られる。石箆状石器は早期に多く、晩期に少なくなる傾向にあり、當遺跡の23.8%は大渡野遺跡の39%に最も近い。当地区では早期末から前期初頭にかけてのI群1類土器が出土しており、それに符合していると考えられる。

石器組成から當遺跡をまとめると、早期的要素を多分に含んだ中期前葉から中葉にかけての狩猟、漁撈具の僅少な例となろう。

遺 跡 名(時 期)	総数	穿孔具	漁 撈 具	狩 猎 具	搔 器 類	打 割 具	粉 碎 具
大館町遺跡(7a ~ 8a)	254	4	34.6(88)	32.3(82)	5.1	25.2(64)	
北館 遺 跡(7a ~ 8a)	297	3.0	24.9(74)	54.9(163)	4.7	12.5(37)	
梅ノ木遺跡(7b ~ 8a)	223	1	60.5(135)	17.9(40)	17.9(40)		
西田 遺 跡(7b ~ 8b)	257	7.0(18)	10.1(26)	36.6(94)	175.(45)	27.6(71)	
大地渡遺跡(7b ~ 8b)	789	8.9(70)	57.9(457)	3.4	29.3(231)	100%	

註 大館町遺跡は「大館町遺跡」1978の本文及び実測図より算出、北館遺跡は「北館遺跡、伝大手門遺跡」(東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書V所集)の本文、実測図及び観察表より算出、西田遺跡は「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VI」の本文、実測図、石器観察表より算出、大地渡遺跡は「大地渡遺跡」(東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VII所集)の石器組成集積グラフにより算出したものである。

使用されている石材は25種である。剝片石器は12種で泥岩類（珪質、硬質、凝灰質）と凝灰岩類（石質、泥質、珪質石質）が56.0%、35.5%で大多数を占める。この他には石英、鉄（質）石英、松樹石、黒曜石、流紋岩、粘板岩等がある。礫石器（磨製石器を含む）では15種で、凝灰岩類（淡緑色、濃緑色）、砂質（淡緑色細粒、淡緑色中粒、濃緑色粗粒）、角礫（緑色、淡緑色）、流紋岩質）が29.6%、複輝石安山岩24.7%、粘板岩類（粘板岩、粘板岩ホルンフェルス）が23.5%、プロピライトが13.6%と比較的多い。この他には珪質泥岩、流紋岩、雲母片岩、角閃石黒雲母花崗岩等がある。

これらの産出地は佐藤二郎氏によると、奥羽山地、和賀川上流、夏油川上流に比定されており、身近かなものを選択利用したことが知られる。

なお、石器の組成については相原康二氏の指導、助言によるものであり、縄文時代の全般について大渡野遺跡に詳述されているので、それを参照されたい。

- 註(1) 組成比は生産用具についてである。但し、いずれにおいても他との関係から植石を除いている。これは後出の大渡野、東裏遺跡についても同様である。
- (2) 西田遺跡 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VII、昭和55年3月 岩手県教育委員会
- (3) 中荒巻遺跡 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X 昭和56年3月 岩手県教育委員会
- (4) 早期の大渡野遺跡では39.0%、晚期の東裏遺跡では1.9%である。前者は大渡野遺跡（東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II）第5表II b層より算出したものであり、後者は東裏遺跡（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VI）等67表より算出したものである。

5、石匙の形態について

(1)石匙の刃部

石匙の刃部は、一般的には調整剝離されたものをさし、認められない場合には未成品として扱われている。^{註(1)} 当遺跡においても刃部調整の施されないものが2例存在し、これから刃部加工されるものであるならば未完成品と言えるものである。しかし、横形の36は左右両先端に摩耗痕をもち、対辺には細かい破碎痕が観察されるもので、明らかに使用されたことを示している。このことは刃部調整されないが、使用痕を有する点で、刃部としての機能をもっていたことを意味し、完成品であることを物語ると考えられる。

^{註(2)} このような例は上深沢遺跡に1例みられるのみで極めて少ない。同報告書では「調整剝離が加えられない刃部」として使用痕観察が行なわれており、二次加工されない刃部の存在を間接的に指摘している。類似例の少なさは使用痕について記述されたものが少ないので、使用痕観察を行ったならば、類例が倍加するものと推測される。刃部加工の施されないものは少なからず発見されており、上記のことを示唆している。

刃部は用途によって大きく左右されると考えられるが、ここで使用法について検討を加えておくことにする。石匙の用途は「皮剥具」あるいは「動物の皮を剥いだり肉を切ったりする小刀」などと考えられており、その機能は切削器的なものと捉えられている。^{註(4)} 上深沢遺跡でも対象

物は不明としながらも使用痕の観察と実験結果の一一致することから、切削器的機能を想定しているようである。当遺跡では使用痕、刃部角度等の観察から検討することにする。

使用痕は摩耗痕と破碎痕を観察した。摩耗痕は刃部先端部（縁辺部）と調整剝離面の稜線で顕著に認められ、ほとんど調整面側に限定される。破碎痕は主に調整剝離面側の縁辺で見られ、刃部に対してほぼ直角に形成されている。このことは使用に際して対象物が常に調整剝離面に接していたことを示し、刃部先端部から稜線方向（直角方向）に動いたことを意味し、搔器的用法を物語ると推定される。また、刃部には片面加工、両面加工があって、後者は削器的機能が想定される。しかし、刃部角は下表のとおりほとんど一致しており、差異は認められない。

片面加工	縦 形	33~70°	横 形	45~54°
両面加工		39~69°		39~63°

さらにまた、鋭利なものと鈍角なものが混在するが、前者が削器的機能が予想される。だが、前述の使用痕観察では差異は認められなく、削器的使用法はとられなかつたと考えられる。このことは刃部形態、全体的形状においても同様であり、差異は認められない。

以上のことと総合すると、その機能は削器的機能を完全に否定するものではないが、搔器的使用法がとられたと理解される。

- 註(1) 東裏遺跡 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VI 岩手県教育委員会 昭和55年
- (2) 上深沢遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書I 宮城県教育委員会 昭和53年
- (3) 各遺跡1ないし数点含まれている。
- (4) 機能について「上深沢遺跡」(前掲)でまとめているので、それを参照した。

(2)刃部再生について

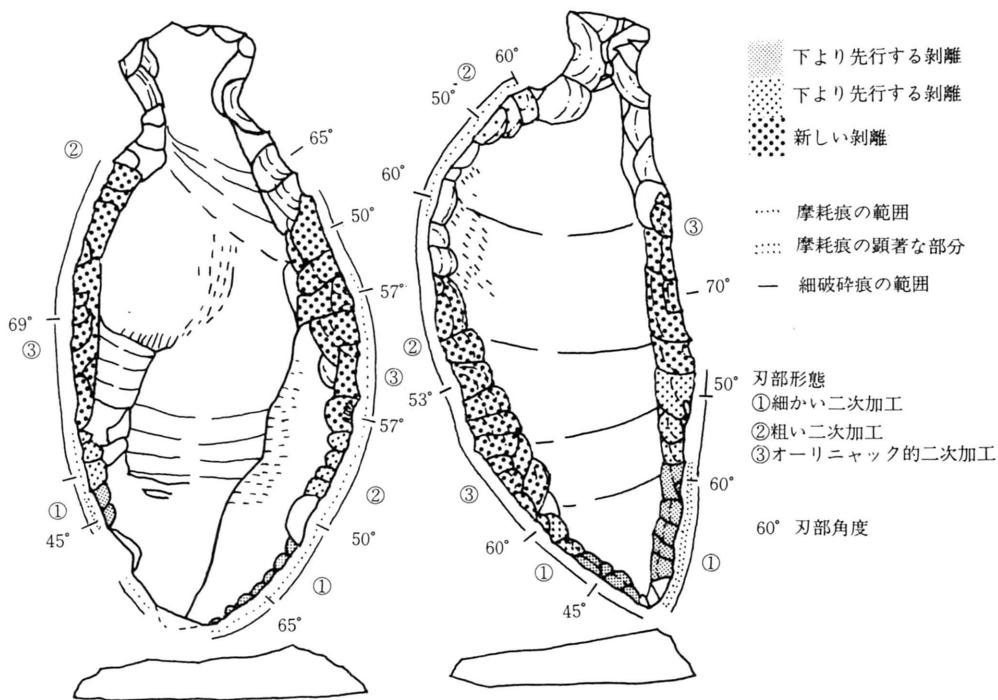
石匙の機能は搔器的なものが想定されるが、その使用には刃部の摩滅あるいは油脂等の付着などによって使用不能となることが予想される。この時、製作、使用、廃棄がそれぞれ1回限りであるならばその石匙は機能を失ったことになり、廃棄されることになる。

ところが、剥片石器の刃部形成は調整剝離によるものであり、使用不能となった刃部は剝離加工を加えることによって機能回復することができる。磨製石斧では研磨による刃部再生のはかられたものが発見されており^{註(1)}、剥片石器の場合には特に刃部再生について記されたものではないが、リオ・グランデ平原のスクレパーの使用痕を観察したヘスター氏によると、38例のうち3例には「使用による刃部の鈍化を再度リタッチを加え鋭くしたとみられる部分がみられる」と報告されており^{註(2)}、刃部再生の可能性が示唆されている。

本遺跡では1側縁における刃部形態、刃部角度、摩耗度の異なるものが観察され(16、28、33など)、刃部再生によるものではないかと考えられる。これらのものは先端部付近が細かい二次加工、中央部が粗い二次加工、基部近くがオーリニヤック的な二次加工で、基部ほど複雑な加工が施され、刃部角度では先端部付近、中央部、基部近くが45°~50°~69°(33a)、45°~53°~60°

(28a)で先端部が鋭くなっている。素材の厚さでは先端部付近が薄く基部近くが厚い。剝離順序では基部近くより中央部が先行し、中央部と先端部では摩耗のため不明であるが、素材が薄く刃部角が小さく、細かい二次加工であることから先端部付近が先行すると推測される。摩耗度は先端部付近の剝離単位が明瞭ではなく(33)、中央部では稜線が摩滅しており(28、33)、基部近くではほとんど摩耗していない。(33)。これをもとめると先に加工された先端部ほど摩耗度が顕著に認められることになる。

先端部付近の顕著な摩耗度は主に先端部使用を物語ると考えられている。しかし、先端部加工された22は各辺によって摩耗度が異っており、刺突的に使用されたものではないことを示している。また、他の例でも細破碎痕が側縁全体に認められ、必ずしも先端部使用を意味するものではないことを物語っている。破碎痕が側縁全体に認められ、摩耗痕が先端部ほど顕著なのは、先端部付近が刃部形成されたまま継続使用されたことを意味し、側縁が刃部再生に伴って剝離されたためと考えられる。先端部は刃部再生されなく取り残されたため摩耗度が増大し、側縁は常に新しい刃部に置き換えられた結果、摩耗度が少なかったものと推察される。すなわち側縁は再生によって古い刃部が剥落したもので、先端部付近が取り残されたものとみられる。



第 VII 地 区

以上のこととは先端部付近の加工が単純1回限りで、刃部角が素材に近い鋭利なものと符合しており、剥離順序が他より先行していることに合致している。

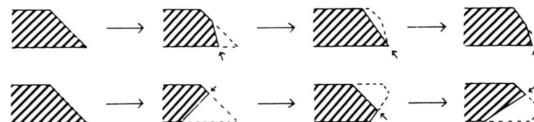
一般に摩耗痕は使用頻度の増大によると考えられているが、刃部再生の場合は使用頻度の高いものほど剥離加工されるものであり、摩耗度の顕著な先端部付近は脇役的存在でしかなかったものと理解され、前述の先端部使用をねざしたものではなかったことに一致する。

以上見てきた如く、同一側縁に刃部再生が行なわれていたものと推測される。

では刃部再生はどのようにして行なわれたものであろうか、金属利器における再生は砥石等で研ぐことである。剥片石器の刃部加工は押圧剥離によるものであり、再生も同様の調整剥離によるとみられるが、想定される方法には2通りがある。

①は片面加工を繰り返すもので、刃部形態は細かい二次加工のものが粗い二次加工、粗い二次加工のものは細かい加工が施されてオーリニヤック的な二次加工に変化する如く、順次粗い二次加工→細かい二次加工→粗い二次加工→…と交互に繰り返すものである。刃部角度は粗い剥離に対する細かい剥離が鈍角で、加工が進むに従って鈍角→鋭角→鈍角→…と変化すると見られ、素材の肥厚に伴って全体に鈍化すると見られる。

②は前述の片面加工を裏側から行なうもので、結果的には両面加工となるものである。しかし、その加工は背面あるいは腹面の片面からのみ施すもので、時間差を有するものである。基本的には交互に加工するものであるが、刃部形態等の関連から必ずしも交互とは限らないようである。以上のことを図に示すと下図のようになる。



註(1) 当遺跡の150は破損した刃部を研磨している。

(2) 技法と機能 藤本 強 日本の旧石器文化5 1976 雄山閣出版KK

(3) 上深沢遺跡（前掲）では「対象物にあまり深くさしこまない状態で全般的に強い抵抗を受ける運動の存在を示している」としており、刺突具的な機能を想定しているようである。

(3) 使用頻度と形態について

刃部再生は剥離加工によってなされるものであるが、1回の加工は僅かながらも形を変える要因となっている。その繰り返しは次々と打ち欠いていくものであるから素材を減ずることになり、ひいては全体的な形態変化をきたすことになる。即ち、使用頻度の増大は剥離加工を多用することであり、素材の矮小化、刃部の肥厚化を促し、刃部角がより鈍化することになる。

このことは1側縁についてのみ認められる現象ではなく、各辺あるいは個体間においても同様に考えることができよう。すなわち、各辺あるいは個体ごとの刃部形態、刃部角度、摩耗度等の違いは刃部再生による差異と置き換えることができる。

一方、石器は「製作され、使用され、廃棄されたものである」という。石匙も石器の1種であるから当然、製作時形態、使用時形態、廃棄形態の3形態をもつことになる。ただこの時、製作され、使用され、廃棄されるサイクルが1回限りであるならば、製作時形態と廃棄形態とが一致し、製作意図がそのまま廃棄形態に反映されることになる。ところが、石匙は刃部再生によって微少づつではあるが変化するものであり、製作から廃棄に至る変遷を経ることになる。

刃部再生における製作形態は、その石器の完成を示すもので、使用されないものを指すと考えられる。しかし、現実には使用されたかどうかは非常に識別困難であり、原初形態に近いものを指す。梅ノ木遺跡では、刃部加工の施されないもの(35、36)、行なわれたものでも一部分のもの(11、13、29)で、全般的に粗雑なものが含まれる。

使用時形態は製作時形態と廃棄形態をつなぐもので、素材に近いものから、大きく変形しているものまでほとんどのものが含まれ、並べると連続するかのように見える。すなわち、刃部再生の頻度によって形状が規定されるものであり、刃部再生の手法によっては、両刃的なものが産出されることになる。これが使用期間における形態変化であり、使用時形態と理解される。

廃棄形態は再生不可能で使用に耐えないもの、当遺跡では10、21が想定される。ただし、最終形態は理論上のものであり、廃棄行為はそれ以前に行なわれる可能性があって必ずしも一線をもって区別されるものではない。

以上見てきた如く、刃部再生は全体的形状の変化につながると推察され、石器の属性では製作時形態、使用(時)形態、廃棄形態の変遷をたどると見られる。この変化は、縦形石匙の場合は主な使用部が両側縁にあり、側縁の素材を減ずることになり、より縦に細長く変化すると見られ、横形石匙の場合には対辺にあり、より背の低い横形に変化すると推測される。この時、刃部再生の繰り返しは素材を刻々と変化させるものであって、中間形態としての各種のバリエーションを創出することになる。また、刃部再生の手法によっては、両面加工的なものが産出されることになる。この中で、素材に近いものは使用頻度の小さいことを意味し、素材形態の推定困難なものはかなり再生されたことを示すと推測される。

注(1) 石器時代の世界 藤本 強 教育社歴史新書

(5)まとめ

石匙の形態には種々のものがあり、その中間形態が多く分類困難なものも少なくない。形態の違いは使用目的、用途、使用対象物等によると考えられているが、これは製作、使用、廃棄のサイクルを1回と考え、発見されたすべての遺物に製作意図が反映されていると捉えたためである。しかし、既述の如く石匙は刃部再生によって形態変化すると見られ、製作、使用、廃棄形態と変遷するものと推測される。すなわち、石匙の形態は素材に大きく左右されるが、使用頻度の増大に伴って縦形はより縦に細長く、横形はより背の低い横長に変化するものと推察